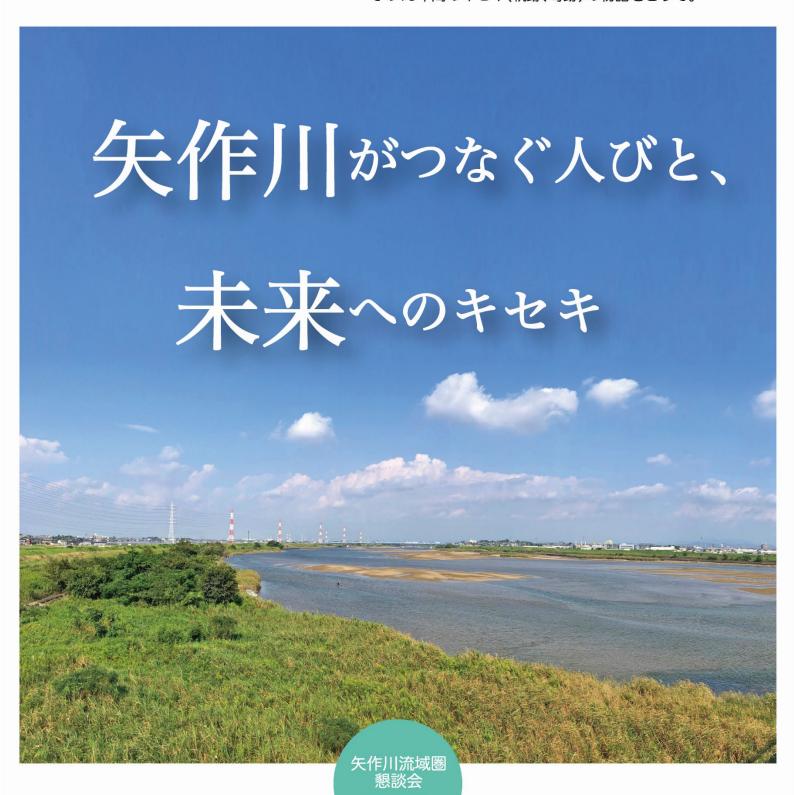


山から海まで、流域圏の課題を解決しようと集まった人びと。 その10年間のキセキ(軌跡、奇跡)の物語をどうぞ。



**2020**年

矢作川流域圏懇談会 座長 辻本哲郎

# はじめに

新幹線で渡る矢作川は白い砂州と緑のやなぎのきれいな川。名古屋大学に 赴任して(1997)、河川生態や治水などの話題でこの矢作川と付き合いだし て二十数年になった。実はそれ以前にも、スイスの水制工法をいち早く取り 込んだ矢作川の多自然川づくりの視察に金沢から来た(1995)。その折、矢 作川研究所の田中蕃氏らと知り合い、外目からはきれいな川と見えた矢作川 も様々な環境の課題があることを教えてもらい、アユの生息に有害なカワシ

オグサの異常繁茂を土砂を流して抑制するという試みに、黎明期の「河川生態学」的アプローチから共同させてもらった縁がある。

2000年の東海豪雨(この流域では恵南豪雨)では、矢作ダムの能力を超える洪水への対応(「但書き放流」)、発電ダムが連続して流下能力不足の川沿いでの苛烈な氾濫、豊田市内でも堤防を越える状況。また、山地流域は脆い風化花崗岩からなり、沢抜けによって土砂・流木が河道に流入、河川構造物に引っかかっての水位上昇に伴う氾濫、矢作ダムの貯水池にはおびただしい量の土砂が堆積した。このように豪雨で一気に荒廃する河川・流域を目の当たりにした状況で、環境も視野に入れた河川管理を目指す97年の河川法改正を背景とした河川整備基本方針、河川整備計画策定の議論に参加することとなった。

河川整備計画の議論のための流域委員会(2003 ~ 2009)を組織する前に「矢作川の環境を考える懇談会」(2001 ~ 2002)、矢作川流域の様々な課題を、関わる当事者間だけの交渉でなく、多くの関係者が並ぶ円卓で話し合う基盤が醸成され、その流れを流域委員会が受け継いで整備計画を議論。しかしながら、整備計画は流域・水系のほんの一部である直轄区間の整備にかかる計画。担当者は直轄区間の整備にばかり気を取られていたことは確かであったにしても、治水はもちろん、森林山間地から三河湾域まで流域の環境も生活も、直轄区間の健全さが基盤のはず。とはいえ、地域の具体的な要求には基盤の上に地先に密着した施策が必要なのだが、河川整備計画の枠組みではそこまで手が出せない。一方、地先だけでやろうとしてできるものでもない。こうした水系・流域の問題解決への道筋を何としてでもつけたいということで、整備計画に、流域の様々な地域の住民、様々な組織や機関が、学識者も交えて情報共有・意見交換し、課題解決法を模索する場としての「流域圏懇談会」(仮称)という斬新な枠組みを示唆、2010年に設立を見た。

山、川、海という対象空間を相手に、市民、学識者、行政と様々な立場の共同のもと、それぞれの空間で取り組むべき課題、それを解決するために必要な情報収集や知識・技術の学習、またそれ以上に仲間意識の高揚など、全国的にもまれな活動が、発足以来 10 年にわたって続けられてきた。学識者も、山、川、海の機能、社会との関わりなど、その仕組みやあるべき姿を提示しようと懸命の努力を続けてきたし、河川事務所は学識者、関係機関、市民のやる気と行動を支え、また様々な機関の協力も得られた。そして何よりも、市民が行政や学識者に振り回されている(それが決して悪いことではない)だけでなく、しっかり自覚でき、むしろ行政や学識者を引っ張っていく気概が育ちつつあると感じる。矢継ぎ早に政策がうたれる(だからと言って真の前進が確保されたわけでもない)従来型の行政に比して、あゆみは遅くとも着実な「実」を結ぼうとしているに違いないと感じるのは筆者だけではないだろう。

# 10 年を迎えて



国土交通省 豊橋河川事務所長 小林賢次

矢作川流域では、過去から住民が一体となって流域圏という考え方のもと、様々な諸問題に 取り組んできた歴史がある。

我々河川管理者としても、矢作川における治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理等の 諸問題を解決し、整備計画の目標を達成していくため、"流域は一つ、運命共同体"という共 通認識を持ち、調和のとれた流域圏全体の持続的発展を目指している。

そのためには、学識者や流域圏で活動している各種団体、国、県、市町村の関係行政機関が、 それぞれの役割について認識を持ち、互いに連携して諸問題の解決に取り組むことが必要であ ると考える。

そういった背景を踏まえ、今後の矢作川の整備内容を決める流域委員会にて、様々な議論を重ね、平成21(2009)年7月に策定された「矢作川水系河川整備計画」には、下記のように他の河川では見られない、特徴的なキーワードの記述がある。

「矢作川流域圏に関係する各組織のネットワーク化」 「川づくり、森づくり等の活動に関する情報発信」 「行政、住民、学識者等が情報共有、意見交換」 「連携を強化」 「住民参加を促進」 「課題を解決するための場」

「流域は一つ」の考えのもと、平成22(2010)年8月に"矢作川流域圏懇談会"(以下「懇談会」という)を設置し、その中で山部会、川部会、海部会、そして市民部会が開催され、矢作川における課題について、議論や現地での視察を実施されている。

また、各部会において課題や情報を共有することで、矢作川の課題に対し、どのような解決 策がより望ましいか、話し合いを通じて理解を深めている。

我々、河川管理者は、河川管理区間の管理のみを行うのではなく、流域全体の状況を把握していくことは重要なことであると認識しており、懇談会を通して得られる様々な情報について共有することは、大変意義があることだと考えている。

懇談会発足時は、70組織、135名で始まったが、発足後10年を迎えた令和2(2020)年7月には、92組織、386名と増加しており、多くの組織や人びとに参加いただいている。これは、懇談会に参加された皆さまが「懇談会は有意義である」と認識されている証だと思う。

今後も、懇談会が情報共有やネットワークの拡大により、課題解決に向けた話し合いの場と して活動していただけることを希望している。

# もくじ

# はじめに

# 10 年を迎えて

プロ	10-	-グ	矢作	川及び	ř流域 <i>0</i>	の概要		•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	• • • • • • •		1
第 1	章	わた	こしの	矢作川	流域特	勿語	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••		4
	近藤	朗·														5
	●今村	豊・							•••••		•••••		•••••	•••••		• 11
第2	2 章	矢作	川流	域圏悡	器談会の	とは	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••		· 16
1.	. 矢作.	川流均	或圏懇	談会と	は			• • • • • •			•••••				• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• 17
2.	.組織	の <u>立</u> っ	ち上げ	と再構	築		•••••	• • • • • •			•••••				• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• 18
3.	再構	築かり	ら将来	<b>\\</b>			•••••	• • • • • •			•••••				• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	· 21
4.	. 懇談	会 10	年の流	動マ	ップ …	•••••	•••••	• • • • • •	•••••	• • • • • • •	•••••		•••••	•••••	•••••	· 23
第3	3章	各部	『会 10	) 年の	ふりか	えり	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	• • • • • •	· • • • • • • •	· 26
1.	山部	会 10	年のふ	ふりかれ	えり …			• • • • • •								• 27
2.	川部	会 10	年のふ	ふりかれ	えり …			• • • • • •								• 33
3.	海部	会 10	年のふ	ふりかれ	えり …			• • • • • •								• 41
4.	市民	部会	(市民	会議)	10年の	つふりフ	かえり									• 45
5.	. 流域	圏懇	談会の	全体像	から各	部会属	展開と流	<b>流域</b> 返	連携を	探る	•••••	• • • • • • • •				• 47
第4	4章	想し	いの源	流を招	な 「	キール	パーソ	ンヒ	アリ	ングュ	J	•••••	•••••	• • • • • •	•••••	• 52
					<b>事例集</b> /											
					ふりか											
					!い手づ											
3.	事例:	集取相	材先団 <sup>,</sup>	体 活	動カテ	ゴリー		• • • • • •			•••••	• • • • • • •			•••••	· 105
4.	事例	集かり	う見た	矢作川	流域年	表		• • • • • •	•••••		•••••	• • • • • • • •	•••••	•••••	•••••	· 109
-	-				<b>バヘ</b> ・											
1.	矢作.	川流均	或圏で	の運動	・活動	の歴史	2と流れ	しを考	ぎえる・						• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	· 115
2.	座談	会~	事例集	をふり	かえり	、懇談	ぬく のえ	未来を	を語る	$\sim$ $\cdots$	•••••				• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	· 120
3.	.新た	なス:	テージ	<b>\</b>												· 135

おわりに

# プロローグ 矢作川及び流域の概要



#### 国土交通省 豊橋河川事務所 佐藤嘉紀

矢作川は、その源を長野県下伊那郡大川入山(標高 1,908m)に発し、愛知・岐阜県境の山間部を貫流して巴川、乙川等を合流し、その後、矢作古川を分派して三河湾に注ぐ、幹川流路延長約 118km、流域面積約 1,830km²の一級河川である。

河床勾配は、山岳地帯で 1/60 以上、矢作ダム下流から 60km 付近までは 1/130~ 1/400 程度と急だが、それより下流では 1/400~ 1/800 程度、その内、明治用水頭首工湛水域は 1/1,600~ 1/2,700 程度と緩やかになる。岡崎平野における河床勾配は 1/1,200~ 1/2,200 程度で、河口部では 1/5,000 以下となり、河口より 7km 付近までは海水の遡上が見られる。

矢作川上流部は、達原渓谷などの深い渓谷や香 嵐渓などの景勝地が多く、また河口部の干潟は、「日 本の重要湿地500(環境省)」に選定されているなど、 美しい景観、豊かな自然に恵まれており、様々な生 物や植物が生息、生育している。

等から取水して多目的に利用されており、その利用率は年々増加傾向にある。 なお、河川の水質は、1960年代の

また、矢作川の河川水は、ダムや堰

なお、河川の水質は、1960年代の 高度経済成長期には、山砂利採取や工 場排水等により悪化していたが、近年 は、生活環境の保全に関する環境基準 を概ね達成している。

矢作川流域は、長野県下伊那地方、 岐阜県東濃地方及び愛知県西三河地方 にまたがり、岡崎市や豊田市をはじめ とする8市2町2村からなり、流域 内人口は約76万人、流域の土地利用は、山林等が約76%、農地等が約19%、宅地等の市街地が約3%となっている。

また、中・下流域では、東名高速道路、新東名高速道路、東海環状自動車道、一般国道 1号、JR東海道新幹線・東海道本線等、日本の産業経済の根幹をなす交通網が横断し、自動車産業を中心として発展した豊田市をはじめとする工業都市が集中している。

なお、流域は、梅雨期及び台風期に雨が多く降り、冬期は快晴で乾燥しやすく、流域の平均年間降水量は、上流山間部で約2,200mm、下流平野部で約1,400mm、年間の降水量の変化は、典型的な太平洋型を示している。

このように、矢作川は、治水面・利水面・河川 環境面において、わが国において極めて重要な河川 である。



矢作川を遡上するアユ(豊田市矢作川研究所提供)



# 矢作川流域のゆるキャラ

# はぎぼう です!





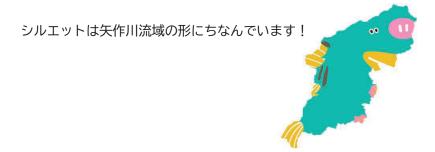
はぎぼうは、カエルの手とアユの口、ヒレをもつイノシシ の子(うりぼう)。

矢作川流域にすむ陸生、両生、水生の生き物を組み合わせ、 流域の自然の豊かさを表しています。

背中の模様は「川」の字。

ふだんはぼーっとしているけど、矢作川のこととなると鼻 息をフンフンさせながら熱く語る矢作川オタクです。







# 第1章

# わたしの矢作川流域物語



矢作川流域をこよなく愛している2人の方に、 その想いを聞いてみたよ。

# わたしの矢作川流域物語

10 年誌編集委員 愛知・川の会 近藤 朗

#### 1. 伊勢湾の原体験

私の原体験は、伊勢湾台風である。1959年のことだから2歳の頃で明確な記憶もあるはずがないが、母に背負われて水浸しの町をさまよっていた光景が脳裏に焼き付いている。何やら人のようなものが浮かんでいたような気もするが、幼い私は怖いという感覚もなかった。名古屋市南部に生まれ育った私が見た光景ならば、恐らく伊勢湾台風であろう。この災害は全国で死者・行方不明者5,000名以上(愛知県で3,300名以上)の犠牲者を出した戦後の大水害である。当時のわが家の周辺は一面の田んぼだった。

もう一つの記憶、わが家は商売をやっていて、早く3歳頃から幼稚園に行かされたのだがこれが嫌で嫌で、毎日迎えに来るバスに乗るまいと家の柱にセミの如く必死でしがみ付き皆を困らせた。結局私は、幼稚園中退という輝かしい経歴を手に入れた。わが家からその幼稚園に行くまでの間に、天白川へ通じる手越川、扇川が流れており、川の色は赤っぽい紫色だった。沿川は鳴海絞り、有松絞りが盛んな地域であり、だから私は川の水の色は紫色なんだと思い込んでいた。その後通う小学校の校歌は、「扇の川のさざなみに〜」で始まる。

このように川は、災害や生活、文 化などに深く関わるものだと知る。



1959.9.26 伊勢湾台風 海部郡、津島の被災状況



衣浦港と矢作川河口

有松絞り

前置きが長くなったが、ここから私の壮大な流域物語が始まる。このような経験を持つ私が大学で水工学を学び、愛知県土木部の職員として1980年に入庁、大半を河川、防災行政などに携わることになる。何かの因縁だろうか。 入庁後9年間(1980-1988年度)は、工事担当

技師として河川や港湾での護岸工事などに専念す る。海部地域の低平地を流れる日光川水系ではひた すら鋼矢板護岸を打込み、尾張と三河地方の境界を 流れる境川では、上流の西加茂郡三好町(現在のみ よし市) での大規模ニュータウン計画に間に合わせ るため、下流からブロック護岸、橋梁をすごい勢い で改修し続けていた。構造基準書、構造令などがバ イブルであり、これを極めることが技術屋の本分だ と思い何の疑問も抱いてこなかった。その後、衣浦 港務所への異動となり、今度は港湾工事に邁進する 日々を送っていたある時、所内研修が行われた。そ の時見た映像プログラムが、「砂浜がいかに水質浄 化作用があり、かつ極めて生態系の保全に役立って いるのか」を教えるもの。このメッセージは、私に とって少なからず衝撃的であった。ならば砂浜を潰 し海岸に護岸・岸壁をつくり続けている私たちの仕 事は一体何なのか? 河川の水辺も同じではない か? このことはずっと胸の中でくすぶっていて、

> 私が環境のことを意識した最初の瞬間だった。 その後退職するまで海の仕事をすることはな かったが、そもそもなぜあの(自己否定とも 思える)研修プログラムだったのか?



改めて調べてみると、三河湾の水質等環境問題が 顕在化し、愛知県での海域環境改善を目指した三河 湾でのシーブルー事業を水産課が始めたのが 1987 年、港湾課が 1991 年開始となっていた。私が港務 所にいた頃は、(当時知らなかったが) 覆砂などの パイロット事業を行っていたようだ。そうか、動機 はこれだろう。海域での環境悪化は、当然事業が始 まるずっと前から始まっていたはずである。1970 年頃より三河湾の埋め立てがどんどん進み、干潟や 藻場などの面積も減少していった時代であった。

時代は昭和から平成へ、1989年、私は初めての 県庁、砂防課勤務となる。川から海へ、そして山へ と水文学のような異動であった。ここから矢作川流 域との関わりが深くなっていくが、この年9月20 日にいわゆる「元年災」、恵南東加茂豪雨災害が発 生する。東加茂郡旭町(現在の豊田市旭地区)を中 心に大規模土砂災害に見舞われ、これは後に激甚災 害に指定されるが、幹線道路が寸断され陸の孤島と なった旭町に山道から入り、その時に見た土砂まみ れの町の光景は凄まじいものだった。災害関連の事 業申請、査定、現場詰所の開設、応援体制の構築な どに奔走し、私自身も一時詰所で寝泊まりし対応に あたった。この災害を皮切りに、私は平成時代の主 要災害、2000年東海豪雨など全てに直接関わるこ ととなる。

私たちが災害から学ぶことは多い。



1989. 平成元年災害 旭町の状況

#### 2. 矢作川へ

砂防課にいたのは5年間(1989-1993年度)であったが、当時の土砂災害対策箇所の整備率は20%にも至っていない。しかも危険箇所を把握する調査を5年ごとに更新するも対象箇所は増える一方であった。これら全てを整備するには、予算的、物理的にも何百年かかるのか。

一方、必要な箇所、谷筋全てに砂防ダムを設置し、山がコンクリートで覆われる光景も異様で、あり得ないと感じていた。本来は山の荒廃を防ぎ緑で覆われるような健全な森をつくらなければいけないのではないかという疑問が湧いてくる。ダムは森林施業へのアプローチも分断してしまうことがある。私自身は、おそらく土木事業だけによる力業だけで解決できる課題ではないのだという結論に至った。

さらに、ちょうど 1992 年が、いわゆる 47 災害 から 20 年という節目であったことから、当時の記録をたどりパンフレットを作る作業を行い、土砂災害に遭い親を失くした子どもたちの作文などを読みあさった。愛知県だけでも 70 名が犠牲となるが、各地で 400 名以上の犠牲者を出しており、全国的にも最初に警戒避難体制の重要性が提言された災害である。1999 年、広島を中心とした土砂災害を契機に、警戒避難や開発抑制まで踏み込んだ「土砂災害防止法」が施行されるのは、さらに 2001 年まで待たなければならない。



1972. 昭和 47 年災害 矢作川流域(豊田市)にて

衣浦港や砂防課での経験から、愛知県入庁時の漠然とした考え、予算や時間はかかるけれども河川など今の土木事業を進めていけば、いずれ良い社会が構築されていくだろうとの思いは、少しずつ揺らいでいく。ならばどうすれば良いのか、その後ずっと考え続けることとなる(退職した今でもである)。

1990年、国(当時建設省)は、河川行政の転換 に舵を切り、河川環境にも配慮した河川改修に向け 「多自然型川づくりの推進について」の通達を出す。 その流れをいち早く取り入れていたのが豊田市であ り、愛知県、矢作川漁協も含めた「矢作川環境整備 計画検討委員会」メンバーが、ヨーロッパ(ドイツ、 スイス) での近自然河川工法の視察を行い、直ちに 豊田市は加納川などで、愛知県土木事務所は矢作川 古鼡にて水制工群を整備した(1991年~)。この 近自然視察を案内されたのが、西日本科学技術研究 所(高知県)を主宰する福留脩文氏であり、その 後の豊田市内での川づくりにおいて交流し、関係を 深めていったのである。なお、彼は建設省官僚・関 正和氏(著書『大地の川』等)などとの交流を通し、 日本への多自然型川づくりの導入にも大いに貢献さ れた方である。



福留脩文氏。惜しまれつつ 2013.12 月逝去された



1991 年の近自然視察を著した 『ヨーロッパ近自然紀行』 著者 新見幾男氏

私自身は1994年、この豊田土木事務所(現在の 豊田加茂建設事務所)に異動となり、当時の熱気の 中に放り込まれることとなるが、今まで取り扱うこ とのなかった河川環境と向き合い学ぶ日々は新鮮で あり、それまでくすぶっていた悩みからすると、妙 に腑に落ちることが多かった。河川で扱うべきテー マは多岐にわたり、総合力と柔軟性が求められ、市 民や多様なセクターとの合意形成も不可欠、そこで 従来にない様々な試みを展開することとなった。 当時の取り組みや試行錯誤の数々は語りつくせないが、豊田市で特筆すべきは、当初第3セクターとして1994年に設立された豊田市矢作川研究所の存在であろう。多自然型川づくりの推進に関しては、豊田市が整備した太田川での近自然工事の生物モニタリングを実施する他、矢作川・お釣土場の竹林・河畔林整備の技術的指導を地元のおじちゃんたちに行い、良好な河川空間整備を実現させた。



矢作川・お釣土場の河畔林整備 ~竹林の管理手法を確立 2007 年土木学会デザイン賞受賞

#### 3. 矢作川に学ぶ

この豊田土木事務所時代(1994-1996 年度)の経験は、私の河川管理者としての原点ともいうべきものとなった。多自然型川づくりの推進のみならず、市民協働の分野でも「古鼡水辺公園愛護会」を皮切りに数々の愛護活動が展開され、その集大成というべき存在が 1995 年に近自然で整備された豊田市「児ノ口公園」であろう。暗渠だった五六川を太陽の下に再生、住民参加による整備と管理を行うなど、当時としては画期的なものだった。児ノ口公園は、今も色あせない。豊田市の近自然推進に尽力された木戸規詞氏(元豊田市職員・近自然視察にも参加)、児ノ口公園愛護会・成瀬順次会長などの不断の努力により、ここは多くの都市市民にも愛されることとなる(2004 年 土木学会デザイン賞最優秀賞受賞)。

極めて先進的な豊田市での取り組みを後追いするかのように、1997年には河川法が改正され「河川環境の保全と創出」を目的化、1999年には河川審議会から「パートナーシップによる河川管理に関する」提言がなされる。私が非常に感動した内容、文章なので、次頁に一部を紹介する。これらメッセージは今も私のバイブルである。



児ノ口公園



矢作川での悪だくみをする3人。筏下り大会復活を願う。上写真中央、右写真が木戸規詞氏(現在は、豊田市を退職)。児ノロ公園で最も名誉ある「ゴールデン軍手グローブ賞」も受賞



#### 「パートナーシップによる河川管理に関する提言」(1999)より

これまでの河川管理は、頻発する洪水や渇水に対して早急に対応を行う必要に迫られたため、効率の良い画一的な手法が優先されてきた。その結果、地域で育まれてきた川の個性や文化が損なわれてしまうことが多かった。また、水質等の河川環境の悪化により、地域の人々は川と触れあうことが少なくなり、精神的にも地域と川の関係が疎遠となった。今後は、地域の人々が川に親しみと誇りを持つことができるよう、河川特性、地域の歴史・文化を踏まえた河川管理を行い、川と地域、人々との関わりを再構築する必要がある。 (中略)

これまでは、河川事業において、市民との合意形成が必ずしも十分でないまま事業が行われ、市民と 行政の対立を生じさせていることもある。これからの河川管理にあたっては、それぞれの河川、地域の 状況をきめ細かく把握し、情報を適切に公開し、双方理解が得られるまで十分に対話し、合意形成を図 ることがきわめて重要である。

1999年より河川課に勤務することとなるが、河川管理というのは実は調停作業なのだと判ってきた。上流と下流、利水者と漁業者、あるいは生き物たちとも、様々な調停を意識しなければならないが、特に重要だと感じたのは物言えぬ者たちとの調停で、河川に依存する生物たち、そしてまだ生まれていないであろう未来の子どもたちの声をも聞くことだと思い至ったのである。この思いはずっと変わらず、河川課に赴任した2年目の2000年9月11日に、あの東海豪雨が愛知県を襲い対応することになった時も、常に意識することとなるテーマであった。

東海豪雨では、新川、天白川など県内各地で甚 大な浸水被害をもたらす。あまり報道されなかった が矢作川流域においても同様である。被災直後、現 地においてヒステリックになった地域住民の方々に 取り囲まれることもあった。「なぜ川があふれるん だ!」との罵声も浴びる。思わず言い返したりもし たが、この時から愛知県職員として、もう何も怖い ものはなくなったような気がする。どんなに頑張っ ても絶対にあふれない川はつくれない。私たち(行政)がなすべきことは、その地域が一体どんなリスクを背負っているのかを知らしめることなのだろう。

最後に矢作川に行った時の話、古鼡水辺公園の下流左岸で畑仕事をしているおばちゃんに会った。「洪水はどうでしたか?」と尋ねると、「また水につかっちゃいましたわ」と笑って膝下あたり(水位)を示された。

後日ここは堤防が低く、越水していたことを知る。



2000年 東海豪雨で破堤した新川

#### 4. 矢作川を礎として

東海豪雨では、矢作川水制工や水辺公園も被災しており、後日地元や漁協含め対策検討会を開くこととなった。古鼡水辺の復旧にあたっては、コンクリート護岸ではなく、水制工などの近自然でやってほしいとの要望。堤防が持ちこたえているなら、ある程度の変状を許容するのも近自然ではないか、しばらく経過を見る「要観察」の選択肢もあったが、実は翌年2001年5月から、ここで市民が集う矢作川「川会議」を開催するのだという。ならば早急に復旧することとし、福留脩文氏にも再び協力を仰ぐ。「古鼡の水制工は、日本の宝だから」と快諾いただき、かくして古鼡の水辺は再生された。

(参考:「東海豪雨のインパクトを受けた愛知県の多自然型川づくり調査」土木学会 2001 年報文(近藤朗))

東海豪雨対応においてはまさしく様々な調停問 題が発生した。矢作川上流域では山地が荒廃し、矢 作ダムには大量の土砂と流木が流入。数多くの災害 復旧事業の展開も相まって、長期間にわたって濁水 が下流へと流れることとなった。矢作川漁協(澤田 壽組合長、新見幾男氏、田中蕃氏)からの要請もあ り、愛知県は建設部、環境部、及び農林水産部(内 水面漁業)が一堂に会しての対策会議を招集し、以 後継続される。当時この問題に関して国交省(豊橋 河川事務所)は少々及び腰であったが、ダムに流入 した土砂や流木の処分が長らくの課題となり、総合 的な土砂管理というテーマを含め、後の矢作川流域 圏懇談会(2010~)の時代にまで引き継がれるこ ととなる。そういった意味で、流域圏全体に目を向 けた懇談会の設立は実に大きな前進だと、私は捉え ている。

矢作川流域以外では、甚大な被害を受けた新川(破堤)・庄内川での激甚災害特別緊急事業(2000-2004年度)と河口にある渡り鳥の飛来地として貴重な藤前干潟の保全という調停、また同時期に進められていた2005年愛知万博計画での海上の森(当初のメイン会場)の取り扱いなどに私自身葛藤していくこととなった。結果として藤前干潟は、激特事業最中の2002年にラムサール条約湿地に登録、海上の森はメイン会場から除外した後、保全対策を進めていくことになった。両事業の調停作業においては、野鳥の会など実に多くの方々を「未来の代弁者」

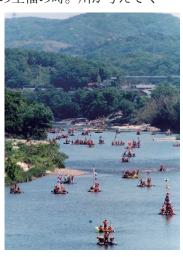
と捉え、議論を重ねさせていただいたと認識している。ちなみに縮小された愛知万博・瀬戸会場での環境保全対策は、矢作川方式(115 頁参照)をベースとしている。

なおこの頃は、様々な巨大公共事業、大規模開発における環境問題がクローズアップされた時代でもある。矢作川河口堰事業(1998年中止)、男川ダム建設事業(2006年 岡崎市合併後中止)、さらに豊川水系では設楽ダム建設事業が反対運動の中、長らく議論されていたが、こちらは 2017年着工に至り、現在工事中である。

河川課を離れ、万博に関わっていた頃、2003・2004年と念願の矢作川筏下り大会に初めて参加する。河川課時代の同僚・その子どもたちと共に、当時小学生だったわが息子も参加させた。竹伐り、筏組み立ての作業から本番の筏下りに至るまで、最初は怪訝そうにした息子も徐々に楽しくなってきたようである。筏に自転車を取り付け、こぐと周りに水を浴びせる仕掛けを取り付けてあったのだが、そのペダルをこいでいる時の、あんな楽しそうに笑っているわが子の顔を今まで見たことがなかった。あの笑顔は今でも私の最高のタカラモノだ。それを見ながらお父さんは、筏の上でうれしそうにずっと缶ビールを飲んでいるだけの至福の時。川が与えてく

れるものは、こういう 時間だ。だから私は川 を守らなければならな い。

その矢作川の筏下り 大会は、1987年に始 まり2006年の第20回 大会で終焉する。私た ちが参加した2年後だ。 一つの時代が終わった ような気がした。



#### 5. 矢作川時代の転換期、流域圏懇談会の時代へ

2001年8月27日、長く1970年頃から続く矢水協時代(115頁参照)をけん引された内藤連三氏が逝去された。まだ69歳である。豊田市・矢作川漁協・枝下用水土地改良区による第3セクターとして出発した豊田市矢作川研究所は2003年4

月に豊田市組織に移行、設立時から研究所を支えた田中蕃氏も2007年5月21日、72歳で逝去される。ちょうど私が10年ぶりに豊田加茂建設事務所に赴任した矢先のことだった。この頃は、近自然ヨーロッパ視察での主役だった豊田市のリーダーが次々と退職していく時期にもあたり、世代継承が大きな課題だとも感じていた。田中蕃氏などの思いを継承されていたのがやはり矢作川研究所で、研究員も皆まだ若く異動もないため継続的な取り組みが期待できた。何より市役所組織としては極めて異例なことではあるが、宮田昌和氏が初期から関わり研究所長となるまで十数年にわたって在籍された意義は大



初音川ビオトープ

きい。当時何気なく見た (逢妻男川)初音川ビオトープの光景と感動は衝撃的で、思わず関わった 宮田氏に電話してしまったほどだ。2003年に造成され、以降継続的に矢

作川研究所の洲崎燈子氏が植生調査をされている。

多くの水辺愛護団体の方々も相変わらず活発に 活動されていたが、いつか確実に高齢化の影響が押 し寄せてくる。地縁的な組織の場合、世代交代もな かなか難しいだろうと予想された。そんな中で、出 会ったのが作家の阿部夏丸氏である。家下川で子ど もたちをたき付け川に放り込ませるといった活動を されていた。「役人は大嫌い」と言われたが、この 年話し合って立護岸の家下川に階段を設置し、お披 露目会を行った。笑ってしまったのが、子どもたち の中には安全な階段を使わず、手すりを下りたりよ じ上ったりするワイルドな奴らもいて、何だか未来 への希望が湧いてきた。なおこの年2007年に阿部 さんは、軽トラを使った私設移動「矢作川水族館」 を始め、これに矢作川研究所のメンバーも加わるの である。そうか、若者たちはお仕着せの活動や組織 を望んではいないんだと妙に納得し、あるべき継承



阿部夏丸氏

とは何かを考えさせ られた。

2007 年当時の豊田市では、かつての熱気が冷めてきたかのようにも見えたが、実はこの頃、矢

作川流域圏では様々な展開が起きていたことを後になって知る。国交省における矢作川での河川整備基本方針及び河川整備計画の策定が進められており、2009年に公表される(名古屋大学 辻本哲郎委員長)。その中で河川区域内だけでは解決できない様々な課題が指摘され、それを議論・共有する場として2010年8月に矢作川流域圏懇談会が設置された。また、流域圏内でも山から海に至る各地で、既存活動にとらわれない新たな動きが芽生えていたのである。このことは、2013年から山村再生及び流域圏担い手づくり調査が展開されたことによって徐々に明らかになっていく。

2010年以降の「矢作川物語」については、この「10 年誌」各章で多くの方が語られており、ぜひご一読 いただきたい。いずれにせよ大事なことは、懇談会 は今までの議論・葛藤・成果を踏まえた上で、次の 10年(未来)とどう向き合っていくのかというこ とになる。そういった意味では、最後にこの10年 間で最も大きな変化が見られた海(三河湾)につい て触れておきたい。あんなに豊かだったアサリの漁 獲量が2014年頃から激減し、潮干狩りもできない 状況となってしまった。また、この頃から海ごみ、 海岸漂着ごみの問題についてはマイクロプラスチッ クの存在を指摘されるに至り、大きな水質問題へと 発展していく。伊勢湾(三河湾を含む)の多様性の 喪失については、10年以上前から言われてきたこ とであるが、現実化・顕在化したのかもしれない。 同様の事(多様性の喪失)は、河川や水辺などでも 起きている可能性があり、我々は次の10年に向け て流域圏を注意深く見守っていくべきであろう。



伊勢湾は既に豊かで はない (海の博物館 のメッセージ)



矢作川含む伊勢湾流域 圏から答志島に漂着す るごみ

水稲に利用されるプラ スチック製肥料カプセ ルが海岸に流れ着く





# わたしの矢作川流域物語

# 山部会 長野県根羽村森林組合参事 今村 豊

#### 1. はじめに

私の矢作川流域物語をこれから始めます。私は長野県の根羽村森林組合職員なので、業務上普段から森林や矢作川の清流、渓谷に接する時間が大変多いです。そして、私の趣味は登山やバイク、山岳路を車で走り回ることなので、業務と趣味がとても近いのが特徴です。業務上で森林を歩き、清流を渡り、山岳路をそれなりのスピードで移動することは、私にとってとても「素敵な時間」を過ごしていることになります。私にとっての「矢作川流域」とは、生きていく中でこうした「素敵な時間」を提供してくれる場所です。

また、林業・森林・矢作川流域の持つ課題を解決していくため、自分なりにドリーマーとして、チャレンジャーとして、プレイヤーとして、マーケッターとして、マネージャーとして様々な視点から活動をしています。もちろん、こんなにたくさんの役割をまともにこなせないので、ちょうど駅伝のランナーのように「木」や「矢作川の流れ」をタスキと見なして、これを絆に、多くの方と出会い、その役割をランナーのように担ってもらい、「駅伝の精神」でその過程も楽しみながら、自分の「素敵な時間」を創り出しています。

# 2. 私の流域活動における目的・戦略・戦術 = 「素敵な時間」の創出

私は矢作川流域を元気にし、魅力的な地域にしたいと思っています。そのために必要なのは、この流域や地域を元気にしたい、魅力的な地域にしたいと願い行動してくれる人です。「地域を元気にしたい人」、「自分の住む地域をもっと魅力的にしたい人」、「人びとが地域を楽しみ、活気にあふれる場所をつくりたい人」、「地域の資源や自分の技術・技能を活かしてここに住みたい人」等、こうした方々がたくさんいらっしゃれば、そして、その方々が団結でき

れば、その地域は相当魅力的になるかと思います。

そこで私が考えるのは、「ではそのような人をどのようにしてこの流域で生み出せばよいのか」、「この流域に住みたいという方々と、どうしたら出会えるのか」、「そうした方々を失望させることなく、どうしたら明日への力になってもらえるのか」ということです。

そのために必要なことは何でしょうか。そのため に行動すべきことはなんでしょうか。

人がその地域を創り出します。そこに住んでいる 人の考えが地域に現れます。ある地域が魅力的に見 えたら、それは同時にそこに住んでいる人が魅力的 だということです。全ての原点は、人にあります。 流域が元気になるか、魅力的になるかの一つの回答 は、どれだけ多くの方がこの流域を元気で魅力的な 地域にしていこうか、と思う気持ちの総熱量にある と思っています。

では、その総熱量はどうしたら上げられるのか、ということになります。皆さんがある場所で生きる時、その場所に住もうと思った時、様々な理想や希望があると思います。そんな時、きっと誰かに「こうなるといいね」という会話をするかと思います。私は、その言葉が全ての原点だと思います。多くの場合「そうだよね、でも私たちではどうにもならないよね」で終わることが多いかと思います。では、それで満足なのか、それで将来も含めて納得できるのでしょうか。

私は「やってみせ言って聞かせてさせてみせ、ほめてやらねば人は動かじ。話し合い耳を傾け承認し、任せてやらねば人は育たず。やっている姿を感謝で見守って、信頼せねば人は実らず」の格言を座右の銘にしています。これらの言葉を自分なりに解釈して実践しようとする時、まず最初に「やってみせ」の部分に大きなエネルギーが必要なことが想像できます。なぜか? 人を動かすには、まず自分が「やっ

てみせ」その相手に何かを与え、相手に何かを「感 じさせないと」動いてくれないからです。人は自分 で興味を惹かれたことにしか反応しません。興味関 心がないことには人は動きません。では、どうやっ て興味関心を持ってもらうよう「感じさせられるの か」?

私は、全ての事象は「相手と出会って仲良くなっ て相手に感じてもらえると、こちらが目的とした相 手の動きが生まれる」と思っています。一番最初の スタートは「出会い」です。ですから「出会い」の 戦略が必要です。それと「感じさせられる」戦略で す。出会うことができなければ、感じさせられるこ とはできません。また、出会う内容が魅力的でなけ れば、もちろん感じさせることはできません。

このように考えてくると、私の流域活動における 目的・戦略・戦術=「素敵な時間」の創出とは、多 くの方々に矢作川流域の魅力に出会ってもらって、 そこから新たな潮流を生み出すきっかけとなる何か を感じてもらうことです。感じてもらう人をどんど ん増やし、その結果として、この流域を魅力的な地 域にすることが私の目的です。地域の魅力は地域に 関わる多くの方々の気持ちの総熱量ですから、大き な熱量のある方は、それなりに地域をリードする

ボーカリスト的な役割を担うことになるし、小さな 熱量の方でも多くの方が集まれば、聴衆として総熱 量は高まります。それはまるで、ロックコンサート のように、「動き出す大きな熱量の渦巻きと潮流」 の発生に結びつくと思います。そう、この大きな気 持ちの熱量の展開とは、いわゆる「ロックンロー ル | っていうやつです。

矢作川の流れや森という魅力的な地域資源のある 矢作川流域というステージで、そこに住む人びとの 「地域を魅力的にしよう」という気持ちで新たな潮 流を創出すること。それは「ロックンロール」で、 私はそんな「素敵な時間」を創出できることに幸福 感を感じています。生きている実感や熱量を高める 仕掛けを使いこなして「ロックンロール」は始まり ます。矢作川流域には、そうした人間が本来持って いる「生きている実感を感じさせる気持ちの熱量」 を高める自然が、私たちを待っています。時に私は、 それを「里山の潜在能力」と呼んで、一見、見過ご してしまうような場所や空間を、魅力的な場面に切 り替えていくように試されていると感じています。 では、たくさんある流域の魅力の中で、その場所と 結びつけて、今後どんなふうに展開していきたいの か、翔んだ夢を語ります。

# **Dream**

#### 【目的・夢】

魅力的な矢作川流域を創造していく人を増やし、その方々の気持ちの総熱量を高めて、矢作川流 域でロックンロール=「素敵な時間」を創出する。あるいは流域市民をロックンロールに巻き込む。

#### ■豊田市(旧足助町)の「香嵐渓」









#### 【希望的戦略・仕掛け】

旧足助町の「香嵐渓」で新緑と紅葉の嵐に打たれて心を 爽やかに青く染め、また、熱く赤く染めて気持ちの熱量を 高める(ときめく情景からの熱量獲得)



#### 【希望的戦術・素敵な時間】

- ①「その時、2人はここで見つめあっ ていた戦術」で爽やかな青い新 緑と燃える紅葉の中を2人の誓 いの場とする。
- ②新緑力と紅葉力に打たれ、いつ も会いに来る「愛しの樹木」を 決めて参加者同士の熱量を高め る。



#### ■根羽村の「浅間つたの滝」



#### 【希望的戦略・仕掛け】

滝つぼに飛び込み、人生に決意する空中ポーズを決めて、気持ちの熱量を高める。(無重力空間パフォーマンスと水との衝撃からの熱量獲得)

#### 【希望的戦術・素敵な時間】

- ①空中で自らの決めポーズを創出し、人生決意度表現 カコンテストで互いに争いながら参加者同士の熱量 を高める。滝つぼでダブルコークスクリューを決め てもらう。
- ②滝つぼ横断ジップラインで究極の人生バランスを追求し、崩れ落ちる時には破滅的なパフォーマンスを示して自然との一体感を獲得する。

#### ■根羽村 根羽ロック



#### 【希望的戦略・仕掛け】

「根羽ロック」で自らより困 とうはん 難な登攀ラインを創出すること で、精神的エネルギーを高める。 (高度感と登攀ムーブ集中度か らの熱量獲得)

#### 【希望的戦術・素敵な時間】

- ①「根羽ロック」に通う旅人の道がより明瞭になる時、 ラインが創出され参加者同士の絆は深まり、参加者 の熱量は高まる。
- ②初登攀者がラインの名づけ親になり、より困難なラインの創出が、多くのチャレンジーを誘い、それらの熱量を高める。

#### ■根羽村 小戸名渓谷



#### 【希望的戦略・仕掛け】

「小戸名渓谷」のせせらぎに身をひたし、または 川べりで、水の躍動感やサウンド・冷たさとの一体 感から気持ちの熱量を高める。(陽光や水流エネル ギー・サウンドからの熱量獲得)

#### 【希望的戦術・素敵な時間】

- ①せせらぎと陽光に身をまかせ、水流を感じることで、 人生の全てを洗い流して、生き方のパフォーマンス を高める。
- ②透明度の高い矢作川源流の流れる水面を見つめて人生の思索を始める。

#### 3. 最後に

私はこの流域の様々な課題に対して、自分なりに ドリーマーとして夢を見て、チャレンジャーとして 様々な取り組みに挑戦し、プレイヤーとして最前線 の立ち位置で実践し大汗をかき、時に戦い、マー ケッターとして顧客に出会い、その意向を捉えて製 品化し、現在の様々な立場で、マネージャーとして 持続可能となるような健全な収支バランスが図れる 組合・NPO経営を目指しています。 なので、気持ちの熱量を高めようとする同志として同じ志向を感じ、少しでも心を揺さぶられた方は、ぜひ友達になって欲しいのでご連絡ください。待っています。メールアドレスは以下です。nebasin@mis.janis.or.jp

### 根羽村森林組合での今村さん



訪問者に根羽村トータル林業の 取り組みを紹介



現場で森林造成試験の紹介



施設内にて

#### 木づかいの PR 活動

2014年に日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部を立ち上げ、木づかいの PR 活動「木づかいライブスギダラキャラバン」を年間 30 回程度開催するようになって、イベントの実施や木のアイテム製作等いろいろなことを依頼されるようになった。特に豊田のまちづくりに関わる若い人たちとのつながりができたのはよかった。豊田のまちなかのイベントに出展したら、木製品のおかげで人が集まり、楽しみや感動が生まれた。(山村再生担い手づくり事例集『その後いかがお過ごしですか?プロジェクト』より)



簡易セルフビルドハウス「3坪の家」



中房温泉の家族風呂「根羽の湯」 (長野県安曇野市)



\* 流域ものさし。矢作川の長さ 118km にちなんで 11.8cm。流域 を学ぶワークショップで参加者 が、矢作川流域の様々な木をモ ザイク状に並べ手作りする

\*がついている写真はフリーマガジン『耕 Life』(こいけや クリエイト)より転載

# 木づかいの PR 活動



\*「木っころ」。『耕 Life』とのコラボ製品



【どこでもシリーズ】









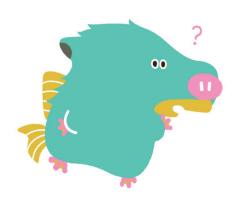


動く木のおもちゃ「スパイラルタワー」

【どこでもシリーズ】 上から「どこでもサウナ」「どこでもブランコ」 「どこでもオセロ・どこでもウッドデッキ」「ど こでももちつき機(\*)」「どこでも足湯」



# 矢作川流域圏懇談会とは



矢作川流域圏懇談会って、誰がやってるの? どんなことをしているんだろう?

# 1. 矢作川流域圏懇談会とは

長野、岐阜、愛知の3県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、 "流域は一つ、運命共同体"という共通認識のもとで様々な課題に取り組んできた歴史がある。

2009年7月、河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記された。これを受けて、国土交通省豊橋河川事務所は2010年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げた。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会、市民部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・ 市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っている。また、部会間の連 携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索している。

#### ■懇談会の目的は?

流域圏懇談会を設立することで、

- ○矢作川流域圏に関係する各組織のネットワーク化を図る。
- ○流域圏一体化の取り組み及び矢作川の河川整備に関わる情報共有・意見交換を図る。

#### ■こんなことやってます!



各部会ワーキンググループの実施



川でのフィールドワーク



山でのフィールドワーク



年に一度の全体会議



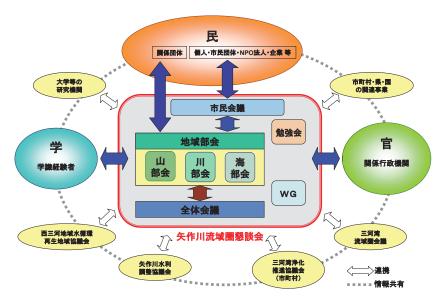
### 2. 組織の立ち上げと再構築

事務局補佐 アジア航測 中田 慎

第1章では、流域という視点での熱い想いが描かれている。ここでは、流域圏懇談会という組織が、黎明期からどのような紆余曲折を経て10年目を迎えたのかについて、事務局の視点から整理したい。特に、矢作川流域圏懇談会は、立場・意見の異なる人びとが集う会であり、このような組織を継続運営することはいくつもの困難な部分を抱えているにも関わらず、10年目を迎えることができた全国的にもまれなケースではないかといえる。

#### (1) 組織における「市民」の位置づけ

当会は2010年8月に設立され、 当初は右図に示すような組織体制をつくって運営を開始した。当初より一貫しているのは、この会が「市民主体」に進められていることであり、この考え方を根づかせたのは市民会議座長も担った黒田武儀氏の主張によるところが大きい。市民会議は、図に示すように学識経験者と関係行政機関を含まないメンバーで構成されていたが、2012年~2017年にかけては、実質的には結果を出すような活動に至らなかった。活動の中心を担う



矢作川流域圏懇談会設立当初の組織図

ファシリテーターが不在となったこと、ネガティブな発言が多く出された時期が続いたこと、決定した三つの流域連携テーマ「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」に沿って進めることにとらわれ過ぎたこと、などが原因となり、会議が膠着状態になったためだ。

2017年、事務局は「目まぐるしく変わる懇談会構成メンバーの自由闊達な意見のやりとりを引き出し、緩いながらもつながりを維持するための組織・体制づくり」という困難な命題について検討を行っていた。その結果、2018年3月の全体会議で「市民会議」を「市民部会」と名称変更することとし、形だけではなく、市民部会が山・川・海の各地域部会に横串を通すような体制の構築を目指すべく、再スタートをきった。また時期を同じくして、それまで山部会がリードしていた流域連携イベントを「市民部会からの呼びかけに変えていこう」という動きとなった。

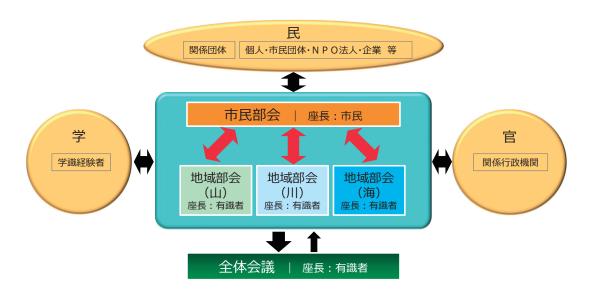
こうして市民部会は各地域部会とともに柔軟に対応できる組織となり、2018年8月より、当初の三つのテーマをいったんリセットして、流域を一つの生態系と捉えた新しい発想での活動に切り替えて、今に至っている。



市民会議から市民部会へ

#### (2) 現在の組織の構成と検討内容

矢作川流域圏懇談会は、2020年7月現在、92組織、386名が登録し、活動している。メンバーは、地域部会(山・川・海)・市民部会に所属し、各々が設定した課題について解決策に向けた情報共有を行うため、ワーキンググループ(WG)、フィールドワーク(FW)を行っている。市民部会は山・川・海の各部会に横串を通すような存在として、主に流域連携に関する課題について話し合い、地域部会合同の勉強会や流域連携イベントへの参加や内容の検討など、外への発信についても取り組んでいる。



部会の構成	活動内容
市民部会	市民がWG(ワーキンググループ)を開催し、主に流域連携に関するテーマを設定し、山・川・海の課題の提起や課題解決に向けたアイデア出し、勉強会の企画等について話し合いを行う。
地域部会	民・学・官の3者がフラットな立場で一堂に会し、フィールドワークを伴うWGを開催し、課題に対する解決に向けた話し合いや情報共有を行う。

現在の懇談会の構成と活動内容

#### 懇談会における部会の構成と活動内容

行事及び会議	内 容
WG(ワーキンググループ)	市民部会・地域部会が実施する通常の行事で、各部会が年間に数回実施する。
FW(フィールドワーク)	矢作川流域の上流から下流にかけて、また三河湾を中心として、テーマに応じた対象箇所 を設定し、現地視察等の調査を行う。
流域連携イベント	市民部会を中心に、流域連携に関わるテーマのイベントについて、主催または他機関が開催するイベントに協賛・参加する。
勉強会 (市民部会の発案に応じて随時開催)	懇談会の中で挙げられた課題の解決を行う場、学びの場として市民部会発の勉強会を行い、 知識の共有と 相互理解を深める。
まとめの会	各部会で1年間に話し合われた内容の総括と、次年度の計画についてとりまとめ、年度末に各々に1回開催する。
全体会議	メンバー全員を対象に、年度末に1回開催する。各部会で検討した課題やその解決手法を 流域全体としてとりまとめ、情報を一元化するとともに、各部会へのフィードバックを行い、 各部会で検討した内容を総合調整する場。

#### (3) 流域連携という視点

実は、流域圏懇談会の立ち上げ当初は、どのメンバーも市民会議や地域部会の勉強会などに携わっていたので、特に「流域連携」を謳うまでもなかったが、2012年度以降に地域部会WGでの個別議論が始まってからは重要なテーマとなる。2011年9月開催の「矢作川の全て」バスツアーに始まり、2017年からの担い手づくり事例集交流会開催に至るまでの連携の流れは、山部会がリードしてきたとも言える。とりわけ事例集交流会は、流域・三河湾内と場所を変えながら開催し、新たなつながりを育んできた。(第3章5「流域圏懇談会の全体像から各部会展開と流域連携を探る」参照)

#### (4) 流域圏懇談会から外への発信

矢作川流域圏懇談会という取り組みを外へ、全国にも広げたいという思いが事務局(豊橋河川事務所)にはあった。初めての外部発信は、2013 年 11 月に事務局(西原均事業対策官)自らがメンバーを引き連れ、第 6 回全国いい川・いい川づくりワークショップ(東京)でプレゼンを行ったことである。結果、見事に入選を果たし、「水と人が山・川・海の流域を繋ぐで賞」のタイトルをいただいた。このタイトルは、懇談会の本質をよく表しているのではないかと思う。さらに 2014 年 6 月には「西の浜エクスカーション」へ出かけ、全ての部会が参加し発信を行っている(48 頁参照)。





第6回全国いい川・いい川づくりワークショップで矢作川流域圏懇談会を PR (2013年 11月 2~3日、国立オリンピック記念青少年総合センターにて)

# 3. 再構築から将来へ

懇談会を運営するということは、ただ場をつくることだけでなく、メンバーの自由な動きを見つつ、それと呼応するように組織を維持・継続することも考えなくてはならない。ここでは、楽しみながら、ときに苦悩しながら進めてきた事務局の10年を整理した。

#### (1) フラットな関係をつくろう

当初は、市民会議が各地域部会をリードし、「アクティビティとして何をすべきか?」といった具体的な解決策を求めるスタイルを採ろうとしていた。地域部会は、山・川・海のそれぞれの課題について、座長を学識者として個人・団体・行政が一堂に会して話し合うメンバーの集合体である。このうち山部会については、立ち上げ当初より明確なストーリーに基づいた議論が進み、それぞれの課題・テーマに対する具体的な解決策を具現化してきた。他方、川部会・海部会では、設定した課題に対する話し合いと情報共有は進んだが、様々な理由から具体的な解決策には到達していない。とはいえ、10年をふりかえると多くの気付きがあり、意見を出し合う、続けていくということの必要性を意識することによって方向性の検討が時間とともに醸成されている。

多様な人材の集まる地域部会のようなグループでは、まず個々のもつ意見を出し合うことが大切であり、 課題の解決は目指すが解決策を出すことはマストではなく、解決を急ぎすぎないことが重要だったといえ る。

一方、関係団体、市村及び県からの情報提供と、矢作川本川とそれを取り巻く自然・社会環境にまつわる最新の事業についての各機関からの情報提供は話し合いにとって必要なファクターであった。全ての人が相対するのではなく、同じ方向を向いているフラットな関係が保たれていれば、楽しい雰囲気の中で新しい情報が得られる「話し合い」ができるのである。フラットな関係にするために、学識者が上位を気取らず、市民に説明する場として認識されていたことも功を奏した。

結局のところ、矢作川流域圏懇談会は民・学・官の所属する組織だが、そこに集まっているのは「個人」であり、それぞれの個の持つ能力が課題に対して必要なパーツであることに気付くことこそが重要であったのだろう。

流域圏懇談会の10年とは、まず、コアになるメンバーに気心知れた関係が醸成され、新たにきた人を 巻き込んでいけるような「雰囲気をつくること」、個々の人間の見えない仕切りを取り除いて「フラットな 関係をつくる」試行錯誤の時間だったのかもしれない。



#### (2) くだけた関係をつくろう

前述してきたように、事務局は、メンバーたちの「話し合い」とは別に、組織の運営に関して別のところで議論していた。

メンバーの関係に目を向けておくことが重要で、そういった目が行き届く規模感が適切だったとも言える。設立時の思惑がどれほど効果を発揮したのかは不明だが、協議会や懇話会ではなく「懇談会」という名前にしたことも一役買ったのかもしれない。懇談会であるからこそ、夜に飲み交わしながら心のうちを吐露することができる関係もつくられる。堅苦しい口の字型の机の配置は緊張感を生むが、時には円卓形式にすれば緊張感が打破できる。互いに敬語で話し合っていても、いいアイデアは生まれない。現地で同じものを見て問題点を語り合い雑談もする、ということから気心知れた「喋り」のできる人間関係が自然とつくられていったのではないだろうか。

#### (3) 記録を残そう

一方で、常にアウトプットが上がっているか?といった点には目を配ってきた。各部会が実施した WG の内容を「懇談会通信」(右)として発行してきた。懇談会メンバーが発言した内容を常に記録することが、結果的に具現化させる「仕掛け」となり、数々の新たな成果を生み出すことに貢献したと考えている。

#### (4) 継続できるフレキシブルな組織をつくろう

事務局は国土交通省豊橋河川事務所が担い、委託企業が補佐をする体制で運営されている。国土交通省は、2~3年で担当者が異動するという人事制度があり、豊橋河川事務所においてもこの制約は避けては通れない。このため、現在、運営は6代目に引き継がれている。また、

ス作川流域図製設会の通信

R1 日 : 物別作7月

R5 1 回 : 物別作7月

R6 1 日 : か別作7月

R7 1 日 : か別作7月

事務局補佐も同一企業が継続受注できるとは限らず、継続運営について配慮が必要である。

10年の歩みのうち、後半の3年間につくられた事務局のスタイルは、メンバーの関係とは別のところにある組織論をまじめに考え続けた時代であり、ここでは常に組織についての解決策を探っていた。委託契約に基づいた単なる受注者と発注者という無機的な関係ではなく、素の人間同士の血の通った信頼関係によって築かれた仕事だったと回顧する。

運営方法の引き継ぎは重要であるが、その一方で、「こうでなくてはならない」という考え方に縛られる必要はなく、時代とともに変化する矢作川・三河湾をとりまく環境と人間関係に常に目を向け、その時々に必要と思われる体制をフレキシブルに維持すればよいというのが、いまの答えである。

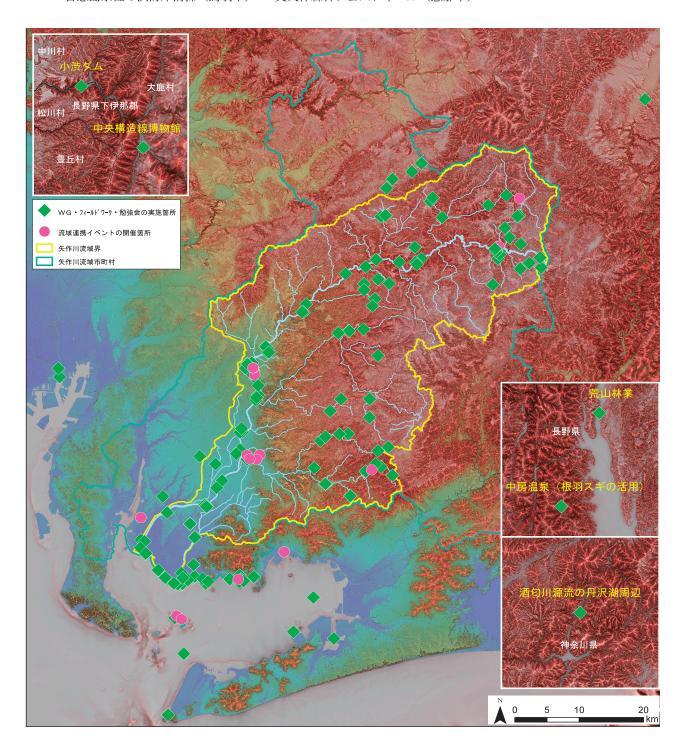
組織の目的を明確にすることは重要であるが、目的にとらわれすぎることは意見の自由度を下げるということも経験してきた。このような時に、事務局は雰囲気を察知して対応したり、メンバーへのヒアリングを行ったりして、ドラスティックに「仕組み」や方向性を変更する勇気と寛大さが必要である。

そして、いま、懇談会の議題の中心は「将来」に向かっており、事務局とともに次世代のためにどのようなことが必要かという議論を始めている。

# 4. 懇談会 10 年の活動マップ

矢作川流域圏の上流から下流まで幅広く活動を行った。また、流域圏を越えた交流や勉強会も行った。

- ◆ ワーキンググループ (WG)・フィールドワーク・勉強会の実施箇所 (市民部会、地域部会(山・川・海)、合同部会)
- 流域連携イベントの開催箇所
  - ・事例集交流会(根羽村、西尾市、岡崎市) ・矢作川感謝祭(豊田市) ・三河湾大感謝祭(蒲郡市、碧南市)
  - ・海ごみ減らそうフォーラム(岡崎市、豊田市・家下川、知立市・猿渡川)・西の浜エクスカーション(田原市)
  - ・答志島奈佐の浜海岸清掃(鳥羽市) ・奥矢作森林フェスティバル(恵那市)



• • • • • • • • • •

# フィールドワーク・勉強会・流域連携イベントの実施場所

E 87:18			阿摺ダム及び下流ソジバ河床環		毛呂川
長野県			境改善実験場		千万町町の人工林
安曇野市	中房温泉		加塩地域の「団地化」と「利用間伐」		- 「万町町の八工術 - 千万町茅葦屋敷
	大王わさび農園		あさひ製材協同組合		野生獣解体施設
大町市	荒山林業		あさひ森の健康診断 報告会		切山の大杉
中川村	小渋ダム		農家民宿ちんちゃん亭	岡	河道内樹木伐採計画箇所
大鹿村	中央構造線博物館		お試し体験住宅「板取の家」	崎	ウッドデザインパーク
飯田市	天竜川		豊田森林組合木材センター		間伐材利用コンクール会場
平谷村	矢作川支川柳川周辺 		2 戸 2 戸住宅造成予定地	市	(イオンモール岡崎)
	根羽村水源の森(分収育林事業)		農山村定住応援住宅		第二さわらび幼稚園
	根羽川源流根羽村産地		「あいち森と緑づくり事業」によ		日名橋下流
	根羽村老人福祉センター		る間伐地		美矢井橋下流
	「しゃくなげ」		豊田市里山くらし体験館「すげの里」		鹿乗川を美しくする会
	ネバーランド サンホール		あすけ里山ユースホステル	知立市	猿渡川
	根羽村役場・村議会場		足助きこり塾		安城図書情報館 アンフォーレ
	低コスト造林試験地		萩野 NPO 結の家「工房」 トン	安	郷東川
	小戸名地区における沢抜け箇所		カン木工塾、足助川	城	新幹線下流側に残る矢作川砂河
	根羽の里「なごみ」		はぎの森の健康診断 報告会 農村舞台寶榮座(ほうえいざ)		川風景
根	信州大学研究フィールド		展刊舞口真米座(はりんいさ) めえープルファーム	市	矢作川 14.5km 地点付近
33	帯状間伐の実施状況	豊	トヨタテストコース		藤井床固工下流
村	根羽村森林組合 木材乾燥施設	田	神殿の森づくり会議 現地	安城市• 碧南市	油ヶ淵
'	など	市	古鼡水辺公園	石田川	
	根羽村森林組合 山地酪農実験		百々貯木場跡	碧南市	大浜漁港
	地など		岩本川(小さな自然再生事業)		矢作川・矢作古川分派箇所、分
	根羽村杉住宅 つたの滝		龍川 矢作川合流点~京町		派堰建設箇所
	浅間神社		矢作川・高橋上流 (瀬と渕、ワンド)		矢作古川頭首工
	桜の庭		矢作川本川 (寺部地区、千石公園)		矢作古川河口部
	グリーンハウス森沢		矢作川豊田大橋下 矢作川感謝祭		矢作川河口部一帯、ヨシ原再生
	モデル住宅		矢作川本川(白浜工区)		箇所
	天下杉		矢作川豊田防災ステーション		矢作川干潟再生箇所
岐阜県			加茂川合流点段差解消市民工事	西	矢作川浄化センター
以千木	上矢作農業集落センター		矢作川本川 (御立公園、長興寺地区)	尾	人工干潟(一色さかな広場西側)
	アライダシ原生林		矢作川本川(野見工区)河道掘	市	衣崎漁港
	松下薪材間伐作業現場		削箇所	1,15	一色干潟 佐久島(白浜海岸、弁天サロン、
	「喉の滝」崩落現場		安永川排水樋門		佐久島(日浜海岸、弁犬りログ、    クラインガルテンなど)
	えなの森林づくり間伐モデル林		明治用水頭首工		吉良歴史民俗資料館
	(道の駅上矢作ラ・フォーレ福寿の里)		矢作川本川 (渡合地区災害復旧 現場、及び対岸地区)		吉田海岸、寺部海岸、宮崎漁港、
	NPO 法人福寿の里自然倶楽部		家下川下流域及び農業用水路、		吉良ワイキキビーチ
恵	福寿の里モンゴル村		柳川瀬公園		東幡豆漁協、東幡豆東浜、
那	福寿の清水		家下川(末野原より下流)		トンボロ干潟、前島
	奥矢作レクリエーションセンター		宮崎学区市民ホーム	蒲郡市	西浦人工干潟
市	くしはら田舎暮らし体験館		宮崎財産区林		三河湾水質調査
	結の炭家 (左/左/ )		巴山・分水嶺	田原市	西の浜海岸
	貯砂ダム土砂搬出箇所(矢作ダム)		長坂 100 年長伐期林・	名古屋市	藤前干潟 名古屋市環境局南陽工場
	明智城址		ミツマタ長伐期林		右 <b>立</b> 座巾 <b></b> 块切向削屬工場
	HYAKKEI (百経) 茅の宿とみだ	岡	デイヴィット・ストーンズ氏自宅	三重県	
	農村景観日本一地区(花白温泉)	崎	「みかわエコ薪」の薪倉庫	鳥羽市	答志島奈佐の浜海岸
	長利京既口本一地区(北口温泉) やまおか木の駅プロジェクト土場	市	おかざき森の健康診断 報告会 ぬかた体験村	神奈川県	
愛知県		1111	宮ザキ園	山北町	酒匂川源流の丹沢湖周辺
安加宗	T. II. 1		くらがり渓谷		
曲	矢作ダム + 砂の右が利用提高など		岡崎市ホタル学校		
豊田市	貯砂ダム 土砂の有効利用場所など		乙川(鍛埜町地先)		
市	時瀬 給砂実験場 小渡町河畔林、有間町河畔林		「西風橋」周辺		
	・1、小人は「一日日日」 /小人は「一日日日」 /小人は「一日日日」				

# いろいろな場所をお借りして WG、全体会議を実施

# 恵那市

上矢作振興事務所、串原振興事務所、串原コミュニティセンター、明智振興事務所、恵那総合庁舎



上矢作振興事務所

### 豊田市

豊田市生涯学習センター「稲武交流館」、旭高原元気村研修室、豊田森林組合、 豊田市役所足助支所、豊田市下山交流館、豊田市役所、とよた市民活動センターホール、 豊田市福祉センター、豊田産業文化センター、豊田商工会議所、 豊田市視聴覚ライブラリー、豊田市職員会館、崇化館交流館、末野原交流館



豊田森林組合会議室

# 岡崎市

農村環境改善センター、岡崎市額田センター「こもれびかん」、 ぬかた商工会館、西三河総合庁舎、岡崎市役所



「こもれびかん」集会室岡崎市額田センター

# その他

安城市市民会館、西尾市役所、西尾市吉良支所、蒲郡市市民会館



# 各部会10年のふりかえり



山、川、海、市民の4つの部会があるんだね。 各部会の活動をふりかえってみよう。

# 1. 山部会 10 年のふりかえり 〜矢作川の恵みで生きる〜

課題	テーマ	これまでの 課題	これまでの取り組み	見えてきた 課題	今後の試み
人	がくり事例集 がは圏(山村再生)担い手	山村の担い手の	<ul> <li>・(2010~2012) 勉強会や市民会議を通じて、山の課題の検討・整理、山部会の出発点を共有</li> <li>・(2012) 山村再生に関する事例集の対象者の検討(農林業の担い手)</li> <li>・(2013~2015) 山村再生担い手づくり事例集 I ~Ⅲの作成</li> <li>・(2016) 山村再生担い手づくり事例集 その後いかがお過ごしですか?プロジェクト・(2016) 事例集交流会開催の検討・計画</li> <li>・(2017~2019) 事例集交流会の開催(根羽村、西尾市佐久島、岡崎市額田)</li> <li>・(2017~2018) 「山村再生」→「流域圏」に改称し、流域圏担い手づくり事例集 I ~II を作成</li> </ul>	信方法の検討 信方法の検討	交換 交換 次年度の山部会、10年誌編集
人と山村	山村ミーティング	手の発掘と交流・発展 林業従事者の現状把握	・(2010 ~ 2012) 勉強会や市民会議を通じて、山の課題の検討・整理、山部会の出発点を共有 ・(2012) 若者ミーティング(Iターンなど)を矢作川流域山村ミーティングに改称・(2013) 上矢作における山村ミーティングの試行(林業 Iターン同士の交流)・(2014) 串原農林と根羽村森林組合の意見交換に関する情報共有、森林組合の若手(岡森フォレスターズ等)の交流検討、流域フェアトレードの概念の共有・(2015) 北海道中川町の「きこりまつり」の紹介と矢作川流域で開催する場合の課題整理、他テーマとの連携模索・(2016 ~ 2019) 矢作川流域林業担い手100人ヒアリングの準備・実施、矢作川感謝祭への参画検討・参画(流域の4つの森林組合、農協、東幡豆漁協の参加達成)		実施(必要に応じて、山寒施(必要に応じて、山
森林	森づくりガイドライン	世部会とのコミュニケーション・出発点の他部会とのコミュニケーション・出発点の	・(2010~2012) 勉強会や市民会議を通じて、山の課題の検討・整理、山部会の出発点を共有 ・(2012~2019) 時代に即した森づくりガイドライン作成の手法の検討・(2010~2019) 流域自治体の森林施策等(岡崎市水循環プラン・岡崎市森林整備ビジョン、豊田市100年の森づくり構想、とよた森林学校、水源基金、東京都や大阪府など森林施策 など)の情報共有、流域市村の間伐面積を収集し、その推移と要因について情報共有、国の施策等(水循環基本法、森林環境譲与税の目的と使いみち、農水省の水源の森林づくりガイドブック、林野庁整備課の水源涵養機能の高度発揮に向けた水源林造成事業のあり方について)の情報共有・(2010~2019) 森林整備と災害に関する情報共有(恵南豪雨、広島土砂災害、鬼怒川豪雨災害、九州北部豪雨)・(2015) 荒山林業への視察による近自然森づくりの導入に関する検討、流域内の生態系サービスに関する基調講演と意見交換、流域内の主な森林・巨木の抽出と可視化・(2016) 神奈川県山北町への視察による森林環境税を活用した環境保全の実態の把握、海部会との合同部会の開催(西尾市東幡豆)・(2018) 流域の科学的根拠に基づいて議論を行う合同部会を開催(岡崎市額田)	イドラインの策定の検討 視点に立った森づくりガ 有 (国や自治体の動き・現地で働く林業従事者の 森林を取り巻く話題の共	実施(必要に応じて、山村ミーティングと森づくりガイドラインの融合を検討) 森づくりガイドラインの策定のためのミーティングを林業の担い手とともに
林	木づかいガイドライン	森林組合同 士のつなが りの創出	・(2010~2012) 勉強会や市民会議を通じて、山の課題の検討・整理、山部会の出発点を共有 ・(2012~2019) 時代に即した木づかいガイドライン作成手法の検討、木づかい推進の実績共有(流域内外年間50~60箇所) ・(2012~2013) 木づかいガイドラインの作成手法の検討(ブレーンストーミング等の実施) ・(2014)木づかいガイドライン作成時の市民目線の重要性の認識、「さあ~しよう」という提案型のフォーマット作成、スギダラ矢作川支部設立に向けた意見交換・(2015~2019) 木づかいライブ・スギダラキャラバンの実績の共有、木のある暮らしのアイテム(動く木のおもちゃ)の情報共有 ・(2016) 木づかいガイドライン策定に向けた目標と項目の周知、全体会議における流域アイテム「流域ものさし」配布/私の流域物語の周知・(2017~2019) 木づかいガイドライン策定に向けた自治体へのアンケートの実施、回収、訪問の検討、労働参加型プレイスメイキングの実績周知・・(2018~2019) 流域の森林組合の協働に関する意見交換と提案	公的機関の動向の把握 公的機関の動向の把握 公的機関の動向の把握 森林組合員の意見交換 森林組合員の意見交換	いガイドラインの策定 標築・新たな協働の検討 懇談会で築いた人間関 イベント等を活用した森



# 山部会のふりかえり

山部会座長 東京大学大学院 蔵治光一郎

1908年、明治用水組合会(後の明治用水土地改 良区) 初代理事長の岡田菊次郎は、下山村(現豊田 市下山地区)の森林を水源林として購入した(その 後、豊田市旭地区、根羽村、平谷村に拡大)。それ から約100年が経過した2009年、中部地方整備 局が策定した「矢作川水系河川整備計画」に「各組 織や団体が実施している森林保全、水質保全、三河 湾再生に向けた取り組み等について、今後のさらな る充実に向け行政、住民、学識者等が情報共有、意 見交換を実施し、さらに課題を解決するための場と して新たな枠組み(流域圏懇談会(仮称))を検討 していく」という文言が盛り込まれたことを受け、 2010年8月に矢作川流域圏懇談会が設立された。 ここに「森林保全」と明記されていることから、懇 談会内に「山部会」が設置され、山部会の主要な議 題の一つとして「森の課題」が取り上げられ、今に 至っている。

河川法の定めにより河川整備計画策定過程には矢 作川流域委員会が関わった。矢作川源流の長野県根 羽村から参加した委員が意見を述べたほか、中下流 の市街地の市民団体や農業関係者、下流の三河湾の 漁業関係者が上流の森林について意見を表明した。 例えば次のような意見である。

- ○東海豪雨については、洪水だけでなく、流木や 山の崩壊による流出土砂についても考えていか なければならない。治山はとても重要であり、 水源涵養の森をつくるようなことを並行して考 えるべきである(第二回)
- ○森林については、緑のダムという議論もあるが、 その効果については現段階では、まだ解明でき ていないという印象を受ける。しかし、東海豪 雨で感じたことは、大量の土砂や流木が流出す るなど山地はかなり荒廃しているが、矢作ダム

で捕捉し、下流への流出を防ぐという効果があっ たということである(第三回)

- ○人工林の荒廃や河川流量の減少といった問題は、 水源涵養林保護政策が欠如していることによる (第四回)
- ○森林は戦後急速に荒廃した。また、森林に関す る調査・研究は進んでいると思う。流域の保水 能力と治水上の関係を知る上で、こうした情報 の収集にも努めていただきたい(第六回)
- ○川と山と区別されて一番困るのは住民である。 災害が起きたときに整備してもらいたいところ が整備してもらえない。河川管理者が川の外ま で考えれば川の中のことも上手くいくのではな いか(第七回)

これらの意見に対して、事務局(豊橋河川事務所) 側は以下のように回答している。

○森林の荒廃やその整備は、非常に重要な課題で あると認識しており、今後、流域委員会でご意 見を伺いながら検討を深めていきたい(第二回)

2000年に起きた恵南(東海)豪雨災害は、高度 経済成長とその後の社会情勢の変化に伴って矢作川 流域住民が忘れかけていた「森・川・海の運命共同 体としての相互関係」を再認識するきっかけとなっ たことが、これらの意見と回答からうかがえる。

流域圏懇談会設立総会の後、2010年12月17日に第一回勉強会を行うこととなり、市民会議山部会の役員の皆さん(部会長:稲垣久義氏、副部会長:黒田武儀氏、大島光利氏)にその運営が任された。勉強会の目的や内容を巡り、メールでのやり取りだ

けでは決めきれず、12月9日に新城市作手の黒田 さんの自宅に関係者が集合した。当時の雰囲気を記 録に残すため、この時のメールのやり取りで黒田さ んが書かれた「勉強会で議論すべき課題」の一部を 紹介する。

- ○深刻な日本の山の危機、水の危機、と言葉では 語られ続けていても、その深刻さの中身と実態 を、どこまで共通の認識に高められているか。
- ○山に暮らしていて、山に生きている、ほんとうの「山の百姓」が、ほとんどいなくなってしまっている現状の認識が、どの深度で理解されているか。
- ○大規模山林所有者である林家と、圧倒的大多数 の零細な裏山を所有するに過ぎない百姓たちと の間にある、決定的な意識や経験や技術の差が、 山の問題にとって、どう関わっているか。
- ○山の問題が、山に生きているわけではない市民の間で、研究室で、行政機関の事務室で語られていることと、山の実態との間にあるものの微妙なギャップを、明らかにして、そこからどう出発するか。

勉強会では、懇談会メンバーに、流域の山と山村 の現状・問題点を整理し、出発点を共有していただ

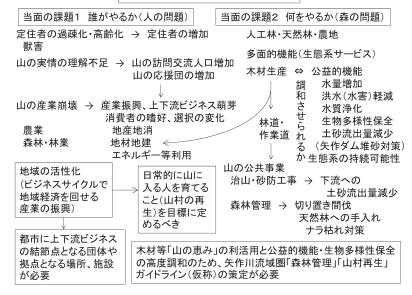
くことを目的として、生れも育ちも山村の大島さん、山村へ移住された黒田さん、外部からのボランティアの立場の稲垣さんと蔵治が話題提供を行った。しかし開催後には参加者から「学識経験者の意見が聞きたくて出席しているのではありません。また、一部の団体だけの活動を聞きたいわけでもありません」「第二回勉強会も今回同様のパターンならば、参加する意味が少ない。市民団体を集めて何をさせたいのか」といった意見も寄せられ、流域圏懇談会という

組織の運営の難しさを思い知らされた。

続いて2011年1月に行われた第一回地域部会の山部会では、山を守り、水を守り、国土を守るために、毎日毎日「日常の営為」として、その役割を担い続ける「担い手」がいなくなってしまいつつある現状を踏まえ、当面取り組むべき課題を人の問題と森の問題の二つに整理し、「出発点『矢作川の恵みで生きる』の共有」と題した図にまとめた(下図)。しかし事務局から「この図は流域圏として共通認識できる資料とはいえない」という厳しい評価を受けた。さらに、事務局補佐を請け負っていた民間企業の、あらかじめ定めておいた方向に議論を誘導するやり方に「自由な意見交換にならない」「参加しても面白くない」と感じた人たちが会議から離れていった。

この状況を打破するため、山部会の有志が全体に呼びかけ、2011年5月に市民企画会議ワーキンググループ(WG)を立ち上げ、メンバー全員が矢作川流域の山、川、海を見て回る1泊2日のバスツアーを9月に行った。また山の抱える切実な問題が川や海のメンバーに理解されていないことへの危機感から、8月の山部会主催の勉強会で参加者全員に放置人工林に入ってもらい、森の健康診断を体験してもらった。さらに、人の問題と森の問題の過去から現在までの経緯、今何もしなければ近未来にどうなるか、どのような未来の姿が理想かを出発点として共有した上で、課題とその解決のための具体的な手法を整理して2012年2月の地域部会に提示した。

#### 出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有



(2012.5.19 修正版)



この地域部会での議論を経て、課題と解決手法が決められた。

提案された四つの課題の解決手法の担当者は、「山村再生担い手づくり事例集」(その後「流域圏担い手づくり事例集」に進化)が洲崎燈子氏、「上下流ビジネスサイクル」(その後「山村ミーティング」に進化)が丹羽健司氏、「森づくりガイドライン」が蔵治と決まった。「木づかいガイドライン」は、根羽村森林組合の今村豊氏が快く引き受けてくださった。

2012年度から、地域部会山部会(2018年度より「まとめの会」に改称)は年に1回、全体会議の直前に開催することとし、それ以外の会議は全て山部会WG は、岡崎、豊田、恵那、根羽の4地区を巡回する方式で概ね年8回開催し、そのうち半分の4回は泊まり、残りの回は日帰りで開催することとした。自家用車で集まる会議であれば、終了後に懇親会を企画しても参加者があまり見込めないが、現地で1泊すれば夜の懇親会、翌日のフィールドワークを同時開催できると考えた。何よりも重視したのは、参加して楽しく、有益だと参加者に思ってもら

えるかどうかである。楽しくなければ、やがて人は 減っていき、持続的でなくなる。楽しいからこそ、 人びとは喜んで飲み物持参で自発的に集まってく る。

2019年12月で山部会WGは54回を数えた。 10年の節目を迎えたが、黒田さんが提起した課題 や、山部会が整理した人と山村の課題、森林の課題 のいずれも、その解決には程遠いと言わざるを得な い。この間、流域圏懇談会山部会は、災害に強く、 恵みを分かち合える「流域圏コモンズ」をつくりあ げる原動力となる「相互信頼関係に基づく人間関係」 の構築のため、広大な矢作川流域圏の山で活動して いる者同士が、情報共有や意見交換を超えて、互い を深く知り、信頼し合い、切磋琢磨する場として機 能してきた。設立から10年を経た今でも、この機 能の重要性は設立当時からいささかも変わっていな い。今後、私たちが、山で生きる者同士の連帯にと どまらず、「矢作川の恵みで生きる」出発点を流域 圏全体が共有し、山村の住民と都市の住民がお互い のライフスタイルに共感し、連帯する真の流域圏社 会の実現を目指すなら、流域圏懇談会山部会の機能 は、今後ますます重要となっていくと感じている。

# 山部会 活動アルバム

山部会 WG は、岡崎、豊田、恵那、根羽の4地区を巡回。そのうちの半分は宿泊(楽しい、有意義な宴会!)し、翌日はフィールドワークを行う形で実施。

- 2012.4.28 (第1回)
- ◇ 根羽村役場で WG 後、つたの滝、浅間神社周辺、桜の庭、グリーンハウス森沢、モデルハウス「杉風の家」、作業道を見学



- 2014.1.27 (第5回山の地域部会)
- ◇ 岡崎市ぬかた会館で会議後、第二さわらび幼稚園を視察



- 2014.5.16 ~ 17 (第 16 回)
- ◇ 恵那市上矢作町のモンゴル村で WG &宿泊。翌日はアライダシ原生林へエコツアー





- 2015.9.13
- ◇有志参加で長野県大町市の荒山林業を見学



- 2016.10.7 ~ 8 (第 36 回)
- ◇ 岡崎市農村環境改善センターで WG。 翌日は木づかい推進の一環として ウッドデザインパークなどを視察



- 2016.12.16 ~ 17 (第 38 回)
- ◇豊田森林組合でWG。翌日は足助きこり塾フィールドとめぇープルファームを見学後、あさひ森の健康診断報告会に参加





- 2017.1.27 ~ 28
- ◇ 有志参加で神奈川県山北町酒匂川流域に おいて森林とダムと土砂の勉強会を実施



- 2017.5.19 ~ 20 (第 39 回)
- ◇ 岩村振興事務所で WG 後、花白温泉隣の薪の駅を見学。翌日は農村 景観日本一地区と茅の宿とみだを視察





- 2017.7.28 ~ 29(第 41 回)
- ◇ 根羽村ネバーランド サンホールで WG。翌日は信州大学の研究林を視察



- 2017.10.13 ~ 14(第 43 回)
- ◇ 岡崎市ぬかた会館で WG。翌日は、オープンしたばかりの「ぬかた体験村」で柚子を収穫し柚子胡椒作りを体験





- 2017.12.15 ~ 16(第 45 回)
- ◇豊田市森林組合でWG。翌日、農家 民宿「ちんちゃん亭」で話を伺った
- 2018.5.18 ~ 19(第 46 回)
- ◇根羽村老人福祉センター「しゃくなげ」でWG。翌日は、山林を開拓して牛を放牧する「山地酪農」などを視察



- 2018.11.16 ~ 17(第 49 回)
- ◇ 岡崎市額田センター「こもれびかん」 で WG。翌日は「みかわエコ薪」の現場を視察



- 2019.10.25 ~ 26 (第 53 回)
- ◇ 豊田市稲武交流館で WG。翌日は萩野 NPO「結の家」フィールドと 農村舞台寶榮座を見学後、はぎの森の健康診断報告会参加



# 2. 川部会 10 年のふりかえり

テーマ	解決 手法	これまで の課題	これまでの取り組み		え <b>て</b> きた 課題	今後の試み
	本川モデル	地点別評価部分の形態評価を対象を表現しています。 地点別評価の合流点の少し上流を対象を表現しています。 地点別評価の合流点の様子・支川・大砂管理に関するに対象を表現しています。 上砂管理に関するに対象を表現しています。	・(2010) 矢作川で研究、活動する専門家や団体を講師とした勉強会を開催した。 ・(2011) 矢作川の源流から海までの全てを視察するバスツアーを開催した。 ・(2012~2015) 矢作川河川整備計画、豊田市矢作川河川環境活性化プランなど 矢作川に関する河川整備事業、整備計画に関する勉強会を開催した。 ・(2014) 久澄橋下流河道内の地形状況について、大同大学、国交省による現 地測量を実施した。 ・(2011~2016) 白浜工区の河道掘削箇所を題材とした河川事業のあり方について意見交換を行った。また、大同大学による洪水規模に応じたモニタリングについて情報共有が図られた。 ・(2014) 矢作川漁協との意見交換が実現し、現状と課題の情報共有が進展した。・(2014) 矢作川漁協との意見交換が実現し、現状と課題の情報共有が進展した。・(2012~2013) 矢作川の土砂問題に関する勉強会を開始し、土砂管理検討委員会に向けての提案事項となる「矢作川の河川環境の方向性」についてとりまとめた。 ・(2015) 小渋ダムの土砂バイパスを視察し、総合土砂管理の知見を深めるとともに、土砂管理検討委員会の進め方について意見交換を行った。・(2014~2017) 加茂川の段差改善を目的として、魚道の設置を検討し、自然石による棚田式魚道を設置した。WGではその後の生き物の生息状況について情報共有を行っている。 ・(2017~2018) 矢作川研究所がアユの生息環境の復元を目的として取り組んでいる阿摺ダム下流の実験状況(河床環境の改善)について現地視察を行った。また、同場所の生物相について愛知工業大学の研究結果を周知した。・(2019) 運用後の小渋ダム土砂バイパスの現地視察を行い、運用後に見えてきた課題の情報共有を行った(第15回勉強会)。	利外の 矢各 流るて部実 懇と善化 川沿 がの合成 診な手	所本川の 地点評価 成を移動す 可質につい 議論(一 計同部会で	農業・工業・生活用水についての議論  ・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・大阪・
	支川モデル	(生物多様性の保全・川利用) 水系の河川情報の集積	・(2013~2015) 水位やゲート敷高等の高さなどの移動阻害箇所の測量及び現地調査を実施するとともに、各施設の管理団体を整理し、段差の解消について検討を実施した。 ・(2011~2013)「草の植え付け」「水田魚道」「越冬マス」「ブロック水制・堰(越冬場所)」などの設置効果について情報共有した。 ・(2014~2017) 家下川湛水防除事業(上郷2期地区)の概略設計の検討状況について意見交換を行い、排水機場周辺の浚渫など生き物の棲みかに配慮した施工が行われた。また、その後の状況について情報共有を行った。 ②その他の支川モデル ・(2019)郷東川で安城市が取り組んだ多自然川づくりの現地視察を行った。また、岩本川で豊田市、矢作川研究所、市民が協力して取り組んだ「市民主体による小さな自然再生」の現地視察を行った。 ・(2020)(豊田市内) 籠川の現地踏査と「望ましい川」について議論を行った。	他部会との協働(特に海部会)・課題に対す	生きものの棲みやすい川づくり	
地先の課題(河川空間の利用・保全のあり方)地域の人びとと川との関係を中心とした、	地先モデル	把握・評価   決に向けた市民への啓発   でみの問題等の課題の解	・・(2012) 家下川合流点から矢作古川分派点と乙川の現地調査を行い、活動団体や管理者が抱える課題や活動内容について、情報共有した。     ・・(2013~2014) 活動団体へのヒアリングを継続するとともに、活動団体を掘り起こし、広く活動団体の状況を把握するため、新たにアンケート調査を実施した。     ・・(2013~2015) 活動団体リストを概ねまとめ終わり、活動団体マップの作成に着手した。     ・・(2014) 専門家リストのたたき台を作成することができた。     ・・(2017~2018) 流域圏担い手づくり事例集をWGで取り上げ、協働して取り組むことになった。取材先の選定にあたっては、過去に作成した専門家リストを活用した。     ・・(2019) 川部会メンバーが考える矢作川流域圏年表を作成した。また、国土交通省が検討している「河川ごみ対策の手引き(仮称)」について情報提供を行った。	拡っの記	ノバーの 大、市民 義論参加 広大	でみに関する情報共有

※川部会座長: 2010 年 8 月 ~ 2013 年 8 月 · 大同大学 鷲見哲也、2013 年 8 月 ~ 現在 愛知工業大学 内田臣一



# 川部会黎明期をふりかえって

# 1. はじめに ~懇談会の成り立ちと川部会の困難性~

2010年8月の懇談会設立から2013年8月まで 川部会の部会長を担当し、現在は個人の識者として 現場の状況を翻訳する、という立場で参加している。 黎明期ともいえる初期の川部会についてふりかえっ てみたい。

懇談会設立の根拠は、2009年7月に策定された 河川整備計画において、矢作川に係る諸課題につき 情報共有・意見交換を行い、解決するための新たな 枠組みとしての位置づけである。

川部会の部会長を打診された時点で、これは難しい懇談会で、どんなものになるのか想像もつかず、困難を伴うものと想像し、実際にそうなった。川部会は設立根拠の真ん中にあたるため、最初から様々な縛りがある。例えば流量とか土砂とかダムとかの根源的な部分を変える自由度などあろうはずもなく、手足を縛られながら「どうぞ」という部会なんだろうなぁ、という感覚だった。しかし、「どういう縛りがあるのか」の部分も含め、関係者・市民の方々との「情報共有・理解」を進めることは重要であるとも思い、引き受けたと記憶している。

黎明期の川部会が定常状態に乗るまでをまとめる と、それは「課題の整理」「情報共有」「まずはやっ てみよう」の三つであった。

# 2. まずは「課題の整理」とその中での「情報共有」

2010年12月の市民部会に続き、2011年1月に3部会合同の地域部会が開かれ、実質の話し合いがスタートした。川部会の構成メンバーは多岐にわたり、川・水辺で活動される市民の方々、川に関わる各事業者や団体(発電・用水・漁業)、市町村、河川管理者としての国・県、研究所や大学などであ

る。しかし、事務局(特に当時の溝口敏明事業対策 官)の熱意と行動力が、こうしたメンバーの集合を 実現した。それだけに「どうなるのだろう」「何が できるんだろう」という不安は大きくなる一方でも あった。

最初は「何をするか」の前に、川と川沿いには「どんな課題があるのか」を出し合って共有し整理することになった。事務局の準備したリストを横目に見ながらも、参加者が様々な課題・問題を一つ一つ話しながら付箋に書き出した。それぞれの方の目線から見た課題を違う立場の人たちが共有するという点で、懇談会らしい第一歩となり、新鮮な経験を持った方も多いと思う。また課題を俯瞰し「流域圏で見る」という点がそれぞれの人に投影されたのではないかとも思う。

一方で、これを眺めての課題の整理はなんとも困難なものだった。なぜなら、「河川管理者が行っていくべき課題」と「できない課題」があり、前者には計画上決まっているものとの対峙が、後者には、懇談会で何ができるのかという疑問が、それぞれに立ちはだかったからである。また、「今後、懇談会として取り組んでいく課題の整理」という出口も考えねばならず、こちらの方が頭が痛い問題だった。



写真1 第1回地域部会の川部会での課題の書き出し

# 3. 一歩を踏み出し「まずはやってみよう」

部会長としては最初の3年間を、分からないことを多く学んだり共有したりすることだけで目いっぱいだろうとの思いがあった。しかし、事務局やメンバーからの「具体的な取り組みがないと、活動を維持できないだろう」との意見・判断もあり、様々に出された課題から「まずは取り組む課題」を絞り込むことになった。ところが、最初から絞ってしまっては、直接の関わりがないメンバーが出て参加者が減ってしまう。そこで、まずは大きく二つの課題にグループ分けし、課題としてメンバーが共有しやすくすることとした。

# ①本川・支川と上下流問題

川の中の問題については、川のそれぞれの場所で起こっている問題と、川の上流下流がつながっていることで起こる問題、の大きく二つが挙げられる。アユや普通の魚の居場所のような問題、遊び場としての問題は一見現場に限った問題に見えるが、実際には上流から来る水や土砂や物質(水質)による影響を受けて起こっていることもある。遠い目で見れば上下流の問題、近くで見たら現場の問題がある。

そこで川の中の問題を、矢作川本川での課題(本 川モデル)と、周辺の河川での課題(支川モデル) にいったん分けて、活動することになった。本川や 支川の現場に行き、漁場の立場から、生き物の立場 から、遊んだりのんびりしたりする利用の立場から、 などそれぞれの立場から話を聞き、その問題の構造 を理解し、何が必要なのか何ができるのかを考え提 案があれば出す、といった活動に取り組むこととし たのだった。例えば、本川モデルでは、この数十年 で河床低下が進み、支川の間に落差が大きくなって いることを調べ取り組むことが、「まずやってみよ う」とするものの一つとなった。支川モデルでは、 阿部夏丸さんをはじめ家下川での越冬マスの設置や 川での遊びなどの取り組みを紹介していただく一 方、断片化一様化が進んだ水域をどうしたらよくな るのかを、現場を見て考えたりした。

# ②地先の課題(地先モデル)

川の中だけではなく、川と周辺を結ぶ問題がある。 川の空間は様々な人が活動する。懇談会に参加されている市民団体等には、竹林伐採・空間整備に力を入れたり、清掃活動、生き物に関する活動に取り組む方々がおられ、そこでも不法投棄や竹林繁茂・



図1 川の中と上下流の課題の整理

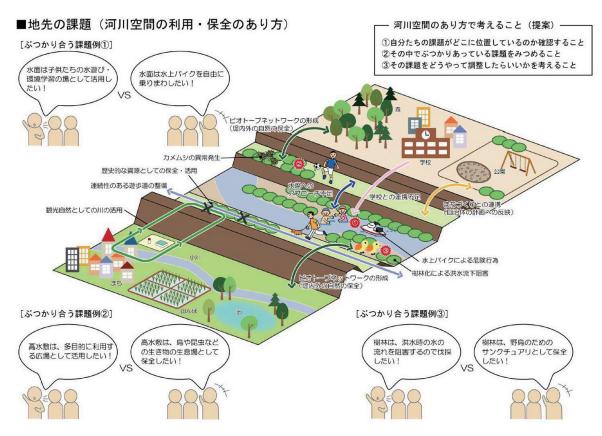


図2 地先の課題の整理

景観劣化、市民の無謀な利用など、様々な問題が認識された。また、カメムシなど川から陸側へ影響を与える問題も認知された。そうした河川や周辺の空間における主に人間が関わる活動や課題について、活動例も含め情報共有したり、関係する団体・専門家のリストを作ってより広く聞きに行ける情報整理をしたり、ということを進める一歩を踏み出した。

いずれも黎明期は、課題となっているものの内容やそれぞれの活動を、知り、共有する活動が中心だった。それだけでも、互いに知らない様々なことはとても多く、私は2周3周しないと、とても「分かったつもり」になることも難しいのではないか、とも思えた。

# 4. 情報共有・・・勉強会

最初の3年間は、市民会議を起点とした運営が行われた。特に勉強会のお題は市民会議に委ねられており、2012年頃は部会の運営の核も市民会議が担っていた。

2011~12年度は勉強会が非常に多く開かれた。

川部会の担当では、各地域の市民活動の紹介、目玉となった源流から海まで2日がかりの「矢作川の全て」バスツアー、そういえば本来知っておくべき河川整備計画の説明、2回にわたる土砂勉強会と、「そもそも」を学ぶ機会が多かったのが特徴だった。それでも「分かったようで分からないこと」が多いままで、すぐに忘れてしまうし、「本当に分かった」となるには、とても多くの機会・時間と粘り強さが必要だと思った。

# 5. おわりに

その後は上述のフレームワークがある程度定着し、内田部会長の下での活動が続いた。様々な思いを持ちながらも前向きに参加されてきた多くの方々のおかげで、部会が10年の活動を続けてこられた。矢作川と流域が抱える課題とその本質を捉えるだけでも10年かかってきたと言えると思う。すぐには解消しないような問題には、種々の仕組みや流域管理のありようも含め、長期的な取り組みや枠組みのあり方も話し合えるようになればと思う。



# 川部会 10 年のふりかえり

川部会座長(2013年8月~)愛知工業大学 内田臣一

私が矢作川流域圏懇談会に関わったのは設立当初の2010年からで、当初は大同大学の鷲見哲也先生が川部会座長を務められ、私は副座長として参加した。その後、2013年に鷲見先生から座長を引き継ぎ、現在に至っている。

川部会の10年の歩みは、事務局である国土交通省豊橋河川事務所のウェブサイトに詳細な資料で記録されている。私が副座長・座長として川部会での議論に関わってきた経緯から、この「ふりかえり」では、できる限り公平な視点で川部会の歩みを要約することも、今、私に求められていることの一つと認識している。しかし、所詮、公平な視点を保とうとしても、私個人の考え方や今までの経歴からくる先入観などから離れて川部会の歩みを要約することは私には極めて困難だと思える。

そこでこの小文では、逆に「公平な視点」の反対の視点、私の個人的な考え方や関係者とのお付き合いの経歴に基づく視点をあえて隠さずに、川部会10年をふりかえりたいと思う。このような視点に立たせていただくため、私が川部会10年をふりかえって、個人的に印象に残っている「人」を個別に紹介しながら話を進めたい。ここに紹介する4人の他にも私の印象に残っている人はたくさんいらっしゃるのだが、紙面の都合で紹介しきれない。失礼とは思うが、ご理解をお願いしたい。

# 溝口敏明さん:発足当初の事務局の担当者

川部会のみならず矢作川流域圏懇談会全体の発足に、溝口さんが大きな役割を果たされたことは、発足当初の関係者には異論がないと思う。私自身は、自分が所属する土木工学科河川・環境研究室の学生を河川の現場見学へ連れて行った際のご案内などを通じて、この発足前から溝口さんの人となりをよく知っていた。そのため、溝口さんから矢作川流域圏懇談会発足の計画とその基本的な考え方を聞いた

時、溝口さんの住民団体との長いお付き合いなどの 経歴から「これは十分実現可能」と思い、川部会副 座長を引き受けることにした。

1997年改正の河川法には「関係住民の意見を反映」と記されているが、これを実効あるものにするのは難しい。溝口さんたちの尽力によって、川部会を含め矢作川流域圏懇談会発足に実際にたくさんの住民団体が集まり、議論する体制ができたことは私たちが誇るべきことだと思う。

# 本守眞人さん:元愛知県職員、愛知・川の会

発足当初から川部会には愛知県の河川を管理す る部署 (本庁河川課、豊田加茂建設事務所) が加わっ ていた。しかし、矢作川流域圏懇談会の事務局を務 める「国」、矢作川に直接関わっている「市町村」(特 に矢作川研究所を擁する豊田市)の間にあって、流 域圏3県のうち最大の関与が期待される愛知県は、 遠慮されていたのか、懇談会参加への積極性が物足 りないように内田は感じていた。そこで、上記の溝 口さんなど事務局に、愛知県の関係者に懇談会へ もっと関与してもらうため、元愛知県職員の本守さ んに加わっていただけないか強くお願いした。本守 さんはその頃「近自然工法研究会」という名古屋で の勉強会を主宰しておられ、私は2009年から会員 にさせてもらって大いに勉強させていただいていた ところだった。幸いに本守さんにはご理解をいただ き、2011年から川部会に参加され、長く川部会の 議論を引っ張ってくださることになった。なお、本 守さんと矢作川のお付き合いはもっと古い。次の本 に書かれている。

新見幾男(1994)ヨーロッパ近自然紀行-スイス・ドイツの川づくりを訪ねて . 風媒社

# 近藤朗さん:同じく、元愛知県職員、愛知・川の会

近藤さんはこの「矢作川流域圏懇談会 10 年誌」の編集を担ってくださっているなど、現在でも矢作川流域圏懇談会の重責を負っておられるので、ここに紹介すべきではないかもしれない。また、所属の「愛知・川の会」からは長く上記の本守さんが川部会に出席されていて、近藤さんが川部会に頻繁に出てくださるようになったのもまだここ数年である。しかし、近藤さんと私(私だけでなく他のたくさんの矢作川関係者も)とのお付き合いは長く、今後のご活躍への期待を込めて紹介させていただきたいと思う。

近藤さんと初めてお会いしたのは、2000年の東海豪雨のすぐ後(内田は2000年4月から愛知県に来た)、豪雨で被害を受けた多自然型川づくりの施工例を調査された結果\*をお話しされた会合だったと思う。その後、私は土木工学科の学生に生態学や自然環境への配慮を教えるという、それまで(前職:滋賀県立琵琶湖博物館学芸員)とは違った仕事を覚えるために、また、見ず知らずの愛知県の自然を知るために、土木と環境に関係する会合や見学会などにできる限り参加していたが、毎回のようにお会いして談笑するのが近藤さんだった。公務員らしからぬ人柄(上記の溝口さん、本守さんも同様)は、愛知県を退職されてから出てきたのではなく元からそうだった、ということを最近近藤さんとお知り合いになられた皆さんには伝えておきたい。

近藤さんと矢作川とのお付き合いは長く、「矢作川 古鼡水辺公園/お釣土場」での1990年代のお仕事で「土木学会デザイン賞2007優秀賞」を、授賞者の1人として受賞しておられる。今後も矢作川流域圏懇談会でのご活躍を期待したい。

\* 安部友則・近藤朗 (2001) 東海豪雨のインパクトを受けた愛知県の多自然型川づくり調査.河川技術論文集 7: 291-296.

# 阿部夏丸さん:児童文学作家・矢作川水族館館長

私が阿部夏丸さんを知ったのは、2002年頃の豊田市矢作川研究所シンポジウムだった。講演が終わった後の質疑応答で、夏丸さんが豊田市の川の自然について問題提起を含む積極的な発言をされていて、豊田には川の自然に強い思いを持っている人がいると印象的だった。後に子ども向けの本を書かれるのがお仕事と聞き、また、研究室の学生に聞くと、夏丸さんの本(例:『ライギョのきゅうしょく』)をよく覚えている学生がいて、子ども心に深い印象を残す作品と知った。さらに、矢作川流域圏懇談会が始まった頃、矢作川感謝祭(豊田大橋で開催)の前身の「矢作川天然アユ感謝祭」(古鼡水辺公園で開催)で軽トラックに水槽を積んだ「矢作川水族館」で子どもたちを集めているのを見て、川部会でぜひ活躍してほしいと思っていた。

川部会が始まると、三つのモデル地区の一つ「家下川モデル」で魚がすみやすい川づくりについての議論や事業の検討で先頭に立ってくださった。私のような大学の教員や技術職の公務員が議論すると、しばしば話が小難しくなってしまうのだが、夏丸さんの平易で直截な発言に川部会の雰囲気が大いに和んだことがたびたびあった。今後も専門家とは対極の言葉で懇談会を盛り上げていただきたいと期待している。

# 今後に向けて

川部会を中心に10年の歩みをふりかえると、上に紹介した4人の皆さんをはじめとして、個性的な皆さんがぶつかり合う議論が、矢作川流域圏懇談会の実のある成果を生む、という感想を私は持っている。今後、議論に参加される皆さんも、ぜひ自由闊達に話し合うことを大切にしていただきたいと思う。



# ● 2017.5.26(第 38 回川部会)阿摺ダム下流 アユ生態環境改善実験

阿摺ダム下流(通称ソジバ)では川底が固まり河床材の移動がなくなってしまったため、アユの生態環境が悪化している。豊田市矢作川研究所は、これを改善するため、2017年と2018年に矢作ダムから採取した礫を阿摺ダム直下に敷く実験を行った。第38回川部会では、現地にて矢作川研究所の山本敏哉氏、共同研究者(底生動物専門)である内田座長が実験内容を説明。実験を開始した年にはアユが集まる効果がみられたものの、翌年には効果が確認できず、徐々にコケ植物が増加していることが確認されている。

# 川部会活動アルバム

# ① 本川モデル

- 2012.6.23 (第2回)
- ◇ 矢作川白浜工区における国交省(河道掘削) & 豊田市(河川課・研究所)、矢作川森林塾の協働



せせらぎ (加茂川合流部) 自浜区順応的管理

- 2013.10.18(第 14 回)
- ◇矢作川の瀬・淵のあり方、理想像の議論
- 2015.8.6(第 27 回) ◇ 小渋ダム見学



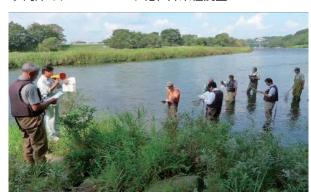
● 2015.11.11(第 30 回) ◇ 矢作古川分派堰工事 見学



- 2017.9.29(第 42 回)
- ◇ 矢作古川分派堰(2016 年度完成)と矢作古川頭首工魚道を 視察



● 2012.9.21 (第 5 回) 古鼡 ◇河床のアーマーコート化、外来種調査



- 2014.6.27 (第 18 回)
- 2015.12.18 (第 31 回)
- 2016.12.9(第 37 回)
- ◇ 大同大学鷲見研究室より白浜工区モニタリン グ計画報告



# **2016.10.1**

◇加茂川の堰上げ魚道の設置(矢作川森林塾参加)



# ●その他成果

安永川合流箇所での一部護岸覆土(国交省)、 渡合地区護岸縮小・ブロック→捨石変更、久澄 橋下流河道の地形形状について国交省・大同大 学による現地測量、矢作川漁協との意見交換、 など

# ② 支川 (家下川) モデル

● 2011.9.23 ~ 9.24 「源流から海まで、2 日がかりの『矢 作川の全て』バスツアー」で家下川へ



- 2012.5.18 (第1回)
- ◇家下川リバーキーパーズ&土地改良区(家下川水路)、 矢作川研究所、県豊田加茂建設事務所との協働
- ◇地縁的地元団体との軋轢





水田魚道設置箇所(中大排水路) 子どもの遊び場(家下川本川)



越冬マス設置箇所(西大排水路) 草の植え付け(中大排水路)



- 2015.6.29 (第 26 回)
- ◇上郷柳川排水機場改修工事について県豊田加茂農林水 産事務所との意見交換
- 2015.10.13 (第 29 回)
- ◇上郷柳川排水機場工事について豊田加茂農林水産事務 所からの対応策提案
- 2016.9.23 (第 34 回)
- ◇上郷柳川排水機場工事 11月着工、魚の滞留場 整備へ



- 2017.6.30 (第 39 回)
- ◇上郷柳川排水機場完成後も遊水池とひょうたん池は魚 の行き来ができず、水池樋門管理者である豊田市に参 加を要望する

# ③ 支川 (その他) モデル

# 郷東川

● 2019.9.2(第 51 回) ◇ 郷東川で安城市が取り組んで きた多自然川づくりの現場を視察





岩本川

● 2019.10.15 (第 52 回) ◇ 岩本川視察



# 籠川

● 2020.10.13(第 54 回) ◇ 籠川の魚道や土砂の視察



籠川の理想像を議論した





# 3. 海部会 10 年のふりかえり

課題	쿳	これまでの 課題	これまでの取り組み	見え <b>て</b> きた 課題	今後の試み
海の生き物をとりまく課題	ごみ・流木の問題	の解決策への発展 他部会との認識共有問題の構造の共有から	・(2013) 流木、人由来、生物影響でみの3種類を調査し、発生源を検討した。 ・(2014) 西の浜と佐久島で他団体や山・川部会メンバーと連携してごみ・流木調査を実施し、漂着ごみの実態把握と問題意識の共有化を図ることができた。 ・(2015) 山部会と協働して、東幡豆のトンボロ干潟周辺のごみの現状を確認した。 ・(2016) 海ごみ・川ごみの問題について、全国的な活動を実施している一般社団法人 JEAN 及び全国川ごみネットワークから、ごみ問題に関する最新の知見について、情報共有を行った。 ・(2016) 愛知県が取り組むごみ学習プログラムの内容について情報共有を行った。 ・(2017) 22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会主催の「藤前干潟エクスカーション」に参加し、藤前干潟の清掃活動やごみ焼却場を見学した。・(2019) 22世紀奈佐の浜プロジェクトの進捗状況が周知され、マイクロプラスチックの問題について情報共有した。	型に見えるごみから、目に見えるごみから、目に見えるごみから、目に	た参加も視野。現状把握た参加も視野。現状把握
	豊かな海の生物調査	他部会を巻き込んだ調査	- (2013) ハンドブック等を活用して、東幡豆天然干潟、西浦地区人工 干潟の2地点において、生き物調査を実施した。 - (2014~2017) 三河湾の干潟・浅瀬造成に関する行政計画や事業内容、 愛知県が実施した海底ごみ・生き物調査の結果を情報共有するととも に、鳥類調査を通じて干潟や背後の土地利用の問題を共有した。 - (2015) 山部会と協働して、干潟の試験造成後の生物相の変化を確認 した。 - (2017) 海の栄養塩の問題に関する最近の話題として、流入負荷削減 と海の水産資源の関係性について学んだ。 - (2017) 八郎潟や油が淵での水質浄化に関する研究事例と水質浄化対 策の技術的課題について情報共有した。		
	豊かな海の再生	疑問の共有 「透き通った海=豊か	- ・(2018 ~ 2019) アサリの減少原因を追究されている吉田漁業協同組合の石川組合長より、三河湾の現状について報告いただいた。 ・(2017 ~ 2018) 合同部会では、三河湾の現状を山部会、川部会に対して情報共有を行った。 ・(2019) 矢作川浄化センターを見学し、栄養塩の試験放流の進捗状況を確認した。また、試験放流による水質の変化について情報共有した。	認識の周知ではないというな海」ではないという	漁」の情報共有と発信部会を通じた「豊かない人ベントや市民
海と人の課題	海と人の絆再生	海部会が主導となる活動	<ul> <li>・(2014)様々な場面でのアンケート調査等を通じて、子どもや保護者の海に対する意識やニーズを把握することができた。</li> <li>・(2015)山部会との合同会議では、漁業者との懇談を行い、水質や砂の問題や新たな担い手の問題を検討・共有した。</li> <li>▶・(2016~2019)流域のイベントへの参加(奥矢作森林フェスティバル、矢作川感謝祭、三河湾大感謝祭)によって、三河湾(海)の生き物が身近なものとなった。</li> </ul>	継続した啓発が必要	一 の継続 の継続 本の生き物に触れ合う
	干潟・ヨシ原再生	験の範囲拡大	- (2013) 矢作川河口干潟の生き物調査及び矢作ダムの砂の実態調査を実施した。     - (2014~2015) 矢作ダムの砂を活用した干潟造成の試験施工について、関係機関の協力を得て実現した(2015.3.10 矢作ダム砂の投入)。     - (2015~2018) 干潟の試験造成後の生物相の変化を簡単な調査を行いながら意見交換をした。		



# 10年という時間を経て見えてきた三河湾の原風景 ~海部会の活動をふりかえって~

海部会座長 大阪大学 青木伸一

なぜか手元にメモが残っていたのであるが、山崎 豊子の初期の作品に『仮装集団』(1967)という小 説があり、その中に以下のような一節がある。

車は渥美半島の中程の田原町を過ぎ、大きなカーブを曲がりきると、磯の匂いが窓から吹き込み右手に三河湾が見えた。殆ど波立ちのしない静かな入海に、緑の小島が点在し、その間を漁船が往き交い、磯に近い海面に海苔をつくる海苔粗朶が竹しべのようにたっていた。・・・

主人公が豊橋駅から伊良湖岬に向かう車から見た 三河湾を表現したものである。山崎豊子は現場主義 の作家であるから、おそらく今から 50 年以上前の 三河湾を実際に見て表現したのではないかと思わ れ、静かな海に浮かぶ漁船と海苔粗朶が三河湾の原 風景として映ったのであろう。

筆者は 1993 年に豊橋技術科学大学に赴任し、こ の小説の時代から30年を経た1996年から三河湾 で観測を始めた。当初は愛知県水産試験場の計測器 と三河港湾事務所の船「しおさい」をお借りして水 質の衛星リモートセンシングの研究に取り組んだ が、当時すでに三河湾の水質悪化と生態系への影響 が大きな問題となっていた。海域の透明度が低下し ていること、窒素やリンの濃度が高く富栄養化が進 んでいること等が示され、その原因が沿岸域の埋め 立てによる干潟・浅場の喪失やダム建設などによる 淡水や土砂流出の変化に関係しているとの指摘があ り、土木工学を学んだ筆者にとっては考えさせられ ることも多かった。実際、夏の観測時には湾の奥に 赤潮が広がっていることが多く、スクリューで掻き 回された海面には褐色に染まった泡が渦巻いてい た。また、海底には無酸素の海水が大量に存在し、 死の海が静かに広がっていた。これが、私が最初に 出合った三河湾の夏の姿、私にとっての原風景で あった。2009年からはこの夏季の貧酸素水塊の挙 動に興味を持ち、少しずつ計測器を揃えながら、学生とともに港湾域を含めた湾奥の水質や流れの観測を始めた。

そのような中で、2010年にスタートした矢作川 流域圏懇談会の海部会にお世話になることになっ た。山・川・海をつなぐ「流域圏」という視点につ いては、当時、天竜川と遠州灘で流域圏の土砂管理 をテーマに研究プロジェクトを実施していたことも あり、その重要性は十分認識できた。懇談会は、国、 自治体、市民団体や個人、及び大学や研究所の学識 者からなる、官・民・学の連携・協働による環境管 理に向けた取り組みであり、様々な視点や考え方の 異なるメンバーが流域圏という共通の場の環境管理 のあり方について意見交換をし、何らかの実践をし ようというものであった。目指すものは高いところ にあったが、実際に海部会の活動を始めると、いろ いろな見方と価値観があり、何をテーマに議論すれ ばいいのか、部会として何をすべきなのか、懇談会 が目指すものが何なのか、はっきりしないまま進め ていたのも事実である。何度かの話し合いを経て、 海部会では次の四つのテーマに取り組もうという ことになった。(1) ごみ・流木の問題、(2) 豊か な海の生物調査、(3)海と人の絆再生、(4)干潟・ ヨシ原再生。これらのテーマは、いずれも解決すべ き海の課題に関係するものであるが、一朝一夕に何 かを達成できるものではないことも確かである。以 下、順序は異なるが、これら四つのテーマごとに 10年を簡単にふりかえってみたい。

(1) のごみの問題については、流域圏というスケールで解決すべき象徴的な課題であり、佐久島や西の浜などでのごみ拾いやごみの分類などに取り組んだが、身近な問題であるがゆえに、かえって難しい問題であることを認識させられた。近年はマイクロプラスチックの問題がクローズアップされていて、ますます難しくなっているが、市民レベルでご

み問題に継続的に取り組むことが個人の問題として 浸透し、少しずつ社会を変えていくと信じたい。

(4) の干潟・ヨシ原の問題については、流域の 土砂と深く関係するテーマであり、上流域との関わ りの中で解決しなければならない重要な問題が背景 にある。これについては、2013年に実施した矢作 ダム湖内の堆砂状況の見学会が印象に残っている。 ダムの中に溜まった土砂がまるで海の砂浜を見るよ うであったこと(写真1)、ダム湖から掘削された 砂で谷間が埋められていたことなど、砂が不足して いる海から見ると、何とかならないものかと、もど かしさを感じざるを得なかった。その後、2015年 には矢作ダム管理所と三河港湾事務所の協力を得 て、東幡豆のトンボロ干潟の一角に矢作ダムの砂を 用いて小さな干潟を造成することができた(写真 2)。造成後しばらくして実施した観察会では、造 成箇所に多くのアサリ稚貝が見られたことから、ダ ム砂を用いた干潟造成が有効であることが分かった が、実干潟とのあまりのスケールの違いを思い知ら されることにもなった。これらの活動を通して、流 域圏での土砂管理の問題が非常に重要であることを 他部会のメンバーとも共有できたことは貴重な機会 であった。

(2) の「豊かな海」については、最近の部会の 議論の中心となっている。特に、ここ数年、三河湾 でもアサリが急に不漁になったことで、海部会では 漁業の実態を聞きながら何とかしないといけないと いう危機感を募らせている。数年前までは、三河湾 の富栄養化と貧酸素化が最大の問題であり、これら を解消することがすなわち環境改善につながると信 じていたが、生態系はそれほど単純ではなかったようだ。環境改善はすなわち「場」の改善と考えがちだが、生物にとって「餌」の問題は根源的な問題であり、行きすぎた海の浄化は致命的な打撃を与えることになりかねないことが分かってきた。「場」と「餌」が揃って初めて豊かな海が実現するということに気付かされた。10年の活動の過程で、豊かな海とはどういう海なのかについて、認識を新たにしたことは海部会の活動の中でも最も大きな収穫だったかもしれない。

最後に(3)の海と人との絆であるが、海部会での議論の中で、近年の若者の海離れがよく話題に上がる。海岸が整備され、道路も整備されて海へのアクセスが便利になり、海も以前よりはずっときれいになったが、人びとの海への関心が高まったわけではない。いろいろなイベントも一時的な効果はあっても海離れに歯止めをかけるまでには至っていない。海への関心を高めることについても、我々は海岸の整備や美しい海など「場」しか見てこなかったのではないだろうか? 10年の活動で分かった海の奥深さを、様々な立場で発信していくことが、海と人の絆を取り戻す上で最も重要ではないかと感じる。

以上、海部会の活動をふりかえりながら個人的な 感想を述べた。あっという間の 10 年であったが、 海に対する考え方が大きく変わった 10 年でもあっ た。50 年前の三河湾の原風景が将来に少しでも取 り戻せるように、懇談会の活動が役立つことを願っ て止まない。



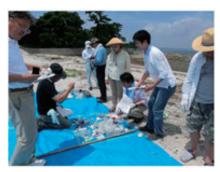
写真 1 矢作ダム湖内の白砂



写真 2 東幡豆のダム砂干潟

# 海部会 活動アルバム

● 2013.7.20 (第 10 回) 佐久島でごみ・流木調査



● 2014.9.5 (第 21 回) 矢作古川河口で海辺の鳥類観察



● 2015.9.13(第 27 回) 「矢作川をきれいにする会」主催の 「海の生き物調査隊」に参加



トンボロ干潟・ダム砂を利用した造成

● 2016.4.27 (第 30 回)

● 2017.8.21 (第 35 回)

干潟の現地視察

● 2015.9.25 ~ 9.26(第 28 回) 山部会・海部会合同 WG 東幡豆町・トンボロ干潟でフィールドワーク



● 2017.6.24 (第 34 回)







● 2018.7.30 (第 37 回) 吉田海岸 アサリ漁場の現状について ~ 2017年頃よりアサリ減少の話題一色に



● 2019.11.5 (第 42 回)









# 4. 市民部会(市民会議)10年のふりかえり

テーマ	手法	これまでの 課題	これまでの取り組み	見えてきた 課題	今後の試み
全体	WG・イベント等	理解が不足 有の場として構築 お加者減少 おいまして構築 おいまして構築 では、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	・(2010) 流域圏住民の視点から、課題と問題解決手法の検討、地域部会への問題提起・提案を行う場として市民会議が開催された。 ・(2011) 一色干潟などの「海」の現状を知る見学会を行った。 ・(2011) 森の健康診断に参加し、「山」の現状を知る見学会を行った。 ・(2011) 上流から下流まで「山・川・海」を知る2日間ツアーを開催した。 ・(2011) 国土交通省、愛知県からの情報提供を通し、今後の河川事業を学ぶ会を行った。  ・(2011) 市民有志による市民主導の運営を提案した。 ・(2011) 市民有志による市民主導の運営を提案した。 ・(2012) 市民に加え、行政、森林組合、学識者の連携した運営を提案した。 ・(2014) 「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」の3つのテーマを抽出し、それぞれ主務担当者を設け、活動を行うこととなった。 ・(2018) ワークショップ形式で、流域の上下流の課題、昔と今の変化、流域市民に伝えていきたいことを流域マップに示すとともに、意見のカテゴライズを行った。また、流域連携を代表する標語を作成した。 ・(2019) 各地域部会が抱える課題を懇談会全体で共通認識とすることを目標として、矢作川を巡るバスツアーの開催を提案した。		川岸の利活用の 議論  10 年間で新たい見えてきた課題の明確化  山川海合同勉強強値(頻繁な開催)  流域住民への情報発信
流	(海部会主体)	わせて、ごみも目標設定が必要 山づくり・木づかいの方針にあ と	-・(2013) 海部会主導で三河湾におけるごみ調査を行った。 ・(2015) 山部会と協働して、東幡豆のトンボロ干潟周辺のごみの現状を確認した。 ・(2016) 海ごみ・川ごみの問題について、全国的な活動を実施している一般社団法人 JEAN 及び全国川ごみネットワークから、ごみ問題に関する最新の知見について、情報共有を行った。 ・(2016) 愛知県が取り組むごみ学習プログラムの内容について情報共有を行った。 ・(2017) 22 世紀奈佐の浜プロジェクト委員会主催の「藤前干潟エクスカーション」に参加し、藤前干潟の清掃活動やごみ焼却場を見学した。	大作川の望ましい姿のイメージの可視化 大作川の望ましい姿のイメージの可視化 市民部会(市民会議)として おば連携デーマという枠に	
流域連携テーマ	(川部会主体)	がに現場を見る機会が必要   いった現場を見る機会が必要   いった現場を見る機会が必要   いったできるこ   いったのできるこ	・(2012) 国土交通省からの情報提供を通じて土砂管理を学んだ。 ・(2015) 川部会主体の勉強会として、小渋ダムの土砂バイパスを視察し、総合土砂管理の知見を深めるとともに、土砂管理検討委員会の進め方について意見交換を行った。  ▶・(2014~2017) 三河湾の干潟・浅瀬造成に関する行政計画や事業内容、愛知県が実施した海底ごみ・生き物調査の結果を情報共有するとともに、鳥類調査を通じて干潟や背後の土地利用の問題を共有した。 ・(2019) 小渋ダム土砂バイパス運用後の現地視察を開催した。	一ジの可視化・具体的行動としての流域連携デーマの議論民会議)としての流域連携デーマの議論民会議)としての流域連携デーマの議論の必要性民会議)としての流域連携デーマの議論の話題・課題を把握できるシステム	山川海合同バス
	(山部会主体)	らいたい	<ul> <li>・(2014~2019) 木づかいライブ・スギダラキャラバンは、流域内のみならず、名古屋や東京への出展等を通して認知度が拡大している。</li> <li>▶・(2014~2018) 流域ものさしを流域共通のアイテムとし、流域の市民に対して周知を進めている。</li> </ul>		ツアーの開催 農業や工業の団体との関係構築



第2回市民部会(2018.10.23)



第 4 回市民部会(2019.7.31)



# 市民部会のふりかえり

# 市民部会座長 豊田市自然愛護協会 光岡金光

山・川・海の部会では、それぞれの活動場所を軸として矢作川との関わりの中で課題解決に向けた議論や活動がなされてきた。当初には、三つのゾーン的な視点からどのような検討課題があるのかを知る意味で、合同での現地勉強会なども実施された。そうした中、118kmという長大な流れゆえに、川のもつ問題点は源流から上流・下流、そして海までそれぞれにあり、なお、複雑に絡み合って、各部会の単独での議論や活動では解決できない課題も明らかになってきている。

平成 26 (2014) 年度以降は、これらの中から流域連携テーマとして「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」の三つのテーマに絞って、各部会でも、それぞれの立ち位置から具体的な解決策について議論を深めてきた。

ただ、各部会での議論もこれまでの累積から、より深く、専門性も高まっているだけに、ややもすると他部会の活動や話題が理解しにくくなり、三者が一体となって取り組むまでには昇華できていない。この各部会の活動を互いに十分理解したうえでの議論でなければ、流域圏が一丸となった課題解決の動きにはできない。そのためには、山・川・海の部員が一緒になって話し合いを深めることが欠かせない。

そこで、これまでの「市民会議」「市民企画会議」を、 気軽に話し合いができるような会にする意味からも、 平成30(2018)年3月の全体会議以後、統合した 形で地域部会と同列の「市民部会」という呼称に変 更し、より活発な意見交換の場とした。

市民部会としては、2019年までに5回の議論の場を持った。まさに「市民」だけの、活発な(ご容赦いただけるなら「言いたい放題」の方が合っているかも)話し合いが始まった。市民部会は、まさに、山・川・海部会に横串を通す存在でありたいとの思いにあふれた話し合いが続いている。

市民部会では、今後の方向性を明確にするために、 「山・川・海の恵みにつながる矢作川をつくる ~今 新たに!『流域は一つ』生命共同体~」という標語を 掲げた。これを目指して市民目線で話し合いを深めることが市民部会の存在価値であり、流域連携の方向性でもあると思っている。

市民部会では流域連携テーマに対して、これまで にできなかったこととして次の3点が挙げられてい た。このことは同時に市民部会の目指すところでも ある。

- ①山・川・海の部会の話題や課題を相互に把握できるシステムをつくること
- ② 市民部会としての流域連携テーマの議論を進める こと
- ③ 矢作川の望ましい姿のイメージの可視化と具体的 な行動を進めること

これらに対応して、地域部会合同のバスツアーなどによる勉強会、流域連携の各テーマに沿った学習会、矢作川感謝祭・三河湾大感謝祭での情報発信、担い手づくり事例集等々の充実が望まれる。

今後、市民部会として議論し、願わくば各地域部 会で話題にしてもらいたいと考えている事柄もある。

一つは生態系に関わることである。矢作川は多様な動植物を育んでいる。良くも悪くも、その変化は見逃せないのだが、とりわけ生態系に関わる部分での議論が希薄に思われる。地点ごとの話題はあるものの、矢作川流域を面として捉えた議論の必要性を感じている。

もう一つは、農業・工業などとの関わりである。 その水の利活用とともに深い関係をもって矢作川を 創っている。やはり面(流域)の構成要素として共 に考えていきたいものである。

これまでの流域連携テーマにこうした要素も付加 して話し合いが進められると良いと思っている。

市民部会は、データに基づいた学術研究や治水・ 利水の専門的識見による議論をする場としてではなく、地域部会が「流域は一つ、運命共同体 ~川は つながる・川でつながる~」に向けて議論・活動を 活発に進められる存在でありたいと願っている。

# 5. 流域圏懇談会の全体像から各部会展開と流域連携を探る

~「矢作川流域圏懇談会ホームページ (HP)」から会議・活動記録を読み解く~

10年誌編集委員 近藤 朗

2010年8月からの「矢作川流域圏懇談会」全体像については、 当然ながら私を含め全ての会議・ワーキンググループ(WG)に 参加している方がいるはずもなく、俯瞰しづらい。ただし事務 局の国交省・豊橋河川事務所の HP には 10 年に及ぶ活動、全 ての会議の記録、参加者名簿が掲載されており、10年誌を編集 するにあたって全てをくまなく時系列的に読み解くことにした。 膨大な作業であったが、この10年間に要したエネルギーはすさ まじく、2010~2019年度までに開催された会議・活動などは 230回に及び、延べ参加者は、少なく見積もっても 5,600人と なる。これには準備会合や流域連携イベント、事例集等各取材 に要した労力を含めていないので、とんでもない熱量がこの10 年間に注ぎ込まれたこととなる。議事録(2013年度からは「懇 談会通信」)を読み解くことで、懇談会自体の全体像と流域連携 の変遷と到達点などを探り、では私たちはこれから何をすべき なのかを見つめたいと思ったのである。なお、10年誌に寄せら れた各部会座長の「ふりかえり」も大いに参考とさせていただ いた。なお、これらの記録を閲覧することは当然、誰でも可能 なので、ぜひお読みいただきたい。



# 矢作川流域圏懇談会 10 年の流れ

■ 設立、及び第1期(2010-2012年度)の展開

懇談会は、3年を1ステージとして区切り、黎明期となる第1期(2010-2012)、山・川・海で議論を進めた第2期(2013-2015)、そして第3期(2016-2018)とつなぎ、2019年度で10年間まとめの議論に入っている。単に総括するだけでは意味がなく、流域圏での課題は依然数多く残されている状況で次にどのような展開をするのかが問われている。そのためのふりかえりだ。

懇談会設立総会には、3省1庁3県13市2村、 辻本哲郎(全体)座長以下学識者11名、民間14、 市民団体30など全体で143名が参加している。 この途方もない組織体で第1期にかけて行われた のは、まず懇談会そのもののあり方、何を議論する のかということから始まっており、これは第2章 で述べられたとおりである。

第1期の特徴は、山・川・海での課題検討の議

論は勉強会という位置づけで順次行われたが、参加者は現在のような分業制ではなく、山であれ海であれ、主要なメンバーは皆で議論していたようだ。第1回目の勉強会は、【山】地域部会として2010年12月に開催された。

実は、この勉強会が山だけでなく<u>懇談会全体の流れをつくる重要なテーマを提示した</u>のではないかと思っている。この回の直前に関係者が山に移住した黒田武儀氏宅を訪れ、問いかけられた言葉は鮮烈だ。「山や水の本当の問題・危機が、山に生きている訳ではない方々にどれだけ理解されているのか」。勉

強会で黒田氏は、山及び山の 百姓の現状を切々と訴えられ ている。蔵治光一郎座長など からの問題提起を含め、これ ら流域圏の課題を本当に共有 していくための葛藤が始まっ たのである。第3期までを通



黒田武儀氏

「源流から海まで、2日がかりの『矢作川の全て』バスツアー」





じて常に山部会が危機感を背景に、懇談会をリード していく流れは自然だったのかもしれない。

2011年1月開催の第1回地域部会において、【山】 から出発点として「矢作川の恵みで生きる」の共有 が提案され、その具体的手法は2012年2月の地 域部会で具体的に提示された。【海】【川】も同様に テーマを設定し、2012年度からは山・川・海ごと に個別の議論を進めていく体制が整った。ただしこ こに至るまでに、会議ばかりで人が去り「空中分解 しそうな」状況に陥った時期がある。

2年目、2011年のことであるが、この時も山部 会から「問題点を共有するためフィールドに出よう」 との提案で、同年9月、2日間の源流から海まで「矢 作川の全て」のバスツアーが実施され、懇談会は息 を吹き返すこととなった。これは、実質的には【山】 【川】【海】が連携する最初のプロジェクトだったと 言える。これ以降、【山】【川】【海】の各地域部会 でも現場にて課題共有する流れができ、再び活性化 していく。

# ■ 各部会 WG 設立 (2012 年度) から 第2期(2013-2015年度)への展開

2012年度から【山】【川】【海】部会ごとに内容 に関する個別議論(WG)が始まった。第1期のよ うな全員参加型ではなく、いわゆる分業体制への移 行であり、中身を深めていく一方、当然ながら山か ら海までの連携、課題共有意識が薄くなっていく。 この時期の流域連携をリードしたのも【山】部会で ある。2013年度より「山村再生担い手づくり事例 集」調査プロジェクトを開始し、広く取材チームを 募った。木づかいテーマも、根羽村森林組合の今村 豊氏は 2014 年から「木づかいライブ・スギダラキャ ラバン」を始め、流域圏内外まで年間 40 回ほどの 広報・巡業活動を展開していく。これら外への発信 が新たな連携も生んでいき、【山】へは次々と新た なメンバーが加わる流れができる。

一方、【海】部会は他部会と比べて圧倒的に人が 少ないのに関わらず、対象範囲が広く三河湾全体、 あるいは伊勢湾にも目を向けなければならないと いう危機感から、【山】とは別な形で積極的に外へ と出かけ、発信していく。当初の WG から自前で 行うのではなく、当時私が伊勢湾(答志島、3県な ど)で展開していた「22世紀奈佐の浜プロジェク ト」にも公式に参加いただき、これが私の懇談会と 関わる最初となった(2012年6月、9月)。この 関わりが、「奈佐の浜プロジェクト」(以下、「奈佐 P」) が 2014 年 6 月に実施した渥美半島での「西 の浜エクスカーション」へとつながり、ここでは【山】 洲崎燈子氏、【川】硲さくら氏、【海】青木伸一座長 が、それぞれ懇談会各部会の発信をするという初め ての部会合同の試みであったと思う。「奈佐P」には、

2017年6月にも 【海】部会が WG として参加して いる。【海】は、 2013年11月に 矢作ダムの堆砂 状況を視察する など、極めて精 力的に行動力を

発揮した。このことによ り土砂供給の問題を強く 発信したのである。その 背景となるのは【山】と 同じく危機感にあろう。



西の浜エクスカーション



硲さくら氏

そもそも【山】部会の

四つのテーマは、全て部会から外へと発信されるも のだ。山は元より、流域圏のあらゆる仲間とのつな がりを探る「担い手づくり事例集」(洲崎氏)、木の 消費者へのキャラバンをどこへでも出かけて行く

「木づかい」(今村氏)、行政・自治体・国などへデータ収集と発信、呼びかけを続ける「森づくり」(蔵治座長)、組合林業班の苦悩と解決を探ろうとする「山村ミーティング」(丹羽健司氏)と、誰もがWGの合間も流域圏内外を飛び回っていた。なお丹羽氏は長らく模索していたものの、2017年より具体化し「山村100人ヒアリング」としてスタートする。「森づくり」に関しては、ベースとなった「矢作川森の健康診断」が2014年に終了したが、2015年8月には初の地域開催となる「第1回あさひ森の健康診断」が始まるなど、新たな広がりも見せ始めていた。

蔵治座長が自治体に働きかけデータを集積して いた矢作川流域内の間伐面積については、2015年 10月WG(第29回額田)において「矢作川流域 市村(平谷村・根羽村・恵那市・豊田市・岡崎市) 全体の間伐面積は、2010年をピークに年々減少し ており、特に2014年は大きく減少した」と報告し ている。これに呼応するかのごとく【海】では、「三 河湾のアサリの漁獲量が 2008 ~ 2012 年頃をピー クに減少し始め、2014年頃からはさらに大きく激 滅していく。これが特に認識された2015年は、【海】 が切望していた矢作ダム砂による人工干潟造成が始 まり、その効果調査等も始めた時期でもあるが、こ ちらも大きな問題意識の変化となった。このような 危機感なども背景にあって、2015年9月に懇談会 として初めての【山】【海】合同部会が宿泊+フィー ルドワークという、山部会方式にて開催された(会 場:西尾市東幡豆地区)。漁業者、漁協との懇談会 に始まり、夜を徹しての議論、翌日は矢作ダム砂を 投入して造成されたトンボロ干潟観察を行い、相互 理解を深める画期的な場となった。

この場で鈴木輝明副座長の発言が次のようにあ



2015年9月 トンボロ干潟



る。「そもそも海が健全であれば、少々の陸の問題(富 栄養等)など消し去るくらいの緩衝能力を持つこと が証明されている。その緩衝能力を壊したので、余 計に陸域の問題(今度は貧栄養)に敏感になってし まった」。この言葉は、後にだんだんと大きな意味 を持つようになったと感じる。

合同部会はその後、2018年8月に岡崎で開催され、初めて【山】【川】【海】が揃い、水(水質)をテーマに議論する。

# ■ 第 3 期(2016-2018 年度)の展開、 流域連携の新たな模索

流域連携の重要な点は、懇談会部会間のつながりだけでなく外部への発信と巻き込みにも目を向けたい。

第3期に入り最初の動きは、まず2016年7月の「奥矢作森林フェスティバル」(奥矢作レクリエーションセンター)への参加である。【山】からの要請に対し、【海】が快諾。懇談会としてのブースが設置され「海の生き物展示」が好評を博した。この頃から【山】丹羽氏が毎年豊田大橋下で開催されて





2018年9月 第10回矢作川感謝祭に参加



2019年10月 第6回三河湾大感謝祭に参加

いる「矢作川感謝祭」の実行委員に加わり、矢作川 水族館・新見克也氏らと共に山~海までの連携を模 索し始めた。懇談会としての最初の参加は2017年 9月で、【山】から森林組合などがこぞって集まっ たが、この時は【海】からの参加がかなわなかった。 ついに 2018 年 9 月、流域圏四つの森林組合に東 幡豆漁協の出展が実現し、主催側である矢作川水族 館と共に、【山】【川】【海】が揃う初めての連携イ ベントとなったのである。さらに2018年10月に は初めて「三河湾大感謝祭」(愛知県主催・蒲郡市 開催) にも参加。以降どちらも継続して参加してい る。これらイベントの意義は、懇談会内部のみの閉 ざされた共有では広がっていかないため、一般市民 へも広報することがねらいだ。2019年からは懇談 会紹介と「矢作川クイズ」なども披露し、さらなる 巻き込みをねらう。

さらに【山】部会は、矢継ぎ早に次々と新たな手を繰り出していく。第2期で展開した「山村再生担い手づくり事例集」は既に唐澤晋平夫妻など多くの仲間たちを【山】に引き込んだのであるが、これに飽き足らず、2017年度からは「流域圏担い手づ

くり事例集」として川、海まで拡大するとともに、 さらにつながった新たな仲間たちとの「担い手づく り事例集交流会」を展開、現在まで3回実施した。 (2017年根羽村、2018年佐久島、2019年岡崎(額田):山・海・川への展開とつながる)

第3期の【海】は、アサリ漁獲がさらに激減し ていき、海の貧栄養化の問題議論一辺倒になる。 2017年からは、【海】が要望していた矢作川、豊 川(流域下水道)浄化センターでの試験管理放流、 すなわち TP (リン)、TN (窒素) の濃度を可能な 範囲で上げていく試みが始まり、その効果を見守っ ていくこととなる。ゆくゆくは法律に基づく基準値 の見直しという課題に直面することとなり、これを 理解いただくためには、都市や消費者などへの強い 発信をしていくこととなろう。ある意味次の時代の ミッションが【海】では明確になったとも言える。 この頃の【海】は、今までより多くのメンバーが参 加するようになってきた。漁協、水産試験場の他、 (国) 三河港湾事務所、環境省中部事務所、県環境 部からは水質の問題に関して水地盤環境課、ごみ問 題に関しては資源循環推進課などが加わり、まだま



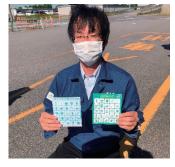


2018年4月に佐久島で開催された流域圏担い手づくり事例集交流会翌日のエコツアー。懇談会のツールである流域ふろしきと流域ものさしも活用



2019年6月に岡崎(額田)で開催された事例集交流会

2020年10月開催の海部会 in 佐久島。多様なメンバーが揃った「海ごみ学習会」。佐久島ごみビンゴを使って海岸清掃を行った







だではあるが問題意識の共有は進んでいく。2018 年4月に佐久島にて事例集交流会を開催したこと により、オフィス・マッチング・モウルなど、さら にメンバーは広がった。

この10年での【川】世界の(主に連携) 牽引者 は、「矢作川研究所」「矢作川水族館」「矢作川森林塾」 が担っていた。特に豊田市矢作川研究所は、前時代 からの流れも継承しつつ、岩本川での「小さな自然 再生」の取り組み、矢作川・阿摺ダム下流(通称ソ ジバ)でのアユ生態環境(河床)改善実験や、これ から籠川支川・広沢川において市民目線での川づく りにも着手する。矢作川・加茂川合流点での段差解 消(市民)工事を豊橋河川事務所と実践した矢作川 森林塾と、河川環境を分かりやすく市民、子どもた ちに発信する矢作川水族館は流域連携の要であり、 懇談会とはこれまで流域連携イベントなどで協働を 進めてきた。

さらに矢作川研究所は、高齢化するも頑張ってい

る多くの河川愛護団体や矢作川漁協とのつながりが 今も深く、古きを尊びながらも優れたパフォーマン スを見せているところは、まるで【川】世界の「天 下杉」(96頁、127~128頁参照)なのではない かと確信している。次の10年においても共に進み たいと思う。

# ■ 次のステージに向けて

最後に、議事録から「次のステージを見据えるう えで最も重要なメッセージ」を見つけたので記して おきたい。

2019年3月15日に開催された第8回全体会議 における辻本哲郎座長の言葉である。

「日本に二つとない懇談会の活動を我々だけで認識 するのでなく、世間に広めるための発信方法を検討 してほしい。そのことで見えてくるものがあるはず である」





# 「キーパーソンヒアリング」想いの源流を探る



この懇談会を支えてきた、たくさんの個性的なキーパーソン(鍵となる人たち)。 その皆さんに、矢作川流域圏懇談会について、「担い手づくり事例集」形式でお話を聞いたよ。 \*「担い手づくり事例集」については第5章を見てね!

\* キーパーソンの肩書きは取材時のものだよ。

# はぎぼう



# 蔵治光一郎 さん

(東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

(山部会) 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 (学識経験者) 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 唐澤晋平 レポート作成者 : 唐澤晋平

取材日 : 2020年1月28日(火) ※山部会「まとめの会」終了後

取材場所 : 豊田市職員会館2階



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

東京大学で森林水文学の研究をしている。流域圏懇談会が立ち上がったころは瀬戸の東大演習林にいたが、現在は東京勤務で毎日満員電車に揺られながらサラリーマン生活をしている。現在も豊田市、岡崎市には関わっており、 一方で学生時代からの流れでタイやマレーシアなど海外の研究にも携わっている。

もともと東京生まれ東京育ちだが、子どものころから山の中で遊ぶのが好きだった。まさかそれが仕事になるとは 思っていなかった。自分の子どもも自然の中にいることが好きになってきた。

# あなたにとって、流域圏懇談会とは?

矢作川森の健康診断が2005年から始まっており、丹羽さんや洲崎さんと動いていたのが下地にある。他の部会に 比べて山部会は初めから議論が盛んで、立ち上がった当初のメールややりとりを読み返すとしっかり時間をかけて とても真剣に議論をしていた。

流域圏懇談会は楽しくて安心して話すことができる。そして多様なジャンルの一流の方が参加し交流しているのが面白い。自分がいろいろな情報を持ってくると、それに対していろいろな意見や情報が返ってくる。森や木材の課題に対していろいろな立場で考えることができ、そうして得られた知見をいろいろな委員会の中で発言する際に活かしている。愛知を離れた今でも、流域圏懇談会のスケジュールは最優先で調整している。

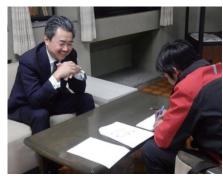
# これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

10年間で流域の中で頑張っている人が出てきて小さな火種は生まれてきているが、当初から議論してきた課題は依然厳しい状況が続いている(森林組合の中堅離脱や山村のジリ貧など)。火種を大きく育てていくことも会の役割だと思っている。

森林のことは山側だけの問題ではなく、都会の人のあり方こそが重要。大学の立場としては最近の動きとして中学生の技術の教科書の中に森林や林業の話題を盛り込むことが実現しそう。街の人が山に来て、気づいて、共感してもらいたい。外への広がりはまだまだなので、流域圏懇談会にはこうした流れをつくるためのいろいろな仕掛けを展開していくことを期待している。



山部会のベースにもなっている矢作川森の健康診断



取材風景





# 丹羽健司 さん

(シェアカフェHYAKKEI 非常勤店番)

(山部会) 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 (学識経験者) 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 神本 崇、中田 慎 レポート作成者 : 神本 崇、中田 慎

取材日 : 2020年1月28日 取材場所 : 豊田市職員会館



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

農水省の役人を30年やり、早期退職して10年間地域おこしを仕事にしてきた。それは、「森の健康診断」や「木の駅」、それに「山里の聞き書き」などでそれぞれの地域の困りごとや思いを掘り起こすことで、「木の駅」の立ち上げのためのアドバイスも行ったりしてきた。木の駅は全国で80カ所ほどできたし、もう10年になるので足を洗うことにした。「森の健康診断」も、矢作川流域では10年を一区切りとして終えた。これからあとの10年は実家の町家再生に携わることになりそう。城下町の築120年の商店を30年空き家にしてきた。そこを農山村移住(希望)者たちのなりわいや発信の拠点にしたい、いや学校と言った方がいいかもしれない。孤独な素人山主に寄り添ってきたことを今度は悩める素人店主たちとやることになるのかもしれない。

# あなたにとって、流域圏懇談会とは?

懇談会発足時、私は非常に懐疑的だった。しかし我慢して続ける中で、国交省やコンサルの目指す予定調和路線に乗らず自由に議論ができる場ができていった。国交省がこんなに柔軟な取組をするとは思っていなかった。

自分にとって懇談会は、安心して自分の妄想(自分の理想・やりたい事)を言える場であり、そのためにどうしていったらよいかを語れる場である。それが言いっ放しに終わるのではなく、記録され、実現していくことをチェックできる存在でもあり、問題が整理されるという機能が懇談会にあったということが重要。そういう意味では懇談会はすごい存在だと思う。広がりは限定的だが、コアメンバーでいつでも議論ができる。

また、夜泊まって語り合うことが大事であり、山部会ではそれができる。元気が出るし、そこでも有意義な議論ができる。その時に大切なのは参加メンバーが上下なくフラットな関係で語れることである。

妄想は語る場がないとしぼんでいくしかない。懇談会がなかったら実現していないことはたくさんある。自分の妄想で言えば100人ヒアリングや担い手づくり事例集とかであるが、山部会の取り組んでいるそれぞれの活動は妄想から始まったものであり、実現している。国交省は懇談会を運営してくれているが、その分の成果は出ていると思っている。

# これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

若い人、新しい分野の人が来ることへの期待はあるが、山部会で言うならば、現在思い描いているようなことが具現化することが大切だと思っている。こういった会議は、参加して楽しいと思うところを起点にしないと人は寄ってこない。そのためにも今のように当事者同士が対等平等に語り合うことができる関係を保証していきたい。このようなフラットな場がいろいろなところにできれば社会は変わるだろう。

現場に寄り添う形で、流域の山のこと、木のこととかを思う人が集まって、ちょっとしゃべったら聞いてくれる、あるいは解決の糸口が見つかった、というような場だと思う。偉い人たちがいっぱい集まる場ではない。流域懇をそういう場に展開していく。今はまだ限られた人たちだが、いずれそういう方向になっていければいい。そういう場はまだ日本にない。例えば、森林組合作業員の100人ヒアリングでは答えは見えない。林野庁のガイドラインの話が蔵治さんからあったが、作業員の目線に落とし込んだガイドラインを流域懇でつくろうよと言えば、森林組合も作業員を流域懇に送り出す大義名分ができる。当事者が関わる。これからの流域懇ではこの流れが期待できる。

流域懇発足当初から流域内フェアトレードを提唱していて、根羽村森林組合では今村さんが奮闘しているが、昨年やっと額田町の「リタウッド」で小さな一歩を踏み出すことができた。このような動きを海も川も一緒になってもっと推進できれば素晴らしいと思う。一昨年から矢作川感謝祭とも協働できるようになった。これらも流域懇の大きな成果であり、多様なセクターの参画を目指す上で河川管理者である国交省が事務局をやることに大きな意義があると思う。

# 流域圏懇談会について、フリーコメント

2000年の東海豪雨から20年、「流域は一つ、運命共同体」の合言葉が再び脚光を浴び、矢作ダムを埋め尽くした流木と山肌に残る無数の土砂崩落の写真で人々の目は山に向いた。なんでこんなことが起こったのかを知る私の旅もここから始まった。05年から森の健康診断、09年から木の駅、流域懇は10年から始まった。

04年1月の矢森協(矢作川水系森林ボランティア協議会)発足時に、「私たちは、山と都会に幅広い森の応援団をつくり活動することを、ここに宣言する」とした。あの雪の日に仲間と謳いあげた胸の高まりを大切にしつつ、山と都会に応援団をつくれたか自問し続けたい。



丹羽さんの活動の原点である森林ボランティアグループ 「足助きこり塾」(2001年設立)。子どもたちのきこり体験イベントは約20年続いている



2004年1月18日、大雪の中、矢森協の発足式





2014年6月7日、第10回矢作川森の健康診断。開会式で代表挨拶



2019年9月13~14日、第8回木の駅サミットin飛騨高山 全国各地から木の駅プロジェクトに取り組む仲間たちが集まった

# はきぼう

# 003

# 今村 豊 さん

(根羽村森林組合 参事)

(山部会) 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体(関係団体)学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 野田賢司 レポート作成者 : 野田賢司

取材日 : 2020(令和2)年2月25日

取材場所 : 愛知県西三河総合庁舎 1階 待合室



# あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1960(昭和35)年東京都出身。子どもの頃、犬小屋を木で制作したことがあります。中学生時代に山登りに目覚めたことが現在の原点です。登山が好きで、登った山頂から見る風景によく感動しています。家庭は飯田市で、農業・畜産業を営んでいます。根羽村とは地区担当職員として9年間林業振興に携わったことが縁で、根羽村の林業・地域活性化の魅力に惹き込まれました。県職員を退職し、2012(平成24)年から現職(根羽村森林組合:信州木材製品認証工場・JAS認定工場、あいち認証材認定事業者、JIA長野県クラブ賛助会員、スギダラ矢作川流域支部、SGEC/PEFC 森林管理認証、SGEC/PEFC CoC認証)。

根羽村を農林業や地域資源で自立する理想的山村モデルとするため、根羽村長(=森林組合長)と一体となり、志を同じくする 方々と共に根羽村トータル林業のさらなる発展を目指して戦略的活動を展開しています。

# あなたにとって、流域圏懇談会とは?

源流域再生のための次の4つの大久保村長提言<sup>1)</sup>を根本にして、根羽村のトータル林業を通して、具体的に実践展開します (図1、図2参照)。

- 1)源流域は私たち矢作川流域圏の共有財産。この源流を守ることは緊急の課題。100年先の日本の存続に向けて「源流基本法」を設け、あらゆる力を結集する仕組みを構築する。
- 2)流域圏における安全・安心で、持続的な循環型社会のあり方に、もう一度光を当て、理想的なシステムを確立する。
- 3)21世紀の循環型社会形成を果たすため、源流が培ってきた源流文化を再構築し、これを流域圏に伝える教育の場 (機会)を整備する。
- 4) 国土保全という大変重要な役割に機能している源流域の農林業の経営意欲の活性化、緊急の鳥獣害対策、森林の土地政 策の確立を図る。







図2 木づかい

図1 再生戦略

根羽村森林組合は、矢作川流域に関する様々な課題を解決するための検討を進めている矢作川流域圏懇談会に、2013(平成25)年度から、民(関係団体)の一つとして地域部会の山部会に参加しております。私は山村再生担い手づくり事例集、森づくりガイドライン、木づかいガイドラインの作成に参加しています。矢作川流域には当森林組合の他に飯伊森林組合(長野県)、豊田森林組合・岡崎森林組合(愛知県)、恵南森林組合(岐阜県)がおられ、特に当森林組合には製材加工場があることから、木づかいガイドラインのまとめ役を担っています。

木づかいガイドラインはまだ作成途上ですが、策定作業は3県をまたぐ矢作川流域林業のあり方を考える契機になりました。私は矢作川流域圏懇談会への参加が契機となり、矢作川流域の林産業の振興や多くの方を木のファンにする「木づかい推進」の創造的取組に挑んでいます。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

# (1) 県外(流域圏)への様々な「木づかい」の啓発

根羽村は矢作川の水源として下流域から認められ交流してきた歴史があります。村は木材加工場を保有しJAS規格も取得しました。一般市民に使える木材加工品が増えていますが個人住宅着工件数は減っています。私たちは、建築材以外の木材利用法も考えて次のような製品を作っています。環境性能重視型木質舗装材ブロック、スマートエコハウス、簡易セルフビルドハウス、家族風呂、流域ものさし(矢作川流域を学ぶワークショップ参加者の手作りで、矢作川流域産のいろいろな木をモザイク状に並べ、長さも矢作川の本川流路長118kmにちなみ11.8cmとしたもの。図2)、癒し系「木っころ」、フリーマガジン「耕Life」とのコラボ製品、動く木のおもちゃ、スパイラルタワー(軽やかな音を立てながら落ちる木の玉)、どこでもシリーズ(ブランコ、オセロ、ウッドデッキ、もちつき機など)です。当懇談会を通して流域圏に「木づかい」の啓発を期待します。

### (2)里山資本主義の実践的展開

私たちは里山資本主義で、里山の産物を活用して広く流通させたいと考えています。素敵な時間が商品になり、そこで生まれるスモールビジネスが生業になるのです。豊田市足助地区の香嵐渓は、里山を観光資源として確立させた成功例と言えます。当懇談会の活動はこの後押しになると期待しています。

### (3)魅力的な村づくり推進に期待

私たちは既に幾つかの大学と、①農林分野・山地酪農の導入、②森林体験・住居・環境分野、③木育分野、で連携を 始めています。当懇談会でも、さらに魅力的な村づくりに繋がる連携活動を期待します。

# (4)「山村再生・流域圏担い手づくり事例集」の活用

私たちは木や森に関わる団体の横のつながり・連携を図りたいと考えています。その糸口・契機として、森や山の感謝祭を、山でも海の関係者と協働で開催できることを願っています。また、「田舎の親戚制度」を山村地域に定着させ、都市部の子どもたちに田舎や第一次産業を原体験(記憶の底に長く残って以降の精神形成に影響を与える幼少期の体験)できる場を増やしたいと考えています。

### (5) 矢作川流域林業担い手100人ヒアリングの成果を引き出す

架線が得意な恵南森林組合、人材交流が盛んな岡崎森林組合、森づくり会議など先進的な動きのある豊田森林組合など、林業の担い手と英知を集めて議論すれば、ヒアリングの成果が活かせると思います。

# (6)矢作川流域圏山村ミーティングの推進

流域の森林組合員を集めるテーマが欲しいです。100人ヒアリングでポイントとなるキーワードで良いと思います。懇親会は設けてください。森林施業中の留意事項は、森林認証の取得有無に関わらず、どの森林組合でも必要です。100人ヒアリングの中でぜひそのような観点も議論していただきたいと思います。

# (7)懇談会発足10年の取りまとめ

流域圏年表は、矢作川と繋がりの深い関係団体、森林組合の発足や統廃合を漏れなく記載して欲しいと思います。山部会は地域持ち回りの上毎回懇親会を開き、参加者の心を開き勉強になりました。この形態は大変画期的で、参加者のモチベーションを上げています。この点も記載して欲しいと思います。

### (8)その他

- ・森・人・活動が一目で分かる「流域圏地図」の制作。
- ・活動成果発信に必要な予算の確保。流域圏の市町村が同時に「矢作川条例(仮)」を制定すれば、行政が条例に基づく取組を始めるとの見解(蔵治座長)もありますが、中部の環境先進5市サミット共同宣言のように、「宣言」でも可能ではないかと思います。
- 「矢作川流域圏木づかいガイドライン」で、人のライフステージ別に木づかいが具体的に検討されること。
- ・当懇談会が公共(市町村)に働きかけ、流域連携で木づかい(矢作川流域圏内での木材利用)がさらに進展することです。自治体以外で木づかいの事例があれば情報収集したいと思います。
- ・市民会議に出席し、健全な森林土壌が海の富栄養化に関連があることを初めて知りました。合同部会で川部会・海部会に聞きたい事項や知ってほしい事項をテーマに挙げ、フリーディスカッションされることです。

# 懇談会へのフリーコメント

# (1)矢作川流域圏木づかいガイドラインの補足

ガイドラインづくりには、メンバーに各自治体、製材所、建築者等も入れ、また、とよた森林学校と連携して、①流域圏について共通認識できるイベントの開催、②森林環境教育、③地球温暖化防止、という視点も活かしたいと考えています。

木づかいに関するどこでもシリーズにおいて、山部会参加者に「どこでもサウナ」を体験いただきました。今後は、サウナの周りでゲーム・婚活・山村ミーティングを行うなど、その活用を模索しています。長野県森林環境譲与税の活用提案は、現在、東京都墨田区や府中市で行っています。









写真1~8 今村参事の 日常のひと

写真1

人工林の整備・管理

写真2 イワナ・アマゴが棲む渓流 写真3 恵南豪雨被災森林の回復

写真 4 森林組合の取り組み説明











下段:トー タル林業の 推進、「木 づかい」の 啓発・普及 活動

森林造成試験地案内 写真 6 帯状伐採・植栽・獣害対策 写真 7 製材加工場木材乾燥施設 写真 8

矢作川流域圏3県への様々な依頼は、懇談会から正式な依頼書で出すと良いでしょう。事業を戦略的に推進するため には財源の確保が必要です。森づくりガイドラインと重なる部分は、川部会、海部会の団体を含めて流域再生をテーマ にすると良いでしょう。試作提案した「流域ものさし」は流域圏の名刺になると思います。活用法を検討します。

2014(平成26)年9月、根羽村森林組合内に「全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部」を立ち上げました。当支部は、

「日本全国スギダラケ倶楽部」の活動に準じ、戦後の復興期に段階的に植栽されてきた矢作川流域の人工林をきちんと 活用し、流域内の林産業と山村・里山に活力を生み出し、矢作川流域市民の全ライフステージにスギ・ヒノキや広葉樹を きちんと活用し、あらゆる生活空間をスギダラケ(ヒノキダラケ、広葉樹ダラケ)にすることです<sup>2)</sup>。 木づかいガイドラインに 「木づかいライブ・スギダラキャラバン」の活動を掲載したいと思います。「木づかい推進スギダラキャラバン」の訪問実施 箇所数は、年々増加しています。世の中に木づかいニーズを感じています。安城市の小中学校野外教室では、茶臼山 高原の水源の森を使って木づかいを推進しています。さらに「木と軽量なアルミ」を使った「どこでもシリーズ」を展開した いと考えています。

田舎と都市の人がお金を出し合って「木づかい」することで、田舎の人は里山を魅力的な場所に変えることができるで しょう。都市の人は生きる技能、作物の栽培方法等が習得できます。当ガイドラインでこの制度も紹介したいと思いま す。長野県は新たな森林環境税の使い道として、防災・減災の観点から、間伐の緊急性を有する林分を定め、積極的に 活用していく方針です。各自治体の木材利用指針は、生産から搬出までのサイクルを明記しています。これを広く周知し たいと思います。

# (2)「木づかいガイドライン」で啓発を加速する

最近、三河湾では、これまで好調だったアサリやノリの生産量が減少し、漁業生産額の確保が厳しい状況となり、海面 漁業者が頭を抱えられていると聞きます。一方、上流域の林産業も厳しい状況です。上流域の小さな森林組合が今後 生き残れるかどうか、様々なアイデアを取り込み実践活動に励んでいます。この一つの柱として、矢作川の上下流連携 のもと、「矢作川流域材」という名称の定着を目指しています。矢作川上流域の5つの森林組合から供給された木材を下 流域の岡崎市・豊田市・安城市・碧南市・西尾市・刈谷市等の都市部で大いに使っていただけるよう、開発活動に取り組 んでいます。「木づかいガイドライン」で啓発がぜひ加速されることを願っています。

# 取材を終えて

山の担い手として斬新で精力的に活動されている今村さんへの取材機会をいただきました。取材を通して、今村さんの アイデアが豊富で啓発・木育活動まで広く深く展開されている"元気パワー"に圧倒されました。近年、新たな形で自然や 農山村との繋がりを取り戻す動きが増えています<sup>3)</sup>。そして、里山が生み出す生態系サービスを次世代の流域に伝える ために、様々な生態系サービスを組み合わせ、調整しながら流域の社会的なシステムを再構築していくことが重要4)とい われています。今村さんの意欲的で実践的な取組と提案は、矢作川流域圏において、生態系サービスを利用する産業 を復活させ、流域内供給サービスのアンダーユース化と調整・文化サービスの劣化を是正し、固有の文化や豊かさを保 った地域を再生させ持続可能な自然共生社会形成につながることでしょう。改めて、今村さんが取り組まれている "木づかい戦術"に共感した一人として、矢作川流域圏懇談会を仲立ちに、微力ながらご協力できればと願う次第です。 (取材者)

# 〈主な参考文献〉

1)根 羽 村:矢作川流域連携による地域づくり~地域内循環と流域連携~, 2018.

2) 今村 豊:根羽村森林組合の取組みについて-「トータル林業」の確立へ-,森林組合, No.539, 6-10,全国森林組合連合会, 2015.

3) 中静 透: わが国における生態系サービスの変化, 環境情報科学, 45-3, 5-6, 2016.

4) 山本勝利: 特集の編集にあたって一里山の多様な利用価値の再生に向けて一、環境情報科学、45-3、1-4、2016。

# はぎぼう



# 洲崎燈子さん

(豊田市矢作川研究所 主任研究員)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 (学識経験者) 行政 事務局

ヒアリング参加者: 近藤朗、高橋伸夫、鈴木輝明

レポート作成者 : 鈴木輝明 取材日 : 2020年3月7日

取材場所 : 名城大学大学院総合学術研究科鈴木研究室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

東京都生まれ、写真のような美人、早稲田大学人間科学部卒業、同大学院理工学研究科後期博士課程を経て現在は豊田市矢作川研究所主任研究員。専攻は植物生態学、博士(理学)。矢作川流域の植生の現状と成立過程、その望ましい管理手法等の調査・研究に従事。日本生態学会等で活動成果を報告。

大学院では里山(コナラ二次林)をフィールドとして、管理放棄後の植生変化をテーマに研究を行っていた。高校までは自然とはほぼ縁のない生活を送っていたが、ジブリアニメ「となりのトトロ」の舞台となった、東京と埼玉の都県境にある狭山丘陵の一角にある大学のキャンパスに通ううちに、人と自然の共同作業でつくられてきた里山は、これから人が自然とうまく付き合っていくお手本になる場だと思うようになった。

その後、アルバイトで矢作川河畔の植物調査に参加したことがきっかけとなり、1998年に豊田市矢作川研究所に就職した。矢作川流域は名古屋都市圏に隣接していながら豊かな自然環境があり、住民が地域の自然に深い思い入れを持ち、保全活動をしてきた歴史があることに惹かれた。

流域の森林で最も広い面積を占めているのが人工林で、その次が里山林である。いずれも人によってつくられ、維持されてきた自然で、経済的な価値が失われて管理されなくなったことで劣化している。身近な自然に関わる人の数を増やすしくみをつくらないと、流域の自然を再生することはできないと考えるようになった。

矢作川水系森林ボランティア協議会(矢森協)の働きかけで2005年に始まり、10年間続いた市民参加型の人工林調査「森の健康診断」の構築と運営に関わった。

また、都市と山村の住民が交流し、連携を深めることで持続可能な流域づくりにつながるとの思いから、仲間たちと年に一回、豊田市駅前で「いなかとまちの文化祭」を開催している。

# あなたにとって、流域圏懇談会とは?

森の健康診断で市民と研究者の協働による森林調査を 実施してきたことが、流域圏懇談会の山部会での活動の原 点になっている。山部会の主要メンバーはほとんど森の健 康診断の実行委員や関係者である。

流域には多くの課題があるが、その解決をめざす懇談会も、楽しみがなければ続かない。山部会では現地視察に加え、現地の宿泊施設で、懇談会メンバーのみならず流域内の森づくりや木づかい、地域おこしの関係者と、宿泊つきの交流会を行うことを提案した。勉強会と交流会、現地視察を組み合わせたワーキンググループは2012年度から山部会の定番(名物)となり、他部会からのリピーター参加者も出るようになった。自分は矢作川流域の宴会部長を自認しており(笑)、懇談会は山、川、海、市民の4部会で構成されているが、「夜」部会の座長を担っていると考えている。



取材風景

山部会のメンバーはいずれも、地域の森林・山村再生に向かって心を一つにしている仲間である。この10年間で50回 以上開催されてきたワーキンググループで、メンバーの発案によりさまざまな取組の現場を訪れたり、ユニークな キーパーソンと出会えた経験は大変貴重なもので、人生の大きな励み、心の拠り所になっていると思う。

# これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

懇談会は、他の流域にはない非常に貴重な場であり、今後も充実した会にしていきたいと思っている。 その上で、立ち上げから10年たっても、山・川・海の部会間で流域の問題についての認識が十分共有されていないことを残念に思う。今後は合同部会の開催を意図的に増やすといいのではないか。例えば川の水質は、部会横断的なテーマである。海部会は、アサリ等の極度の不漁の原因が流域からの栄養供給不足と位置付けている。そうであれば山部会や川部会も一緒に、栄養収支に関わる河川の流域の変化(農地利用の変化、都市化に伴う水利用、排水処理の変化等)を考えてもいいかもしれない。

また、各部会ともメンバーの出入りが少なく、固定化していることも課題である。外部の人、とりわけ若い人が興味を持って、継続して関わっていきたいと思うような組織にしていけないかと思う。



'11.9.29 「第5回勉強会(川地域)」バスツアー 茶臼山のブナ林での現地説明



'14.9.19 第20回山部会WG(根羽) 日本全国スギダラケ倶楽部の若杉浩一さんと

「洲崎燈子は、矢作川研究所の博士。ワインをこよなく愛する踊る研究者は今や流域の村づくりと飲み会にはなくてはならない存在だ。」 (文・写真/丹羽健司 月刊杉WEB版 2014年12月号 No.107)



'17.9.9 第42回山部会WG(恵那) 現地勉強会 天竜川竹筏下り体験

# はぎぼう



# 沖 章枝 さん

(水と緑を守る会・岡崎 代表)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者: 近藤 朗 レポート作成者: 近藤 朗 取材日: 2020年1月28日 取材場所: 豊田市職員会館



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

名古屋市守山区生まれ。元愛知県職員であった(1963年入庁~1971年)。1967年、結婚を契機に岡崎市(六名) に移り住み、職場も県庁から地元の西三河事務所(当時:現在の西三河県民事務所にあたる)に異動させてもらった。今でも山や自然が豊かな岡崎が大好きなのよ。

1980年代、岡崎国立研究所研究員の妻で農薬(害)の研究をされ、「農薬を考える会」を立ち上げた伊藤玲子さんと知り合い、「音羽米を育てる研究会」発足(1992年)に関わる。富山和子氏の著書「日本の米」などは、私の教科書だった。食の安全・安心、かつ美味(おいしい)を掲げ、脱化学合成農薬・肥料を目指した「音羽米」を栽培し(旧音羽町、現在は豊川市)、消費者に届けようという取組は、最初1988年から始まったの。その源流域(旧額田町大重)でのゴルフ場開発計画が発表され、これに対する反対運動(除草剤が米栽培地に影響を及ぼすため)が私の市民活動の原点となる。この活動を通じて矢作川沿岸水質保全対策協議会の内藤連三さん(「矢水協」は、一つの自治体には、ゴルフ場は二つまでと規制していた)や、愛知教育大学の森山昭雄さんとも関わり、特に森山さんからは、「沖さんは、水がめになれ」と言われ、1993年に「水と緑を守る会・岡崎」を設立、主宰することとなった。内藤連三さんには、流域で良くないことを見つけたりすると、よくチクりに行ったのよ。



音羽米20周年記念誌(2008年6月発行) 沖章枝さん所有



「鳥川ホタルの里」のホタル(愛知県公式観光ガイドHPより) この流域に男川ダムが計画されていた

その後、額田町で計画されていた男川ダムや、海上の森(瀬戸市)での愛知万博反対運動にも関わっていった。 万博では、ボーリング櫓の中に籠ったりもした。(古巣の)愛知県へは情報開示請求なども行い、職員にずいぶん と煙たがられたのではないだろうか。仕方がない、私には守りたいものがある。

様々な活動は、私の生き方そのもの。活動を通じて、いろいろな人と繋がるのが喜びでもある。地元の人たちとかね、とにかく人と話をすることが大好きなの。

# あなたにとって、流域圏懇談会とは(見えてきた課題)

懇談会には、設立当初から関わっていた。山部会が中心である。すごいな、こんなに多様な(セクターの)人たちがいる。私には、大いに学べる場であった。残念だったのは、岡崎市役所が、当初それほど前向きではなかったこと。だから私は、懇談会の資料をいつも市役所や岡崎森林組合に届けていた。向こうには、困ったなと思われていたかもしれない。

懇談会山部会での学びを通して、新しい政策提言などが提案できるようになった気がする。だから、もっともっと 岡崎市(役所)政策にも関わろうかなと思い始め、興味のある委員会・検討会などの傍聴にも申し込みをしている。3年前から岡崎市営農支援ボランティアも始めた(農家は人手不足なの)。岡崎の市民活動レベルは随分と高くなっているが、行政としてのレベルはまだまだだと思う。結果として市民には、乙川のリバーフロント事業しか見えてこないのではないかしら。

特に、岡崎の林業(政策)はまだまだ。額田の森を活かしきれていない。せっかく額田には、唐澤さん(夫妻)のような若者が出てきてくれたのに、それを岡崎市がうまく活用できていないのが歯がゆい。人もそうだし、いいもの、いいところが山にはいっぱいある。もったいない。山には木が立派に育っている。もっと木を活かして使ってほしい。



2018年11月17日 山部会WG(岡崎)にて 奏林舎の唐澤晋平さんを訪問、薪割り体験実施



2019年6月22日 山部会WG( 岡崎) 及び事例集交流会にて 鳥川視察、鳥川ホタル保存会の方々から説明を受ける

# これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

「もう一度、昔のあの山の活気を取り戻せたら」というのが私の願い。これからの懇談会の中で、それが果たせるようにしていきたいし、私も役割を果たしたい。

これからさらに発展できるようなことを考えたいし、新たなメンバーも誘いたい。特に下流域(まち)で木を使う取組ができる方も、どんどん取り込みたい。懇談会と私は、その繋がりをつくる役割を担うべきかな。 そういったことで、矢作川流域圏懇談会を「ブランド」にしましょう!



2020年1月28日 沖さんへの取材風景(豊田市にて)



2016年1月 山部会での天下杉公演にて 優雅な舞を見せる沖さん 「蝶の如く舞い、蜂の如く刺す」(近藤評)

# 流域圏懇談会について、フリーコメント (文責 近藤朗)

私がどうしても沖さんへのヒアリングをしたいと希望したのは、同じ元愛知県職員というだけでなく、それぞれの活動や業務を通して不思議な縁があったから。沖さんが勤務されていた県の地方機関である西三河事務所は、現在は西三河県民事務所と名前を変えて、乙川河畔にそびえ立っているが、私が一時期勤めていた岡崎土木事務所(当時:現在の西三河建設事務所)もこの建物の中に入居している。私はここで、1998年頃河川の担当をしながら、当時計画されていた男川ダム(額田町内鳥川)にも関わっていたが、当時反対運動があり着手できずにいた(2006年の岡崎市・額田町合併後、結局中止)。また私は、2003-2005年にかけて、愛知万博・瀬戸会場の整備担当であったが、これは海上の森全面での博覧会会場計画への反対運動もあり、分散・縮小された後を受けてのこと。実はどちらの反対運動にも、沖さんが関わっていらっしゃったとのこと。当時は、いずれも直接沖さんとお会いする機会はなかった。



2020年3月完成の乙川「桜城橋」、表面は額田産材で木装化され、 その向こうには、愛知県西三河総合庁舎(西三河県民事務所、 西三河建設事務所が入居)が見える

この事を知ったのは、とある懇談会山部会での夜のこと。場所は確か額田のくらがり渓谷であったと思う。「あなただったの?」と笑いあったのだけれど、その場には他に、沖さんとは別のスタンスで海上の森万博反対運動をされていた曽我部行子さん(海上の森の会)もいたし、2000年東海豪雨後の新川・庄内川激特事業の際、河口にある藤前干潟を巡って対峙していた野鳥の会の高橋伸夫さんもいた(彼とも当時は会っていない)。

私の頭の中で20年ほどの経験が走馬灯のようにぐるぐる 駆け巡ったのだけれど、とても不思議な感覚。時を経て今 ここで一堂に会して、酒を飲みながら談笑していることが…。



2005年愛知万博・瀬戸会場と海上の森



2017年10月13日 山部会WG(岡崎)の夜(くらがり渓谷にて)

立場が違うとかどうとかでなく、ひとつの課題に対して「同じ方向を向いて」いられるかどうかが重要なんだと改めて強烈に認識した夜。地域、流域圏を良くしたいという思いが同じであればいい。その事を再認識した取材であったし、矢作川流域圏懇談会そのものの意義・本質はそこなのだろう。

蛇足ながら、公共建設事業を推進する立場であった私にも、沖さん同様「守りたいもの」があった、いや、今でもある。つくるもの(特に河川)が未来の世代にとって有意義なものとして継承されなければならないということ。だからこそ目先のことだけでなく、環境や営みという多様な視点を持って進めなければならない。これは、私が父親になった時、そして矢作川に出会った時(実は同時期)、この時より大きく意識が変わった点である。ただし、残念ながら閉ざされた行政のロジックのみで進めていては、大きな変革は望むべくもなく、新たな視点を導入するためには、沖さんたちのような市民運動は不可欠であっただろうし、私自身はとても感謝している。実は、沖さんと私が「守りたかったもの」は、意外と同じものではなかったのか、とさえ思う。

# 近藤 朗 さん (愛知・川の会)







個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 石原 淳 レポート作成者 : 石原 淳 取材日 : 2020年2月23日

取材場所 : 名古屋市中村区名駅にて



# 近藤朗さんの経歴と現在の活動について

≪経歴≫

1957年(S32) 愛知県名古屋市生まれ

1980年(S55) 愛知県庁入庁(1988年「名古屋オリンピック」要員と言われたが、翌年ソウルに負け幻と消える)

1989年(H元)~砂防課勤務 元年災(恵南·東加茂豪雨)対応、以降平成時代の大災害にはほとんど関わっていく

1994年(H6)~ 愛知県豊田土木事務所(現在の豊田加茂建設事務所)にて

多自然型川づくり『矢作川古鼡・百々水制工、籠川、仁王川、逢妻女川』

の推進、創設されたばかりの矢作川研究所にも関わる

1999年(H11)~ 河川課(環境) 2000年東海豪雨後の河川環境保全対策を推進

2001年7月、矢作川川会議メンバーと共に第4回全国「川の日」

ワークショップに参加し、見事グランプリも受賞 2002年、宮田昌和、硲さくら氏と共に韓国・漢江へ



籠川の魚道

2003年(H15) 河川課を離れる際に、「川」を生涯のライフワークとするため、「愛知・川の会」を設立(3月)

2003年(H15)~ 愛知県公共建築課にて「愛知万博」瀬戸会場整備担当、「海上の森」と出会う

2005年(H17) 愛知万博開催、この年に『第8回「川の日」ワークショップ on 矢作川』を誘致、開催する

2005年(H17)~ 2018年(H30)3月の県退職まで、どこにいても「川の会」を通して、河川(矢作川等)に関わる

2009年(H21) 2010年開催の生物多様性条約締約国会議COP10に向けたNGO生物多様性フォーラム(JFB)に参加(理事)、ここで、伊勢湾流域圏の市民活動調査を開始する

2012年(H24) 伊勢湾流域圏での市民の繋がりを基に、3県による「22世紀奈佐の浜プロジェクト」をスタート

同年、矢作川流域圏懇談会の3年目にして、 初めて山部会(根羽村)に参加 ~現在に至る

2013年(H25)~ 2013年より「愛知・川の会」三代目代表、

2017年から事務局長に就任 ~現在に至る

2019年(R1)~ 矢作川流域圏懇談会10年誌編集委員を担う。また伊勢湾 流域圏の学生、若手たちを中心として中部5県の流域連携 を促進するためのプロジェクトを別にスタートさせた

2019年12月 中部5県流域連携のキックオフを長良川から



# あなたにとって、流域圏懇談会とは? また、これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

まず、私の矢作川に対する思いについては、2004年4月矢作川研究所広報誌「Rio」への寄稿文(次頁)を読んで下さい。

私が初めて懇談会に参加したのは、2012年、根羽村で開催された泊りでの山部会から。洲崎燈子さんからの誘いであったが、私自身は2010年以降、矢作川に直接関する業務から遠ざかっていた時期でもあり、とても嬉しかった。

その時驚いたのは、集まっていた根羽村森林組合の方々がとても若かったこと。聞けばIターンの方も多く、北海道や関東圏などからも。実は、2010年頃実施していた伊勢湾流域圏の活動調査で、岐阜県の郡上市などでも同様の現象(若者たちの山村へのIターン、Jターン、Uターンによる回帰)が見られていて、岐阜県特有の事かなと思っていたが、矢作川流域でも起こっていた。確実に時代が変わってきたな、と思い知らされた。

矢作川流域圏懇談会については、10年続けてきたことに対して、河川管理者や市民達に大いに敬意を表する。 ただ、これからの10年を見据えたときに、単に同じことを続けるのではなく、新たな展開を模索すべきだろう。それは、懇談 会外部への発信であったり、次世代への継承を積極的に推進していくことだと思っている。私たち世代は、これを全面的に 支援したいと考えているが、次の主役は私たちではなく次世代でなくてはならないと思う。

# 豊田市矢作川研究所 「Rio」 2004年 4月号から 矢作川との10年、これからの30年 近藤朗 寄稿

私が愛知県の河川管理者として豊田土木事務所(現在の豊田加茂建設事務所)に赴任したのは1994年のことだから、今から10年ほど前のこととなる。当時すでに豊田市扶桑町沿岸の矢作川水制工と古鼡水辺公園は完成しており、この工事に対して市民から贈られた感謝状が事務所に飾られていた。着任早々関わらせていただいた「豊田市矢作川環境整

関わらせていただいた「豊田市矢作川環境整備計画」検討委員会では矢作川環境をより 良くするための熱い議論が展開されており、 この提言によって「豊田市矢作川研究所」 が創設されるなど、豊田市は、この頃大き く変わろうとしていた河川行政の流れが、 最も色濃く反映されていた現場であった。

従来の行政手法から見て、近自然工法や地域との連携などの新しい河川管理の考え方にはカルチャーショックを覚えつつも、現場では不思議と抵抗なく受け入れてしまった気がする。当時そのような仕事のひとつに、豊田市西部を流れる逢妻女川の多自然型川づくり計画を、堤小学校の児童たちと検討するというものがあり、ここでは子どもたちと真剣に議論をした。さらに矢作川のこととなれば黙っていられない大人たちも大勢いて、矢作川流域で川の仕事をするためには、河川環境を含めた広範な知識とさらに柔軟性が要求され、私自身相当な勉強をしなければならなかったとい

うのが実感である。結果としてこの時の貴重な経 験は、私にとって河川管理者としての原体験 というべきものとなった。

豊田を離れた後も、様々な立場で河川行政 に携わり、その中で川と人との関わり、とり わけ子どもたちに目を向けた取組みに力を注 ぐようになったが、これは矢作川での経験が ベースにある。問題解決のためには「川を子 どもたちへ引継ぐ」(世代間調停)という視 点が重要であると確信したからであるが、ち ょうど10年前に誕生したわが子を調停相手と 認識し、彼に豊かな自然の恵みを享受できる 世界を残したいという親の願いでもあった。

矢作川では現在、河川整備計画の策定が進 められていると聞くが、その成果に期待をし ながらも、重要なのは策定後に続けられるべ き流域全体での取組みにあると考えている。

整備計画実現に向けた当面の目標年次は30年 間であり、概ね一万日である。これは、豊田市西広 瀬小学校児童が世代を継承しながら、今まで一日も 休まず続けてきた水質監視の歴史に匹敵するが、今 後も河川管理者は流域住民や多くの関係者などとと もに議論と研究を重ね、彼等と同様、不断の努力を していくことになるのだろうと思う。

(こんどう あきら、愛知県建設部 公共建築課造成グループ 主任主査)

矢並の実行でもるが、具体に乗いた東は、何だか



近

朗

16年前の寄稿であるが、最後に書いた事は、何だか 「矢作川流域圏懇談会」を予見していたかのようだね 流域全体での取組を、議論を重ね、いつまでも いつまでも・・・







# 鷲見哲也 さん

(大同大学工学部 教授)

山部会(川部会)海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 (学識経験者) 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 中田 慎 レポート作成者 : 中田 慎 取材日 : 2020年2月24日

取材場所 : 大同大学白水キャンパス 鷲見研究室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

2006年まで 名古屋大学工学部

2006年より 大同大学工学部

もともと、私は水文屋で、川ではなく、山に雨が降ってどう出てくるかというのを専門にしていました。そのあと、辻本 先生から「木津川で河川生態学研究会があって、河原の中の伏流水を調べられる」と声をかけられ、ここで川とのつ ながりができました。そこでだいぶ河川生態の勉強をしたんですよ。山地の物理屋がとにかく川に引きずり込まれて、 川の物理と、土砂処理について、だいぶ勉強させられましたね。逆に言うと、それに育てられました。水文分野という のをやっている人がたくさんはいないので、川のことを勉強したおかげでどっちの話もできるようになったんです。

たとえば災害をやっていると、人間の話とか社会の話とか計画論の話になってくるとか、全部入ってくるじゃないですか。そこまで研究をやっていると、川全体のマネジメントとか計画論とか維持管理の実態とか勉強して、あらかた分かるようになります。

最近は、分野を跨いだところを研究・調査することが多くなりました。たとえば、生き物を対象にしている人から、水回りの話を調べて欲しいというオファーがあれば、私は水の物理屋なので、水のソースも含めて、上流は?地下水との関係は?といった一連の水のつながりを全体を含めて対応することができます。私自身、そういうことに対しては嬉々として対応しています。水文が水文の中だけで仕事をしていても、特化した一般人に理解されないような仕事になってしまう。他の専門と跨いだところで仕事をしていると、そちら側にも理解してもらえるし、こちらも、知らない専門分野の勉強もできる。こういうことが大事なんだなと思いながら、今、力を入れているところですね。「解釈」というのがとても重要になります。

# あなたにとって、流域圏懇談会とは?

「私にとって」というと、私は他の皆さんと違って特殊なケースだと思っているんです。流域の中に住んでもいないし、流域には関わりが少ない大学に所属していますし。流域外にいる河川工学の学識経験者という立場なので「いくつかの話でこうなっているからこうですね」という交通整理はできるけれど、あなたはここにどういう思い入れを持って取り組んでいますか?となると、そもそもそこには理由がないんです。

私が流域圏懇談会に関わるようになった唯一のきっかけは、発足黎明期の頃、リバーカウンセラーという肩書をもっているということだけでした。肩書がついた直後に、ど真ん中の川部会に入ることになり、当時は何の主体もわからないまま入って、そのあとは当時の事業対策官に引っ張られた形になります。

例えば、川部会で発表したこともある白浜工区の調査については、今年はやりましたが、その前の3年間はやっていないです。そもそも、私自身がそこに目をつけていたわけではなかったのです。河原で活動されていた硲さんや森林塾の方から、「あれやったらどうか、これやったらどうか」というアクションを求める話がされていたのですが、「そもそもそこはどういう場所なのかがわかっていないとできないのではないか?」ということを提言しました。そのための基盤情報整理のために調査を行ったわけなんです。

水は出るのか出ないのか?出るような環境にあるのか?という話で、河床を削ったほうがいいかもしれないけど、 やっぱり土砂がたまりやすいのではないか?地形変化の特徴については、客観的にモニタリングする必要があり、そ こはある意味で技術提供という形で、わからないことをわかるようにする対応をしました。ですから、私にとっての流域 圏懇談会は、私に研究の材料を提供してくれたということになりますね。

そして、私にとっては非常にいい場所といえます。いろいろな材料、たとえば、落差があるときに落差がどのように解消されたらいいのだろうか?でも、そもそもどうしてこんな落差ができてきたのかといったような話について、解消するためにどんな問題があるのか、というあたりを解説するという仕事が必要になります。それは専門の分野、学識者としての位置づけだろうと思うんですけれど、私自身がそこで研究するというよりは、そういう現象が起きているところでどれくらいのことが解説できるのか、全体を見回してそれはどういうことなのかということについて貢献できるな、と思えると参加している意味があるんだと思っています。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

### 【川部会としてのアウトプット】

かつての懇談会は、現場で川の像の話ですら整理できておらず、リクエストはあるけれど、自分のところで交通整理できていないという状態でした。かたや、矢作川の土砂問題は、「上流側からダムに支障がないようにコントロールするにはどうしたらいいか」という話で縛られています。そこは危険だな、と感じています。

川部会では、ステークホルダーとして、利水、発電、治水も含めてそれぞれに、それぞれのことを要求しようとするし、それぞれ活動している方もそれぞれの主張をします。主張しすぎるとみんなが望む像というようなことをまとめること自体が難しくなるので、まずはみんなが耳を立てるというところしかやり様がなかったという経緯があります。今は、みんなの話が一通り出てきたところなので、リーチスケール、瀬淵が一組二組あるようなところくらいの区間で、どんなものをみんなが要求しているのかをまとめるといいと思っています。氾濫原、河原、堤防の外まで含めたらどんな像がそこに組み込まれるかについて。矢作川は、全部が全部アユの川じゃないし、全部が全部生き物の川じゃない。だから、どういうリクエストが、どういうふうに瀬淵構造があるようなところで、それぞれに応えられるんだろうか?ということを交通整理してもいいかなと思っています。でも、これは市民部会の光岡さんが数年前からおっしゃられていたことなんですよ。

川の理想像を描くとき、今の川部会がある意味救われているのは、多くのリクエストが生き物に行くかもしれないけれど、「人が」というところもあるし、「アユが」というところも対応できるメンバーがそろっていることです。どれくらい、どの程度川の中に入れ込めるんだろうかというようなことは、やりたいですね。それが描かれると、それには土砂が必要です、流量が必要ですということを専門的に整理して、それを上流に求めることができる。つまり、ダムとか土砂水理、土砂とか水にリクエストするための整理ができてくるわけです。これは懇談会でやれる話なんです。

# 【防災意識について】

防災は、「あるところに住んでいる住民がどうすべきか」という話なんですが、懇談会に関わっているNPOの方々は、川の中のことに関与している人が多いので、川の中で話が収まってしまいます。そのため、川部会でも流域を対象にして課題解決に向けた話し合いをしましょうとなると、周りの土地もエリアにして、つまり周辺地域の自治会とかも対象にする必要があります。しかし、発足当初はそのエリアの方々が対象になっていなかったので、今、防災に関する話し合いをしない原因はここにあると思います。そこに関心をもっている市民の方々や団体がメンバーシップにあまりいないというところが、防災に関する意見を押し上げてきませんでしたが、近年は災害が多いので、懇談会の中で話しやすい状況にはあると思います。

近くで氾濫がおきたときに、ある学校では下校をどのようにしますか?といったような話を聞きに行くとか、あるいは、愛知県の「みずから守るプログラム」を実践しているモデルのところに聞きに行こうとか、そういうものの情報共有はやってもいいと思います。これは、川を中心としたメンバーと陸側の人間に対してできると思います。例えばそれぞれの学校や団体、市町村が、今、川の防災に対してどのように向き合っているか、などです。メンバーではないけれど、ヒアリングに行くということで意見を聞いてみたり、他方の国交省と愛知県については、どういうオペレーションで、実際はどうなるんだ?という話をしてもらったりするなどが期待できると思います。

# 流域圏懇談会について、フリーコメント

懇談会のアウトプットとは、みんなの土台になるような成果になるといい、ということが今後の核になると思います。 懇談会の発足当初は、「アクティビティにこだわる」ということがあって、いろいろとできなかったというのがあると思います。アクティビティは最後は、それぞれのステークホルダーが落ち着かせることで、むしろ、懇談会では「共有できる」 というアクティビティで成果を上げる方がいいんじゃないか、ということです。

今後も、懇談会は共有できる場としての意義を持たせる、ということが第一義だろうという気がしています。アウトプットとしては、2つありうると思います。一つは「懇談会でこれをやりました」ということ。共有していることが形になっている。そしてそれをみんなが見られて、役立つというものです。もう一つは、流域圏懇談会は河川整備計画に関連してあるものですので、そこで与えられている使命の中で進めるという話です。ただし、後者の場合だと川の管理という話になって、国交省としてやれるべきことをたくさんやりましたということになります。また、山部会・海部会をつくっている懇談会としては、少し意味合いが異なってしまうと思います。

懇談会の意義に照らすと、国交省に対して全て求めているような話ではない、つまり、河川管理者に全てアウトプットを求めるような懇談会ではないということです。課題を持ち寄った時点で、誰のものでもない課題だったらいいんですけれど、たいていは誰かが関わっている課題だから、関わっている誰かといろいろとやり取りして、その誰かがより良い活動に活かせれば、それがアクティビティの成果だっていう話になるんだと思います。

# 野田賢司さん

(矢作川環境技術研究会 事務局)

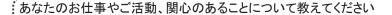
山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体(関係団体)学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者: 今村 豊レポート作成者: 今村 豊

取材日 : 2020年2月25日(火) ※第9回全体会議前10:00~

取材場所 : 西三河総合庁舎1階 待合室



野田さんは常に熱心な環境調査員で、関心事はまさに仕事と、それに直結した市民活動そのものです。その内容は ①環境モニタリングシステム ②水環境を中心とする環境保全活動全般 ③汚濁防止対策をはじめ環境技術全般 ④山・里・川・海の健全な水環境の確立 ⑤生物多様性の保全 ⑥現在参画・活動進行形の市民活動 ⑦自然地理 から歴史・文化・民俗に係る地域調査研究 ⑧持続可能な土地利用計画・管理・地域づくりです。

その関心の広さと活動内容は圧巻の一言で、これだけ地域に関連した分野に広く関わり、かつその知識・知見を活かした市民活動を実践されている方は、とても希少でしょう。野田さんにとっては、その地域が丸ごと人生の対象になっていて、いわゆる本業の調査活動が、ライフワークとしての市民活動に見事に昇華されている、と言っても過言ではないでしょう。





800

1+±1±2

### あなたにとって、流域圏懇談会とは?

① 懇談会の構成一員として、矢作川環境技術研究会活動に関わる矢作川流域圏内及び関係者の情報収集、並びに関係する様々な主体への情報発信 ②新知見の収集 ③矢環研活動への利用・調整 ④矢環研事務局の立場からの意見交換・提案・聞き取り ということです。

つまり、野田さんにとっては前項の関心事からも推察されるように、当懇談会に参加して多くの方々との出会いから様々な情報を入手して、自ら取り組まれている市民活動に反映させていく、という姿勢が明確です。矢作川流域圏懇談会の最も理想的で有意義な活用方法と言えるでしょう。また、野田さんは山部会をはじめとして、各部会、全体会議等で非常に緻密に計画された調査等について、自ら行動・実践されたことを踏まえたご自分の知見を発言されるため、非常に説得力があります。多くの皆様がそうした実感を持たれていると思います。ただ、単に知識とした得られた事項を語るのではなく、野田さんの場合は、常にそこに行動・実践が伴っており、そこから得られた知見を語る、というスタイルが確立されています。これは、調査員としての必然性なのかもしれませんが、「行動・実践して語る野田さん」という超強力な当懇談会メンバーの一人と確実に言えるでしょう。従って、地域の課題の解決に向けて市民参加で取り組んでいる当懇談会にあって、調査された実態を踏まえて課題解決に向けた方向性を示すことができるとても重要な人材で、今後もあらゆる場面で野田さんの説得力のある知見が必要とされています。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

①各主体が持つ情報、問題、課題の開示 ②懇談会の意見交換の計画や管理面への反映 ③矢作川環境技術研究会の活動発展に寄与する ということです。

つまり、野田さんは端的に言うと、当懇談会への参加を通して流域の課題を明確にし、それぞれの課題に対して幅広い意見交換を当懇談会で行って、その意見交換の成果を、ご自分が主体となって活動されている矢作川環境技術研究会において展開していく、と総括できると思います。やはり、ここで明確なのは、ご自分が事務局を担当されている矢作川環境技術研究会において、当懇談会で得られた知見や情報をもとに、地域の課題解決に向けて行動・実践するその姿勢です。単に、当懇談会の話し合いに参加されているのではなく、当懇談会で得られた知見は行動・実践して地域に還元する、そこまで当懇談会に期待し、活用されている野田さんは、当懇談会メンバーの鑑と言っても過言ではないでしょう。

また、野田さんには山部会で配布した「流域ものさし」を実際の観察に使用していただきました。正に、当懇談会を有意義に実践的に活用されている第一人者と断言できます。

### 流域圏懇談会についてのフリーコメント

①課題、サブ課題、意見交換のプロセスを明確にする ②話題提供、情報提出意見交換に、客観的材料をできる限り持ち寄ってほしい ③現場や参考事例、実施結果を見に行く、よく検討することをいとわない ④分科会が多すぎるのではないか ⑤地域や各主体の立場などがあり、一体化は難しいが、意見のすり合わせは意見交換を進めることで、進展させられるのではないか ⑥具体的な課題検討にステップアップできないか ということです。つまり、野田さんは、やはり行動・実践して具体的に地域の答えを出していくことを重視されています。検討材料や判断材料という素材がなければ、検討はできません。なので、当懇談会に参加している以上、各人がそれぞれの問題意識に基づいた素材を持ち寄ることが大切だと感じておられます。さすが、調査員を仕事にされている方なので、対象から何かを引き出す嗅覚に優れていると思います。現在目の前で展開されている事象を切り取って、当懇談会上で意見交換し、その方向性を見極めた上で、野田さんなりに行動・実践していく。極めてシンプルなプロセスですが、単に話し合いのみで終えずに、課題解決に向けた何らかの形にしていく。それを実践し、またそれができるということが野田さんの真骨頂と言えるでしょう。懇談会のメンバー一人ひとりが見習うべきとても素晴らしい姿勢だと思います。

### 取材を終えて

今回は特に川部会を中心にいわゆる緻密な調査の「野田流」で、その調査と行動力に基づいた見事な知見で、圧倒的な存在感を放っている野田さんを取材させていただきました。やはりと言うか、さすがと言うか今回の取材にあたり、野田さんらしい大変多くの貴重な活動記録と実績資料を持参され、その「圧倒的な野田さんの歩み」を拝見させていただきました。取材記事に記載したとおりですが、そこには調査して、行動・実践して発言する野田さんの姿がありました。皆さんも感じるとおり、非常に温厚な印象を与える野田さんですが、その知識吸収欲やその知識・知見に基づいた持論の鋭さと行動力には、誰もが一目を置いています。その活動の源泉は、恐らく深い地域愛だと推察されますが、その言動にとても真摯なものを感じるのは、私だけではないでしょう。このような資質を備えた野田さんの知見が、この矢作川流域の課題解決に向けてこれからも大いに発揮されることを同志として、とても期待しています。







矢作川環境技術研究会のホームページより



'17.8.21 第35回海部会WG(トンボロ干潟) 野田さんが採集した生き物と矢作川流域ものさし





# 青木伸一さん

(大阪大学大学院工学研究科 教授)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 髙橋伸夫 レポート作成者 : 髙橋伸夫 取材日 : 2020年2月25日(火)

取材場所 : 西三河県民事務所10階会議室 控室



### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1993年10月から2012年3月まで豊橋技術科学大学工学部に勤務し、2012年4月からは大阪大学大学院工学研究科 に勤務。

専門は土木工学の一分野である海岸工学で、沿岸域の開発、防災、国土保全、環境保全など、人と海岸との関係に関心がある。港や海岸堤防など海辺にある土木建造物、砂浜、水環境などを研究対象としている。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは?

海部会の全体的な経緯等は「各部会10年の振り返り」の中に記した。

流域圏懇談会には、当時の豊橋河川事務所長からのお声掛けで参加したが、自分のフィールドは矢作川から離れた三河湾や遠州灘等が主体であった。海も山も含む川の流域圏の懇談会ということで、その漠然とした目的は理解できるものの、海部会として正直何をテーマに議論すればよいのかも解らず、全くの手探り状態で取り組むことになった。当初は豊橋河川事務所の担当者であった溝口さんの熱意に引っ張られて動いていた時期もあったが、それぞれに価値観の異なる組織や集団、個人の集合体ということで、自分の研究テーマに関係のある情報に限らず、多様な立場の方々から多様な視点での意見を数多く聞くことができたことは貴重な経験となっている。多様な価値観が混在していること、解決が困難な問題が多いことなどで、最初からこれらを無理に纏めようと思わない方向で対処してきたが、海部会の座長としてどれだけの仕事ができたのだろうか?とか、もっと積極的な対応ができたのではないか?などといった反省もある。この10年の活動が、知らず知らずの間に、それまでの自分の考え方に影響を及ぼしていると感じている。

このように山から海までの、全ての立場の人々が集まっている集合体で、それぞれの意見を聞くことができる場は、国内を含め他には全く例が無いと思う。こうした場でいろんな意見を聞き、自分の意見も発信できることが、 矢作川流域圏懇談会の存在意義そのものであると言える。いろんな立場の方々の話を聞くと、こんな見方もあるのかと気付かされることも少なくない。自分のやってきたこと、やっていることについても、いろんな立場の方の意見を聞くことで、多様な視点から見た評価を確認することもできる。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

山・川・海の連携についてはこれまでに何度か提案されてきたが、ほとんど実現していない。今後はその具体化や連携の強化を優先課題として、各部会の問題点を流域圏全体が共有して議論することが大切である。部会を超えて議論することで、解決に向かう問題点は少なくないと思われる。

流域圏懇談会の成果が出るのはこれからなので、今後も継続することは当然であるが、同時に関係者の年齢も高くなっていくので、今後は参加メンバーの若返り(世代交代)も重要な課題である。幸い最近は大学生を中心に会議に参加する若者が見られることから、こうした人材の育成に注力するべきである。

### 流域圏懇談会について、フリーコメント

一般論として、川が予算等で行政の手厚い補助を受ける構造になっているが、河川部門だけで流域圏を十分カバーすることの難しさを実感せざるを得ない。流域圏懇談会では、流域圏として取り組むことの意識を流域全体で共有して、将来何らかの問題が生じた場合にこのことを役立たせることが、これまで継続してきた矢作川流域圏懇談会の意義そのものである。今後もいろんな問題を解決する場合に、ボトムアップで物事を動かす原動力になるものと思う。その意味でも矢作川流域圏懇談会は今後も継続されるべきであると思うし、継続しなければならないと思う。

矢作川は国内の基幹産業を支える役割や、矢水協の実績などをみても、国内の河川管理について先駆者ともいえる役割を残してきた河川である。その意味でも、この川の価値や流域圏としての取り組みの意義を全国に発信していくことは重要と考える。

海部会では、この10年の間に大きな問題が発生している。それは、流域圏懇談会ができる少し前から漁業の構成に大きな変化があり、稚貝放流によるアサリの漁獲量が増大していた。当時の漁師は「後継者の心配など全くない」と豪語していたが、海苔養殖経営体の数が激減していたことから、当時でも「もしアサリが採れなくなったら大変なことになるぞ・・・」とは感じており、現在それが現実となっている。

かつての三河湾は富栄養状態で、アオサがたくさん発生しており、蒲郡市では「ラグーナが建設されたことで夏に流れ着くアオサの腐った臭いを嗅ぐことがなくなって良かった」などという話もあった。当時、夏の三河湾の色はコーヒー色であったが、最近は夏でも赤潮を見る機会が少ない。特にこの10年で海の水は急激に透明度が高くなり、その意味では明らかにきれいになった。三河湾では河川の流域に人口密度の高い都市が少ないこともあり、現在の流域下水道の処理能力は、海に流入する物質の量をコントロールできる範囲にあるといえる。

この10年間で、自分としても海を見る見方が変わった。以前は汚い海をどうやってきれいにするかということを第一に考えていたが、現在では透き通ったきれいな海ではなく、内湾では多少汚く見える海が豊かな海であるということ。要は工業廃水から排出される重金属や化学物質、人間生活から排出される合成洗剤などが問題であって、本来生物から排出される有機物は、下流に生息する野生生物にとって重要な栄養源であることを認識させられた。海ゴミについても、人間活動で排出されるプラスチックなどのゴミと、海藻など生物由来のゴミとを明確に分けて認識することが大切で、生物由来のものは、生態系にとって必要なものであることを広く社会に認識させることが重要である。



'17.8.21 第35回海部会WG(トンボロ干潟)





# 鈴木輝明 さん

(名城大学大学院総合学術研究科 特任教授)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 近藤朗、高橋伸夫、洲崎燈子

レポート作成者 : 洲崎燈子 取材日 : 2020年3月7日

取材場所 : 名城大学大学院総合学術研究科鈴木研究室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

専門は水産海洋学(内湾域の貧酸素化に関連する親生物元素の物質循環、赤潮発生に関わる動物プランクトンの摂食圧、干潟・浅場やアマモ場の物質循環)。農学博士。2010年まで愛知県水産試験場長。名古屋市生まれ。著書に『水産の21世紀海から拓く食料自給』(分担執筆京都大学学術出版会)、『環境配慮・地域特性を生かした干潟造成法』(分担執筆恒星社厚生閣)など。

自分の家は渥美半島の赤羽根で代々漁業をやっていた。小さい頃から海でウミガメの卵掘りや魚釣り、アサリ捕りをやっていた。四つ手網を持ってカレイの子も捕った。自分の子も近大の水産に行ったし、弟の嫁の実家も魚屋をやっている。だから漁業者を悪く言う人は好かない。

1973年に京都大学から東北大学の大学院に進学し、その後愛知県水産試験場に就職した。水試にいた頃から愛知や三重の漁業者と付き合いがあり、悩みや相談を持ちかけられていた。三河湾は依然として開発が進み、いろいろな意味で環境劣化が進んで漁業にとって厳しい状況にある。

名城大学大学院に総合学術研究科ができたとき、文理融合の理念で社会との連携を進めることになり、大学から県を通じて私に教員の依頼があった。兼務で土曜に講義を行うようになった。今は主に社会人の博士後期課程の院生の指導を行っている。

### 【海の栄養塩不足問題】

どうしたらもう少し魚が獲れるようになるかということに関心を持っている。最近特に問題なのが、<u>いて当たり前の</u>生物がいないこと。かつては春にアサリやコウナゴが獲れて活気づいたが、今はそれがない。

海の水は水質としてはきれいになったが、そのことだけが注目されている。「きれいな海=豊かな海ではない」ということは自分が言い始めた。

海は本当に激変する。かつては三河湾に大量のカモが飛来していた。海が鳥で埋まっているのが日常だった。埋め立てで干潟がなくなったことで貧酸素状態になり、魚や貝が死んだ。このことから干潟の埋め立てを抑制する意見が強くなった。浅場をつくれば一時的に魚や貝が獲れるようになったが、また獲れなくなり、アサリの漁獲量は2万トンから2千トンに激減した。コウナゴも5~6年貧漁が続いている。毎年せっかく稚貝を撒いているのに、栄養不足でだめになってしまった。

矢作川だけでなく伊勢・三河湾のスケールから言うと、<u>海に陸域から流れ込む栄養塩が減っている。主な原因は下水道の整備と農業の衰退による肥料の減少。</u>そういうことで魚が獲れない、貝が獲れないということになる。

流域圏の問題は複雑で、しわ寄せは海に来る。生き物は食生活が一番大事。食べているものの質と量が変わると生態系はとたんに変わる。昔の農業は排泄物を回すなかで成り立ってきた。そういう物質の流れの中で、海の物質生産は豊かだった。昔の栄養塩のインプットは、ストックではなくフローだった。量が少なくても、循環していれば意味がある。干潟はもともとそれがセットで残っている唯一の場だった。

海はすぐに変わるので、適正な処置をすればすぐに戻る。戻らないのは山である。

### 【下水道管理運転への提言】

海に入る栄養塩を増やすために、農業肥料を増やすということはできないが、下水道を管理することは可能である。当面は法令に準拠しながら、栄養塩の総量削減や類型指定を見直すべきではないか。これが現実路線。しかしそう言うと、「赤潮が出たらどうするか、貧酸素化が進んだらどうするのか」と言われる。植物プランクトンを間引く生物やその生息場所が健全であれば、いくら栄養があったって赤潮にはならない。赤潮になるか、腐って貧酸素化するかどうかは栄養のレベル以上に、海自体の食物連鎖が正常かどうかが大きいということを知らない。それは現場を知らないということ。こういうことを水産系の学者がいっているのが問題。

<u>今、全国的に海の栄養が不足し、偏っている。</u>それから推測だが、硫化水素が出るような厳しい貧酸素が常態化し改善されないのは、鉄、ミネラルの減少のせいである可能性がある。鉄があれば硫酸還元まで行かない。そうすれば多少貧酸素化していても生き物は生きられる。今までは鉄が豊富にあり硫化鉄になって、硫化物が出なかったからギリギリの手前で止まっていた。それで貧酸素に強い生き物がいられたが、今はそれもいない。下水道というのは最終的に鉄も含め有益な元素も、懸濁物として全て落としてしまう。これまで川から流れ込んでいた微量の金属イオンまで落としてしまってるんじゃないかと最近言われている。ただまだデータがない。

2017年から下水道の季節別管理運転ができるようになったのは、前漁連会長が「最近魚がやせていることやコウナゴが獲れないこと、海苔の色が出ないのは海水の栄養不足ではないか」と言い、知事や地元出身の国会議員(環境省の副大臣)に働きかけたのがきっかけ。

管理運転では下水処理水の栄養塩濃度を増やす時期を10月にしているが、9月、できれば8月にしてほしい。そうすることで秋の植物プランクトンを増加させ、冬場の植物プランクトンが減る時期をカバーできる。3月の植物プランクトンのブルーミング(増殖)の時期まで持ちこたえられるようにできるといい。今年は6年ぶりに潮干狩りができるのではないかと言われていたが、だめだった。ちょっと栄養環境が変わると、海の生物は生きるか死ぬかの状態に追い込まれるということを、陸の生態学者はわからない。

### 【海の研究者の課題】

今、海の研究者が育っていない。現場に足を運ばない頭でっかちの者が多い。行政マンにも、漁業に関わろうという気概が薄れている気がする。いわゆる現場系の学者先生はいるが、これも頭でっかち。ステイクホルダーと話し、一定の妥協をしながら話を進めていかないといけないのに、現実的な話ができない人が多い。

海以前に、川自体の豊かさが損なわれている。このことに対する研究なり活動を、5年や10年といったなるべく 短い時間でやっていかないと漁業者がいなくなる。そういう危機意識の人が少なく、皆気長に悠長に構えている。 現場をよく知っている漁師に耳を傾ける研究者が少ない。漁師は研究者が好きじゃない。漁師の肌に合う研究 者も少なくなってきた。今の若い研究者には漁師と飲む人がいない。

あなたにとって、流域圏懇談会とは?これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

流域圏懇談会の「山、川、海が流域で流域圏でつながる」というそもそもの考え方には大賛成。まさに今、それが問われている。



1973年取得の潜水士免許

ただ、豊橋河川事務所はこの懇談会をどのように考えているのか。例えばダムや砂の問題。干潟や浅場をつくるのには砂が必要で、砂は山、ダムには腐るほどある。この問題が大事だと言ったら、その問題は別の場所でやっていると言われた。しかし、これは本質的な問題。当初、事務所はこの問題の対応に苦慮していた。少し前の<u>問題は矢水協さんの努力の主対象だった濁りから川、海を守るということだったが、今は栄養や砂といった難しい問題になっている。</u>

当初は事務所はそこから逃げているという印象を受けたので、これはガス抜きの会かなと思った。とは言っても、 海部会に出てくれば面白い人はたくさんいるから、まあ出てもいいかなと思った。開発サイドの人たちが催す会議 というのは大なり小なりその傾向があり、それはある意味仕方ない。だからと言って<u>本質を外すのはだめ。</u>

海部会は碧南の下水道関係の人が出ていて、彼らが「海は栄養不足だからうまく管理しなくてはいけないのでは」等、いいことを言ってくれている。<u>現場の事をよく知っている人が来る会になってほしい。</u>

漁師は気が荒く、言葉や人当たりが苦手な人も多いが、毎日現場で操業していて感覚は確か。本当は組合長や漁連の関係者にもっと来てほしいが、彼らは「今ここで何か言ってもどうにもならない」という感覚を持っている。よほど強い信頼関係がないと出てこない。長良川の河口堰を論じる場にも漁業者だけは出てこない。行政や学者、水試にも不信感を持ってしまっているところがあるのではないか。なぜかと言うと、これまで海がいろいろ変わってくる中で、漁業者だけが最後まで反対してきた経緯があるが、時としてマスコミ等に補償金目当ての汚名を着せられ、結局は泣き寝入りを余儀なくされてきたから。たいていの場合御用学者や行政は開発の影響は軽微であると言う。そういう図式の中にずっといるから、ほとんどの研究者、行政をあまり信用していない。長く付き合って、心底わかっている人しか信用しない。その辺が山や川、都市の人とは違う。

海の人間だけでわあわあ言っていても仕方ない。下水道や川の関係者と忌憚のない付き合いをしていかないといけないと思う。

懇談会では下水道の管理運転について、川部会の人に関心を持ってほしい。アユの不漁にも栄養不足が関係しているのではないか。<u>栄養塩は山と川の問題でもある。</u>



'18.8.24 第1回合同部会(岡崎) アサリの漁獲量減少と海の栄養塩に関する 研究事例の報告





# 高橋伸夫さん

(西三河野鳥の会)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者: 井上祥一郎 レポート作成者: 井上祥一郎 取材日: 2020年2月25日(火)

取材場所 : 西三河県民事務所10階会議室 控室



### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

ステンレスの製鉄会社に勤めていたが、60歳で定年退職して今年で10年目になる。

愛知県の「鳥獣保護管理員」であり、「絶滅危惧種等検討委員会」では鳥類を担当しており、環境省の「希少野生動植物種保存推進員」、「モニタリングサイト1000・シギチドリ調査委員」なども担当している。

物心ついた頃から生き物に興味があり、小学校低学年の頃から、身の回りには常に鳥がいた。

23歳で西三河に移り住み、知らないうちに「西三河野鳥の会」の会長や「愛知県野鳥保護連絡協議会」の議長を引き受けることになって、自然保護・環境保護に足を踏み込むことになった。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは

2010年の設立時より参加しているが、どうして自分が国交省に誘われたのか分からず、当初はうさん臭い会ではないかと疑って対応していた覚えがあるが、2011年9月23~24日のバスツアーに参加したことでその認識が一変した。山川海をはじめ、さらに細分化された各分野で、現役で活躍している本物の人たちの集合体であり、それぞれに大きな問題を抱えて活動されていることが実感できたので、自分も何らかの形で役に立てる部分があるのではないか?と気付かされたからである。自分は未だ何の役にも立てていないが、山川海の3部会の会議や行事には最も多く参加している者だと思っており、各部会の実情について最も知っている市民であると思っている。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

それぞれの問題について、わずかずつではあるが改善の方向に向かっている、あるいは改善の努力が積み重ねられていると思う。これまでも3部会の意思疎通の努力はされているが、認識の違いなどによる横の繋がりの弱さは否定できない。今後は3部会の協力関係を強化することで、各問題点の改善を進めることが可能になると信じている。

### 流域圏懇談会について、フリーコメント

3部会の全てに出席している者として流域圏懇談会を見ると、それぞれの部会の中でそれぞれの問題に真剣に取り組んで活動している組織や団体、個人が実に数多く存在しており、目に見える実績が得られはじめている例もあればなかなか成果が得られていない例もある。その中には3部会が協力することで成果が得られそうな例も少なからずあるものと思われ、今後の展開に期待している。







いずれも佐久島にて2019年8月と12月。





# 光岡金光 さん

(豊田市自然愛護協会)

山部会川部会海部会市民部会

個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 吉橋久美子 レポート作成者 : 吉橋久美子

取材日 : 2020年2月8日

取材場所 : 豊田市自然観察の森(豊田市)



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

逢妻女川のそばに住み、子どもの頃から川は身近だった。川で魚を捕まえて食べたり飼ったりしていた。今でも淡水魚の調査は「狩猟本能」が働いて(笑)、たくさん掴みたい、大きいのを掴みたい、と思いながら、楽しく参加している。豊田の魚類を長年研究しておられる梅村錞二さんは小学校中学校時代の恩師である。

大学卒業後は教育畑を歩み、中学校の技術・家庭科の教員などをしていた。梅村先生にお誘いを受けて豊田市 淡水魚類研究会に入会。研究会は1992年に豊田市自然愛護協会(1974年設立)に加盟した。自分自身は2002年 に愛護協会の理事になり、2010年から2017年まで会長を務めていた。自然愛護協会では、8つある部会のそれぞれ の活動の他に、貴重な湿地の保全・保護活動や巡視活動、動植物保護に向けた提言などを行っている。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは?

豊田市自然愛護協会は、主に市内を対象に、それぞれの分野で活動している。山の経営や水源としての重要性、 海のことまではなかなか視野に入ってこない。それに対して、流域圏懇談会は対象とするゾーンが非常に広く、山川 海、全てを含んでいる。山から海までのつながりについて、知らなかったことを改めて知ることができた。土砂にかか わる課題など、議論されている内容そのものが興味深い。

流域圏懇談会でなければ会えなかった方々と知り合えたのも良かった。普段話す機会がないような、その道のすごい専門家の方達や、国交省の方たちと気軽にお話させていただいているいろ教えていただいている。流域圏懇談会のおかげで、山川海という流域への視野も、人の交流の幅も広がった。参加させていただいてよかった。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

河川工事や置土実験などは、それがなぜやられているか、あまり知られていない。川辺の公園などは、自然に配慮して、景観との調和を考えながら、地元の人達とも整備をやっているのもたくさんある。もっとPRすればよいと思う。 見る人に知識があると見る目が変わってくるし、その活動がいっそう意義深い位置づけになっていく。多くの人にそうしたことを知らせることを流域圏懇談会での大切な課題としていくのもよいだろう。

結果として、いっそう川に愛着をもってもらえ、自然が豊かになっていくことにつながると思う。

環境問題の解決というのは多くの人が理解を深めていくことで進んでいく。それはいろいろな立場の人がやるべきことだが、流域圏懇談会はその大きな一角を担えると思う。膨大な費用や時間もかかり、そうそう簡単ではないが、やらなければ後退するばかりだ。

### 流域圏懇談会について、フリーコメント

2010年に流域圏懇談会に参加して10年になる。2018年に「市民会議」「市民企画会議」を統合した形で「市民部会」が立ち上がったが、なぜか自分が司会をすることが多い。専門的な知識のある方もおられるが、学問的な話は置いておいて、みんなが平場に居る感覚で「言いたい放題」ができるのがいい。山川海、3つの部会のつながりをつくる議論ができる。これを系統的に組み立てて懇談会全体で具体化できる方向に持っていけると良い。

僕は専門家ではなく、ただ川が好きな素人。素人が流域圏懇談会にいるのは結構いいことじゃないかなと思う。研究者の方や国の方は河川や土木の専門家なので系統的なことを承知している。素人は見た目やポイントでしかわからないが、助言を得たり、様々な意見を聞くことで、自分たちの活動の位置づけや価値もわかって、楽しく参加させてもらっている。





# 井上祥一郎さん

(伊勢・三河湾流域ネットワーク)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人(市民団体) 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者: 高橋伸夫 レポート作成者: 高橋伸夫 取材日: 2020年2月25日(火)

取材場所 : 西三河県民事務所10階会議室 控室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

中・高校時代に生物部に所属して以降、大学、社会人を経て現在まで、生物に深く関わってきた。現役時代は中小企業の技術職として、雨水浸透、汚水処理、ヘドロ処理、たい肥化の技術提供をしてきた。全て生態系サービスの利用技術であったので、主要土木官公庁さんの採用技術分野の外側にいた。

技術士法に定められた"技術士資格"があり、技術士として相応しい経験技術か?高度の応用能力を持つか?公益確保の責務を負えるか?継続研鑽に努めるか?などを問う試験がある。試験では雨水浸透、汚水処理、ヘドロ処理、たい肥化の4つの技術を書いて、森林、上下水道、衛生工学、農業、水産、建設、環境、応用理学の8部門で資格を得ることができた。

官公庁が採択する技術は、大企業や業界の開発に頼る傾向があり、結果として高額な開発費用を費やすものになっているように感じている。言い換えれば、自分が学んだ技術は本流ではなく支流だった。林学を学んだ自分が、工学系の衛生工学や上下水道分野で活動できたのは、ほとんどが民間需要とのお付き合いで結果を残すことができたと感謝している。

定年を機に技術士登録事務所を移し、その時点で技術の棚卸しを行い、"流域環境修復実学"に纏めた。定年後、技術士業務を継続しつつ、愛・地球博の準備段階の頃から市民活動を開始した。2005年の愛・地球博から2010年の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)まで、中部地方は環境問題に向き合い、豊橋河川事務所さんが"矢作川流域圏懇談会"を立ち上げられたのもこの時期である。

一昨年の春、技術士の役目を考えて"オモシロ技術情報資料室"を立ち上げ、市民の方達が将来を決めるのに必要と思う技術情報の収集と発信を始めた。海部会でしつこく話題提供している高活性食物連鎖(魚介類に繋がるもので、クラゲ類に繋がるものを低活性食物連鎖と呼ぶ)に繋がるシリカ供給、の他、プルトニウムを燃して消しつつ核分裂エネルギーを供給する受動的安全炉のトリウム熔融塩炉、シカ害対策としてのオオカミの再導入等、行政やマスコミがほとんど取り上げない事項を話題にしている。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは?

自分が技術市民として、流域の生の情報を得られる勉強の場所である。また、ライフワークの高活性食物連鎖環境の実現を目指して、豊かな三河湾にする技術提案をし、多様な視点からの意見や評価を確認させてもらえる場所である。

山部会や川部会で、シカの食害による森林の荒廃や、イノシシによる農作物被害等が話題になれば、シカ、イノシシ肉のジビエ利用と並行して、捕食者オオカミの再導入を選択肢の一つとする意見交換が行える場でもある。ジビエとしてのイノシシについては、豚コレラ(今は豚熱)による利用制限もある。岡崎森林組合の方が、日本オオカミ協会の講演会に出席されたとお聞きしたこともあり、情報量の少ない中で、情報交換の場としての存在意義もある。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

山・川・海の連携について、市民部会が更に盛んになるべきである。流域の市民に対しては、雨の降り方の変化による大洪水発生の予測なども必要になってきた。自分は新しいダム建設には批判的であるが、東海豪雨の際、矢作ダムが流木を止めたことに見られるように、ダムの光と影の部分が気候変動で変わってきたように感じている。こうした情報の提供も、多くの市民の皆さんに矢作川に興味を持ってもらう上で大切なことである。

海部会では、窒素・リンを増やせば豊かになるという前に、窒素・リンの削減の途中で、漁獲にどのような変化が有ったのか?富栄養化の折に盛んに言われた"レジームシフト"は、窒素・リンの削減を緩和する段階で、どのように表れるかの識者からの情報供給を期待している。

シリカについては、持論なので、今後も発言を重ねたい。流域を繋ぐシリカの収支についても是非追求していきたい。映画「あらかわ」では"昔は、水田でも川でも海岸でも至る所に湧き水があった"という漁師の台詞で終わっている。豊かな湧き水のある矢作川流域にするために微力を尽くせる場としての懇談会にも期待している。

### 流域圏懇談会について、フリーコメント

自分自身は矢作川ではなく庄内川流域の住民であるが、矢作川流域圏懇談会には、溝口さんに誘われて最初から参加している。現時点で山・川・海の3部会の連携が希薄な理由には、多様な要因があると思うが、とりあえずは市民部会の中で話し合った上で、地域部会に展開していく方法が最も現実的だと考えている。流域圏の現状について関心のある人が増え、それが市民の常識になれば、大風呂敷だが、国内だけでなく、稲作文化で共通する東南アジアの全域にまで拡がることも夢ではない。



'18.12.19 第39回海部会WG(西尾)





# 山本薫久さん

(萩野NPO結の家)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人(市民団体) 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 沖 章枝 レポート作成者 : 沖 章枝 取材日 : 2020年6月18日

取材場所 : 豊田市産業文化センター



### お仕事やご活動、関心のあることについて

山本薫久さんは1997年に地縁血縁のない旧足助町に I ターン移住。きっかけは勤務していた名古屋市の小学校で児童の主体的な願いを実現させる実践を通して「個人のミッション」を持ったこと。それは自給自足を基本にして、身の回りのことを全部自分でできるようにして人生を全うしたいという思いで、土地を求め家を建て当地に来られた。以後、下記「肩書一覧」にあるような活動を20余年邁進されてきた。居住地域外ではあったが豊富な活動歴と幅広い人脈が評価されて、移住者ではあったが自治区の副区長に抜擢された。

足助地区東部の萩野自治区は7つの自治会(桑田和、菅生、竜岡、玉野、二タ宮、怒田沢、川面)で構成される 小学校区で、現在住民は230世帯、小学生は25人であるが自治区面積は1456ヘクタールと広い。

2019年に設立された、萩野・持続可能な地域づくりをめざす事業「萩野NPO結の家」の代表に就任する。

「結の家」の活動は5つのプロジェクトで構成されている。昨年実施した活動を紹介します。

①COCO暮らっそプロジェクト…トンカン木工塾を4月~翌年3月まで第4土日に開催。移住定住をめざす家族の交流や大工技術を身につけてモノづくりの楽しさを体験する。スタッフとして地元大工の河合定泉さんや設計士の島好常さんがいる。8家族で始まって、2家族が家を建てて移住したことで住民の目に見える形になってきた。

②田んぽプロジェクト・・・ 萩の田んぼ・おじさんの田んぼ・みんなの田んぼ・ママンの田んぼなど4チームがあって、休耕田を復活させて米づくりをしている。無農薬・無肥料でやっているが、それぞれのグループの話し合いで自由な栽培方法にしてよいことにしている。農業用機械は共有している。既に7反ぐらいを田んぼにしている。地域の関係人口を形成するほどになってきた。

③森林プロジェクト・・・2019年6月、「はぎの森の健康診断」を実施。10チーム80名が参加。10月に報告会を開催し、30名が参加。2019年度は12月から3月まで、半農半林のメンバー15人により地元の三角山で265本の間伐を実施。一部材を「結の家」工房で使う。萩野地域では森林ボランティア2グループが作業をしている。

**④新しく誕生したプロジェクト「トンカン子どもの森」・・・**トンカン木工塾参加家族の子どもたちが楽しく過ごすよう広場でスウェーデントーチやバーベキューを試みた。「枝オカリナコンサート」も開催できた。

**⑤梅プロジェクトから萩野手作り会(醤油づくりにチャレンジ)結成へ・・・**地域の採取されない梅の実を収穫して、萩野小学校の住民活用スペースで梅肉エキス作りを始めたことから手作り会が結成された。2020年から醤油づくりを開始。

プロジェクトの他に、澁澤寿一氏を招いて「なぜ里山・・・」の講演会や先進事例学習会などを開催している。

2005年にNPO法人「都市と農山村交流スローライフセンター」を立ち上げ、豊田市農山村地域において農都交流と持続可能な地域づくりに先駆的に取り組んだ。2019年に法人解散し、現在は地域年誌「新スローライフ通信」の発行のみを行っている。

### 「肩書一覧」

- ・萩野NPO結の家代表(2019年~)
- 萩野自治区副区長(2020年現在)
- ・NPO法人「都市と農山村交流スローライフセンター」代表理事 (2019年終了)
- ・とよた都市農山村ネットワーク代表(2018年終了)
- ・一般社団法人おいでんさんそん セカンドスクール部会代表
- 矢作川森の健康診断実行委員会委員
- ・森林インストラクター、無農薬有機肥料や自然栽培のお米づくり
- ・とよた森林学校事務局メンバー
- ・森林ボランティア支援 半農半林隊
- ・豊田市総合計画審議会委員(2006~07年)
- 豊田市森づくり委員会委員(2005~19年)

### あなたにとって、流域圏懇談会とは?

これまで山部会と市民部会に所属し、実際に森林にも関わってきたので、行政サイドに影響を及ぼす流域圏懇談会のようなどんとした仕組みがあることはいいなあと感じてきた。現在は自分が暮らしている地域の活動に重点を置いているが、地域が持続可能な社会のあり方を求めるように、流域でも一緒になって考えていけたらいいと思う。山川海、衣食住やエネルギーも含めた連携や関係性を探っていけたらと思う。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

昨年12月に市民部会ではマイクロプラスチックの汚染や農薬の水汚染が話題になった。その時、関心の高い若い世代など幅広い人を呼び込む勉強会や視察をやろうとなった。今年度早速に実施することになった。

マイクロプラスチック汚染の元凶については、化学繊維だけでなく、化学肥料の「ひとまきくん」の容器のプラスチックが分解されずに川から海にいって、世界の海の生物を追い込んでいることが知られていない。日本ではあまり啓蒙もしていないし、使用する農家さえ影響を及ぼしていることを知らない。少しずつ認識を高めるしかないと思う。実はいま関わっている田んぼグループには情報は流している。情報を「まあ見ておいて」という程度なんだけれど、知っている情報の発信はしている。知って実際はどうかは個々の判断に任せるというフリーハンドがいいと思う。どんなこともやらされ感が出てくると面白くなくなると思う。

### 流域圏懇談会についてフリーコメント

持続可能な社会とは「地球環境や自然環境が適切に保全され、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現代の世代の要求を満たすような開発が行われている社会」という。持続可能な地域とは何かを考えながら実践をしている。一緒にやっている人たちは同じ地域に住む仲間なので、みんなの中にいることがとても愉しい。何かを私の方からやりましょうと言って始めるのではなく、仲間の中から「こんなことがやれるといいね」、といっていろいろなことが始まっている。味噌は各家庭で作っているのでみんなで醬油を作ろうとか、梅がたくさんなっても収穫されないでいるから梅肉エキスを作ろうといった手作り会も誕生している。

流域圏懇談会と地域づくりのことでいろいろな交流ができるといいと思う。地域自治と分野別自治が確立しないと持続可能な社会の実現につながらないと考えるので、それをどうつくっていくかみんなで話し合い、流域全体で持続可能な社会をめざせたらと思う。三河湾の魚を食べ、近くの木でいろいろなものが作れ、身近な田んぼや畑で地域の人たちや家族で作った米や野菜を食べられたらいいと思う。ここでの老後の暮らしも計画している。地域の自然と人間関係を維持したままで終われたら最高だと思うから。



萩野の30代から50代の若手が田んぼの担い手



トンカン木工塾



三角山の間伐



はぎの森の健康診断





# 溝口敏明 さん

(一般社団法人 中部地域づくり協会 上席調査役・地域づくり技術研究所 主任研究員) (元 国土交通省 豊橋河川事務所 事業対策官 2010~2012年度)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政(事務局

ヒアリング参加者: 近藤 朗 レポート作成者: 近藤 朗 取材日: 2020年1月16日

取材場所: 中部地域づくり協会(名古屋市瑞穂区)



まず、筆者が歴代の矢作川流域圏懇談会事務局(豊橋河川事務所)担当者に聞いておくべきこととは何か? (参考までに、今までの担当リーダーの系譜(2010~2019年度)を以下に示す)

10年を経て改めて矢作川流域圏懇談会は、今までに類を見ない画期的な組織であると認識している。そもそも、河川管理者の立場からすれば、自らが責任を負える範囲は河川区域内であり、それを越えた流域全体の範囲(山、海など)をも議論する場など、積極的につくろうとはしないはずである。なぜ、それができたのか?

表面上は、2009年に策定された国の「矢作川水系河川整備計画」に記載されたことにより動き出した懇談会であるが、かなりの英断である。ちなみに国の他水系では聞いたことがない取組。その導入経緯と共に、多くの関係者が関わり、相当煩わしい作業になるであろう事務局組織(ほぼ2~3年で担当者が変わる)での苦労と継承過程について、歴代担当者の方々(3名)に聞くこととした。(以上、近藤の視点)

以下取材を通じて、設立時に関わった溝口事業対策官には、それなりの思いがあったことがわかる。ではその後、 職として任務を継承された後任の方々は何を考え、いかに組織として対応したのかが重要なテーマとなるはず。

### 【歴代担当者】

2010.4月~2013.3月 溝口敏明 事業対策官

◇ 2010.8月28日に「矢作川流域圏懇談会」設立総会が開催

◇ 2011.9月 「矢作川の全て」バスツアー開催、各部会でも現場へ行き、情報共有を行う

2013.4月~2015.3月 西原均 事業対策官

◇ 2013年度より「山村再生担い手づくり事例集」調査が始まる

2015.4月~2017.3月 大森正昭 事業対策官

◇ 2015.9月 初の「山と海の合同部会」を西尾市幡豆地区で開催 2017.4月~2018.3月 松山康忠 事業対策官、服部朋悦係長

- ◇ 2017年度より(山村再生担い手)事例集交流会が根羽村からスタートした
- ◇ 2017年度より矢作川感謝祭など流域連携イベントへ参加

2018.4月~ 2020.3月 神本崇 事業対策官



### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

- ○1973年に中部地方整備局に入局、2015年3月に退職するまで概ね河川系の業務に携わっていた。(42年間勤務) ○2000年頃、中部技術事務所時代に実施した官民協働による「めだかの学校」調査が縁で市民団体「リリオの会」 と関わり、その後に伊勢・三河湾全体の市民団体と協働作業がスタートしていく。
- 〇豊橋河川事務所には、2回勤務。2005~2006年度に調査課長として赴任、この時はどちらかと言えば、設楽ダム計画など豊川水系の分担が大きかった。当時の試みとして、豊川水系に関わる市民、関係団体(漁協、森林組合、学校等)とのネットワークが出来ればと思い、緩やかな1回/月の誰でも参加できる「飲み交流会」のような場をつくって意見交換を実施。これが「流域圏」に繋がる。
- 〇2度目が2010~2012年度の事業対策官。河川法改正などの時代背景もあるが、矢作川整備計画策定に向けて流域の意見を十分聞いた結果、流域圏内の山川海にわたり陸域から水面まで管理権限を越えた課題が膨大に出され、流域圏一体の取組について記載された。こんな組織が出来たら課題は大きく改善されると思った。

あなたにとって、流域圏懇談会とは?

### 【懇談会設立まで】

私が2度目の豊橋河川事務所に赴任したのが、2010年度から。その前年度、2009年7月30日には矢作川水系河川整備計画が策定されており、その中には「矢作川流域圏懇談会」設置が既に盛り込まれていた。これを決定した流域委員会の委員長は、辻本哲郎氏(現在の矢作川流域圏懇談会座長)であり、最終責任者ということになる。何故このような場を設置することになったのかと言うと、当時国土交通省が進めていた大規模河川改修やダム計画に対しては市民などから猜疑心も持たれており、様々な批判を受けていたことも背景にある。実に様々なメンバー、セクターが参加していた流域委員会において、河川や流域内における課題を挙げてもらった結果、これが1,000以上にも上り、テーマごとに整理してみたら河川管理者だけでは解決できないものが大半であった。では、どうしたら良いのかという話である。

それでは、流域圏に関わる多くの関係者、機関を集め課題解決を図るための意見を聞く場、議論する場をつくろうということとなり、この「懇談会」が提案されたと思う。河川管理者である豊橋河川事務所は、その中で決定権限は持たないこととし、様々な課題を土俵に乗せ関係者を集め議論する場を設定、運営することとした。あくまで、ここに参加する関係者や市民の皆様のお手伝いをする事務局を担うこととしたのである。

私は、懇談会を立ち上げるために来たと言っていい。赴任から懇談会設立までの期間は、ほぼ5ヵ月しかなく、参加者公募から枠組み構成など設立総会(2010年8月28日)まで奔走した。実のところ、懇談会については、「凄いことを整備計画に盛り込んだな」という感覚であり、自分としては今までの経験(豊川水系でのネットワークづくりなど)を踏まえた集大成と位置付ける。やることが全ての課題解決につながる訳だから、これはまさしく自分が望んでいた仕事だ、「よし、何としてもつくってやろう!」という気概で臨んだ。

参加者については、Web等公募もかけてはいたが、多くの人に聞き取りしながらその「多様な人々の考え」を形にした。現在参加しているメンバーが、当初から全て揃っていたわけではない。関係機関として、矢作川など川の漁協、海の漁協などにも声をかけさせていただいたが、特に利水関係者の呼び込みは難しく、参加してもらうまでに1年半は要した。多くの関係者、市民団体などが参加する場で「川の水を搾取する」ことを非難されるのが明白でイヤだ、という思いであろう。こういった方々にも地道に説得を続けた。海の漁協に対しては、海部会の鈴木輝明さんと共に説得した。

なおこの頃、国は矢作川流域圏を含む伊勢湾そのものを再生すべく、伊勢湾再生行動計画(2007.3月策定)、及び伊勢湾再生推進会議を進めていたが、思うように進んではいない。これと比べても、多くのセクターが参加し10年も続いてきた矢作川流域圏懇談会は、もっと評価されるべき取組だと思う。

### 【設立後・初期段階において】

懇談会メンバー、関係者とは、事務局として毎日毎日やり取りをしていた。これも大変ではあったが、とてもやりがいがあった。設立後の懇談会運営(地域部会、市民会議など)を軌道に乗せるため、そもそも懇談会自体が初めての取組であり、そのあり方・進め方・取り扱う課題を何にすべきかなど話し合うために、当初は会議ばかりであったと記憶している。

そんな中で、議論をするためには「まず現場に行こう!」という声が上がったのは、山部会からである。2011年には、「矢作川の全て」バスツアーなど、各部会で現場体験を共有する取組が展開されたことは、大きな転換点となった。 結局私は、3年でこの任務を後任者にバトンタッチしたのである。



「 矢作川の全て」バスツアー 開催 2011年9月23日~24日 明治用水にて

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

矢作川流域圏懇談会は、今までにない先進的な模範事例であり、このような取組がもっと全国に広がってほしい。私が知る限り、10年たった今でも全国の他の流域で同様な規模の事例はないと思う。是非、皆さんにもっとアピール・発信をしていただきたい。

現在私は、矢作川での経験をモデルに、庄内川水系をベースとした「伊勢・三河湾流域圏」での懇談会バージョンを、特色を生かしながら展開しているところ。具体的には、NPO土岐川・庄内川サポートセンター、矢田・庄内川をきれいにする会、土岐川・庄内川流域ネットワーク、リリオの会などを中心に頑張っている。また、誰でも30分で打てる投網教室を主催したり、岐阜県山岡の森林組合とも連携中、さらに長野県根羽村の古民家を「森の交流館」として開館し、都市部の方々(庄内川関係)に体験いただいている。

あの汚かった庄内川にも多くのアユが遡上し、さらにはシラスウナギも遡上してきた。河口ではハマグリも採れ始めた。

【追記】この取材後、溝口さんは、2020年4月より新たに建設コンサルタント会社((株)興栄コンサルタント)技術管理部長として就任。「岐阜県の会社なので、これからは木曽三川連携もめざす」とのこと。溝口さんからは、「皆様にお会いできる日を楽しみにしています」とのメッセージをいただいた。



春日井市主催会議で講演する溝口さん 2017年5月13日 春日井市内にて

土岐川・庄内川サポートセンターHPより



\*取材後、溝口さんの退職後の活動を検索したところ、(国)庄内川河川事務所の河川協力団体に認定されているNPO土岐川・庄内川サポートセンターとして、溝口さんが発表されているレポート(2016年11月)を見つけた。活動目的として【山の民+川の民+海の民】「土岐川・庄内川の流域圏が一体となった地域づくりを図る」とあり、今なお当時の思いを続けているのであろう。





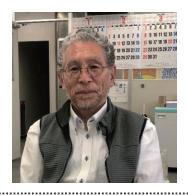
# 大森正昭さん

(一般社団法人 中部地域づくり協会) (元 国土交通省 豊橋河川事務所 事業対策官 2015~2016年度)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

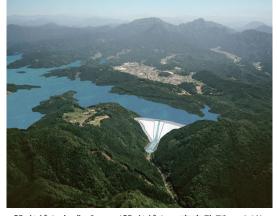
ヒアリング参加者 : 近藤 朗 レポート作成者 : 近藤 朗 取材日 : 2020年4月8日

取材場所 : 中部地域づくり協会豊橋支所(豊橋市立花町)



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

- 1957年2月、豊橋市生まれ。1975年に建設省中部地方建設局(現在の国土交通省中部地方整備局)に入局。
- 入局後、最初は道路分野からスタートしたが、退職まで特定の分野に偏っておらず、40年余の内、概ね道路が 1/3、河川が1/3、その他ダム(設楽ダム、新豊根ダム)・砂防・海岸が1/3といった職歴、いろいろやってきた。 これは非常に珍しいことだと思う。赴任地も愛知県をはじめ岐阜県、静岡県、長野県(天竜川上流河川事務所) まで広範囲にわたった。
- 〇 設楽ダムには2回関わった。また1998年に休止(その後中止)された矢作川河口堰事業についても、1990年頃この事業による矢作川河口部の護岸整備・河道浚渫などを担当(安城出張所)した。さらに長野での砂防事業を担当するなど、山間地の森林組合や林業者、海の漁協の方々ともお付き合いさせていただいた。砂防、海岸事業(富士海岸)を含めて、これらの様々な経験が、後の矢作川流域圏懇談会の業務に繋がっていった。



設楽ダム完成パース(設楽ダム工事事務所HPより)



矢作川河口部(豊橋河川事務所HPより)

〇 豊橋河川事務所には現役中3回赴任し、最後は2015年度~2016年度に事業対策官として着任、2年間懇談会の担当となり退職(2017年3月)を迎えた。その後、現在の一般社団法人中部地域づくり協会に勤務することとなった。特に現在(取材時)は、設楽ダム付替道路事業の工事監理業務を担っている。これは中部地方整備局現役時代に関わらせてもらった事業でもある。時を経ての巡りあわせかな。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは

2015年度から豊橋河川事務所事業対策官として担当することとなったが、(他に類を見ないこの取組に対して)実は戸惑いは特になかった。先に述べた経歴から、山から海に至るまで様々な分野に関わり、多くの方々と向き合うことができた。そこでわかったことは、「山・川・海の人たちが、みんな豊かになってもらわなあかん」ということ。このような経験を踏まえて、山・川・海の人たちが一堂に会する「矢作川流域圏懇談会」は、必要な場であり、「国の河川事業にとって無くてはならない大切な取組だ」と思った。流域圏懇談会の経験は一番面白かった。

また、流域圏懇談会設置の背景として、矢作川が「総合土砂管理計画」を策定すべき水系に位置付けられたことがある(下記参照)。この課題を取り扱うためには、土砂生産域である山からダム区域、河川、海岸、海までを総合的に見なければならず、これを推進するためにも流域圏懇談会には大きな意義がある。

【矢作川水系総合土砂管理計画】(豊橋河川事務所HPより抜粋)

総合的な土砂管理については、2009年に策定された「矢作川水系河川整備計画」の目標とされている。矢作ダムでの堆砂の進行、中下流におけるダム等横断工作物による土砂移動の連続性の分断、河床・砂州の固定化や樹林化、河口干潟の減少などの問題に対して、「森・川・海」といった一連の水・物質循環及び生物の生息・生育環境に配慮しつつ、健全な流砂の連続を確保するための水系一貫の方策を検討することとして、2012年度(2013年3月)に「矢作川水系総合土砂管理検討委員会」(委員長:辻本哲郎教授)が設立された。



土砂管理の先進事例の見学(小渋ダム) 2019年秋

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

川は流域の通り道であり、われわれはもっと山と海のことをわからなければならない。そこで得られた課題を共有し、情報や知見などを隠すことなくもっと発信すべきである。「矢作川流域圏懇談会」が今後も長く続いて、その成果を広められるとよい。





中部地域づくり協会豊橋支所での 大森さんへの取材風景

豊橋支所には、矢作川森林塾の小林智さん (元豊橋河川事務所岡崎出張所長)も在籍



### · 流域圏懇談会について、フリーコメント(文責:近藤)

国交省はよく嘘をつく。ダム事業や河口堰建設等の巨大プロジェクトに関して、このように厳しく批判される時代だ。大森さんは、これらの事業に携わりながら、丁寧に地域と向き合ってこられた方だと感じる。市民にもきちんと話をすれば、わかっていただけることも多い。約束を果たせる組織でありたいという思いがあったとのこと。そのため、当時の所長とも随分議論を戦わせたらしい。建設事業に対する批判や逆風が、流域圏懇談会を設置した背景の一つだと言う。確かに同じことを初代担当の溝口さんも仰られていた。

今回の「山から海まで」という話を聞きながら、そう言えば懇談会ではじめて山と海との合同部会を開催したのは、大森さんの時代(2015年)だったなと思い出した。大森さんの「ボブ」という愛称がつけられたのも、確かこの合同部会ではなかったかな。



初めての山部会・海部会の合同部会の開催 2015年9月26日 西尾市幡豆にて 中央が大森さん





# 神本 崇 さん

(国土交通省 豊橋河川事務所 事業対策官 2018 ~2019年度)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 近藤 朗 レポート作成者 : 近藤 朗 取材日 : 2020年1月17日 取材場所 : 豊橋河川事務所



### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

- ○1967年生まれ、岡崎市(矢作川右岸側)が故郷、矢作川の原体験がある。 アースワーク(水と砂の造形)ができるような砂河川であった。幼少期には、 親といっしょに砂で遊んだりした記憶があるが、今は樹木の繁茂とレキ化 が進んでしまった。ただ、当時それほどきれいな川とは思っていなかった。 水質的には、今の方が良いのだろう。
- ○河川を仕事として関与し始めたのは、1987年に当時の建設省中部地方 建設局に入局してからである(現・国土交通省中部地方整備局)。今まで 主に河川系の業務に携わってきた。

(三重河川、木曽川上流、本局(河川工事課、地域河川課)、設楽ダム、 浜松河川など)

- 〇豊橋河川事務所に2018年度、事業対策官として赴任し、懇談会の担当となった。入局し30年経ち、初めて地元の河川に携わることができたのである。
- ○2020年4月に浜松河川国道事務所(副所長)に異動。



矢作川アースワーク 2015年頃

### あなたにとって、流域圏懇談会とは

赴任直後、流域圏懇談会のあり方について深い理解のないまま、突入した感じである。何せ最初のイベントの場が、佐久島泊まりで行われた「担い手事例集交流会」であり、今までにない経験をした。参加したメンバーの流域に対する熱い語りを見て、衝撃を受けたのである。

懇談会は、情報共有の場として大事だと思っている。なかなか課題解決するまでの場にはなれないが、様々な課題が見えるようになることや、ネットワークが広がっていくことを期待している。河川管理者としては、災害という視点で川を見がちであるが、やはり流域全体を考えることも大切である。

豊橋河川事務所も様々な業務を抱えており、事務局も運営には苦慮しているが、私自信は結構楽しんでやっている。

流域圏懇談会は、河川管理者も含め参加者がみんな同じ方向を向いて議論できる場だと思う。 ただ川部会は、河川管理者の出番が多く、説明責任を果たす場となるが、事業のPRの場だとも思っている。 川部会の支川モデルの取組は、昨年まで家下川のみを扱ってきたが、流域をもっと広い目で捉えたほうが良い と思い、今年度は他に、郷東川(安城市)や岩本川(豊田市)など現場に行くことが出来て良かったのではないか。 やはり現場を見て感じることは重要だと思う。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは ~川部会の風景~



郷東川(安城市 2019.9.2 川部会WGにて)



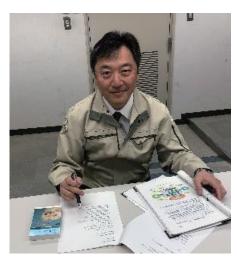
岩本川(豊田市 2019.10.15川部会WGにて)

岡 崎 百 景 - 私とまちの100のドラマ-

青空の下のサンドアート [矢作川アースワーク]



岡崎市HP・岡崎百景より 2012年撮影



豊橋河川事務所での神本さん

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

今年度で懇談会も10年が経過した。組織運営上も様々な試行錯誤があり、現体制に落ち着いている。しかし、今後の10年をどのようにやっていくのか、は真剣に考える必要がある。メンバーの固定化や世代交代も考える必要がある。今年度、最初の10年のまとめを行っているが、次年度は今後のあり方についても議論していきたい。懇談会での河川管理者(豊橋河川事務所)の役割とは何か、流域圏内の責任を負えない課題をどのように他者へ働きかけていくのか、少しでも解決へと作用するような組織になることを期待する。

突然転勤してすみません。隣の浜松(河川国道事務所)に行きます。2年間ありがとうございました。 楽しかったです!



フォーカス 1

# 縁の下の力持ち、事務局補佐の皆さん

10年誌編集委員 近藤 朗

矢作川流域圏懇談会事務局は国交省豊橋河川事務所が担っているが、その専門的な補佐業務は設立段階から建設コンサルタントに委託されている。彼らは単なるスタッフというだけでなく、懇談会の重要な構成員そのものでもあり、次頁からキーパーソンとして紹介する。

この業務に関わったのは設立時から2社あり、建設技術研究所とアジア航測である。それぞれが事務局補佐を担った時代のトピックスを以下にまとめた。

### 【歴代事務局補佐とトピックス】

### 2010~2014年度 株式会社 建設技術研究所(建技)

- ◇ 2010.8月28日 「矢作川流域圏懇談会」設立総会
- ◇ 2011.1月26日 第1回地域部会(山·川·海)開催
  - ~ 各部会長選出、課題抽出と整理
- ◇ 2011.5月20日 市民企画会議設立
  - ~「このままでは空中分解する、会議室ではなくフィールドに出よう」と提案される
- ◇ 2011.9月 「矢作川の全て」バスツアー開催
- ◇ 2012.2月23日 第2回地域部会 山・川・海で合同開催
  - ~ 今後の地域部会の取組方針(ex.山部会;出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有などテーマ)を決定
- ◇ 2012年度より 地域部会 山・川・海ワーキンググループ(WG)が始まる 当時は各々年8回程度
- ◇ 2012.8月3日 第1回全体会議開催(以降年1回、2012年度のみ2回開催)
- ◇ 2013年度より 各部会などの開催結果について「矢作川流域圏懇談会通信」が発行、HPに掲載される
- ◇ 2013年度より 山部会にて「山村再生担い手づくり事例集」調査開始
- ◇ 2013.11月2日~3日 東京にて「第6回いい川・いい川づくりワークショップ」参加・発表、入賞を果たす
  - ~ 懇談会から初の外部発信を行う
- ◇ 2014.2月28日 第3回全体会議開催
  - ~ ダムの問題に関して、海と山の議論がまだ共有できない現実がある
- ◇ 2014年 22世紀奈佐の浜プロジェクトの「西の浜海岸清掃」(6月15日)、「答志島海岸清掃」(10月12日) に参加、西の浜でのシンポジウムにおいて各部会の発表・発信も行う
  - ~ 懇談会全体としては初の外部交流となる 答志島奈佐の浜海岸では海部会ごみ調査も行った
- ◇ 2015.2月24日 第4回全体会議開催 ~ 今後、積極的に流域連携を進めることを確認

### 2015年度~現在 アジア航測 株式会社

- ◇ 2015.9月 初の「山と海の合同部会」を西尾市東幡豆地区で開催
- ◇ 2017年度より 山村再生担い手づくり事例集交流会を開催
- ◇ 2017年度より 矢作川感謝祭など流域連携イベントへ参加
- ◇ 2020.12月 矢作川流域圏懇談会10年誌発行



第1回 全体会議 2012年8月3日 豊田市内にて



辻本哲郎座長





# 土屋信夫 さん

((株)建設技術研究所 東京本社都市部)

山部会 川部会 海部会 市民部会 個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

セアリング参加者 : 近藤 朗 レポート作成者 : 近藤 朗 取材日 : 2023年2月20日

取材場所 : (株)建設技術研究所 東京本社(東京都中央区)



\*土屋さんへの取材は10年誌初版発行後の2023年2月となったため、第2版より掲載。

### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

○ 1971年山梨県生まれ、子どもの頃はよく川で遊んでいた。ブドウ農家だったこともあり、畑でも遊んでいて、生き物も自然も好きだった。

.....

○ 大学を卒業する頃は、フロンガスによるオゾン層破壊など地球環境問題が大きくクローズアップされた時代(1992年6月「国連環境開発会議」が開催。いわゆるリオサミット、地球サミットと呼ばれる会議)だった。その当時建設コンサルタントという業種を知り、環境アセスメントが役立つのではないかと勝手に勘違いして、現在の会社に就職した。大学での専攻は土木環境工学科で水理・水文の研究室、卒業研究が当時は先進的なヒートアイランド現象だったことも影響したかもしれない。

### (最もやりたいことは「まちづくり」だと聞きましたが?)

- 建設技術研究所で配属されたのは、環境・都市部の計画系のグループ。そこで河川環境整備やダム周辺整備、地域活性化業務に携わったことが、広い意味で「まちづくり」との関わりのスタート。その後、会社の方針で都市部が創設され、現在に至るといった感じ。いわゆるバリバリの都市計画の技術者というより、都市及び地方計画=地域活性化の専門家として生きていきたいと考えており、これが矢作川と関わりたいという思い、動機だったのかも。
- 懇談会業務から離れた後、九州への転勤もあったが、2022年4月からまた東京本社に戻ってきた。ここで展開されている日本橋浜町エリアマネジメントに会社のCSR活動として関わるようになり、これは業務ではないものの楽しくてやりがいがある。



第1回市民会議(2010年11月6日)の土屋さん 後ろは黒田武儀さん

### (近藤)

矢作川流域圏懇談会でも、2022年度の事例集調査は名古屋市の錦二丁目エリアマネジメントを対象として取材しているところです。このテーマでもまた土屋さんと語り合いたいですね。

浜町でも自分たちのまちは自分たちで魅力的にしていこう、住民たちが楽しみながらやっていこうとしています。流域圏懇談会とエリアマネジメントの本質は、共通するところが大きいのかもしれません。





2022-11-02

浜町きれいプロジェクト Vol.14

一般社団法人 日本橋浜町エリアマネジメントホームページより (建設技術研究所は正会員)

あなたにとって、流域圏懇談会とは? 設立・黎明期(2010~2014年度)のお話などお聞かせください

2009年策定の矢作川水系河川整備計画には、「矢作川流域圏懇談会」設置が盛り込まれたものの、その具体的な組織像が謳われているわけではない(下記参照)。なお当社建技は、河川整備計画業務も中部支社が担っていた時期もあり、この懇談会業務へと繋げたかった。

### 整備計画本文抜粋(P3-22~P3-23)

### 第3節 調和のとれた矢作川流域圏の実現に向けた取り組み

矢作川流域では、過去から住民が一体となって流域圏という考え方のもと様々な 諸課題に取り組んできた歴史がある。今後、矢作川における治水、利水、環境、総合 土砂管理、維持管理等の諸課題を解決し整備計画の目標を達成していくためにも "流域は一つ、運命共同体"という共通認識を持ち、調和のとれた流域圏全体の持続的 発展を目指す必要がある。このためには、学識者や森林組合、漁業協同組合、土地 改良区、企業、市民団体、NPO等の各種団体、国、県、市町村の関係行政機関がそれ ぞれの役割について認識を持ち、互いに連携して諸課題の解決に取り組む必要がある。

### 矢作川流域、その流域に接する海域、及び 矢作川の水利用地域や矢作川が氾濫する地 域を含む一体的な地域

矢作川流域圏の定義



### 第1項 流域圏一体化の取り組みに関する事項 1 流域圏住民・関係者の連携強化

河川管理者だけでは解決できない課題に対して流域一体となって取り組むために、河川管理者が中心となり矢作川流域圏に関係する各組織のネットワーク化を図り連携を強化していく。流域圏住民と関係者間の交流を深めるため、流域圏内で各組織や団体が取り組んでいる川づくり、森づくり等の活動に関する情報発信を支援し、住民参加を促進させる。このため、各組織や団体が実施している森林保全、水質保全、三河湾再生に向けた取り組み等について、今後のさらなる充実に向け行政、住民、学識者等が情報共有、意見交換を実施し、さらに課題を解決するための場として新たな枠組み(流域圏懇談会(仮称))を検討していく。

2010年度から懇談会組織そのもののあり方・設計を豊橋河川事務所、主に溝口敏明事業対策官(81頁)と共に 創りあげる作業に従事したのであるが、ほぼゼロからのスタートであり、かつて経験したことのない極めてつらい業務でもあった。ただし私たちコンサルの作業はそのベース案立案、技術資料の作成であり、実現に向けての調整業務、主要構成メンバーの人選などは溝口さんが行うものと、お互いの役割分担は明確だった。初期時点での受託者・建技と豊橋河川事務所は同志であったと言える。溝口さんからはプロジェクトを進める上でのリーダーシップのあり方を学んだ。なお、1年目のミッションは、流域圏で出された課題をどう整理するのか、どの課題をどのように取り扱うのか、そして何を目指すのかにあった。

建技チームは主に東京本社メンバーが担っており、当時の構成員からは「矢作川のことがわかるのか?」という冷たい視線も感じており、逆に闘志が湧いた。とりわけ創設時第1ステージにおいては、24時間3交代勤務のような臨戦体制を組んでおり、溝口さんなどからの要請に対して迅速に対応できるようにした。この時のチームは、ある意味最強のメンバーであり、今でも私の誇りである。

2011年度は、山・川・海の各地域部会が今後展開していくテーマ設定の議論が行われた。そのたたき台をつくり提示し、ダメ出しをされるという繰り返しがあり、例えば山部会の出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有と4つの課題(30頁参照)については、これを10回くらいは作り直し、心が折れそうになった時期もある。

川部会のテーマと図(33~36頁)、海部会(41~43頁)も然りであり、これらは2012年2月の第2回(合同)地域部会で提示され、実践された。これが現在までの礎となっているはずだという自負がある。



建設技術研究所チーム 牛来(ごらい) 司 統括



(川部会担当) 川上 哲生さん



(海部会担当) 細谷 州次郎さん

2012年度に地域部会WGが始まってからは、私は主に山部会と海部会を担当した。山部会は皆が真剣で面白い。 とりわけ根羽村森林組合の今村豊さんがやって来てからは、随分とフラットな関係が構築されたのではないか。彼は 誰に対しても分け隔てがなかった。海部会も穏やかな議論が展開されていて好きだった。このような業務では、やはり 人が要となる。信頼関係の構築が重要だと思う。

計画系の仕事は主に机上での議論・検討で終始することが多いが、山部会では、山の課題を実際に自分の目で 確かめることが出来たし、海部会では「ごみ調査マニュアル」を作成し、それに基づいた実際の調査も行えた。いろ いろな会議体や活動の仕方、資料の提示方法などを試行錯誤し、市民との合意形成のあり方についても実践でき たことは貴重な経験。以降の業務においても、十分生かすことが出来ていると思う。





懇談会黎明期(2012年頃)の各部会の様子

左が海部会、右が山部会(右端が土屋さん)

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

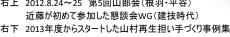
私自身この業務が好きであり続けたかったのだが、2015年に途切れることとなった。応募したもののそれまでの懇談 会業務実績が評価されなかったことが一番口惜しい。一方で、年々予算が削減されつつあったこと、さらに懇談会 運営が第2ステージ(2013年~)以降ルーティン化されてきて、建設コンサルとして「少しつまらないな」という思いも あった。それだけ初期の制度設計業務が熱く刺激的過ぎたのだろうか。

当初は、「10年も続けばいいかな」と思っていたが、ここまで継続されている ことには驚いているし、凄いことだと思っている。これからもずっと続けてもらい たい。ただし、継続化していくと必ずマンネリ化と参加者の固定により活動が 停滞していくという宿命がある。長く続けること自体は素晴らしい事ではある が、これを打破するためのチャレンジをしてほしい。活動の幅を広げていくこと、 新しい人たちを受け入れ組織の新陳代謝を図ること、参加者の輪を広げて いくことなどが重要だろう。

もう一点、懇談会の運営をすること自体を目的化しないよう念頭に置いて おく必要がある。あくまで懇談会を設立した目的が大事なのだから。初期の 目的や思いを忘れないためにも、この「10年誌」のようなアーカイブは、とても 大事。また目的を見失わないためにも、3年を1サイクルとするステージ評価 は継承していってほしいと思っている。

(近藤) 私自身は、懇談会設立時から関わっていたわけではなく、2012年 からの参加(右上写真)。本格的には、2013年度、山部会の「山村再生 担い手づくり事例集」調査からのこととなります。従いまして、土屋さんのお話 は原点に帰るという意味で大変重要でした。懇談会運営は、常に新たな チャレンジをし続ける必要があり、そのためにもある期間ごと(今までは3年で したが)の評価も重要でしょう。その上で次の10年(2020年~)を進歩させ ながら積み重ねたいと意を強くしたところです。

> 右上 2012.8.24~25 第5回山部会(根羽·平谷) 近藤が初めて参加した懇談会WG(建技時代)







019

### 矢作川流域圏懇談会10年誌 キーパーソンヒアリング

### 中田 慎 さん

(アジア航測(株)国土保全技術部SABO課)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政(事務局

ヒアリング参加者: 神本 崇、丹羽健司

レポート作成者 : 丹羽健司 : 2020年1月28日 取材日 取材場所 : 豊田市職員会館



### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1971年生まれ、東京の多摩地域で過ごし、早稲田大学教育学部理学科で地質・古生物学と植物生理生態学を 学んだ後、筑波大学大学院で流域管理研究室に所属して、主に渓畔林の樹木根系を研究した。研究の延長での仕 事をと、アジア航測に入社し、今に至る。

矢作川流域圏懇談会に関わる前、長野の松本で地域住民とのワーキングを通じた地域づくりの仕事があった。そこで 人に寄り添う仕事を初経験。矢作川に来て早稲田大学の研究室の先輩である洲崎さんと再会してまずびっくり。もとも と森林生態や植物をへて山の防災、特に砂防が専門だった。

いま関心があることは、今後私はどのように生きるべきか?自分にできることは何か?であり、大きく2つあると考えている。 1つは、今まで生きてきた中で培った研究・技術について、次世代に伝えるということ。たとえば防災のことだが、根底にあ るのは自然であり、そこで生きている「人の生活」を知るということで、自然無くしては成立しえない人間社会について「ど れだけ分かりやすく伝えることが大事か」を意識している。一般に、難しい話だと耳を貸さない人が多くなるが、本当は知っ ていれば生活しやすくなるということを知ってもらいたい。そのトランスレートをどのようにやっていくか?が課題の一つだと思っ ている。

もう1つは、自給圏について、である。次世代にどんな社会を残すかをまじめに考える必要があると思っていて、これは矢 作川流域圏の仕事をやっている中で気づかされたことである。いま、享受している幸せについて簡単に分かる言葉・内容 で説明できたら嬉しい。

その上で、今後、エネルギーを地域で自給できるような形について、都市近郊でできることとして探ってみたいと思ってい る。今の自分のキーワードは「FEC自給圏;食糧(Foods)とエネルギー(Energy)、そしてケア(Care=医療・介護・福 祉)」であり、これらを地域内で自給することが地域の自立につながると思い、このうち、特にエネルギーの域内自給に魅 かれている。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは?

私にとっての流域圏懇談会は、「仕事そのもの」と「人との関わり合い方」のターニングポイントといえる。「ありがとうござい ます、また来てください」と自然に喋ることができ、今でもとにかく笑顔で仕事するようにしている。

通常の業務と違って他人ごとでなくなってしまった、というのは非常に驚きである。ある意味、矢作川が第二の故郷のよう に、意識が変わってしまった。懇談会の立ち上げの段階では喧々諤々の議論があったと聞いているが、それらを経て雰囲 気や方向性が安定したところからタッチできたのはラッキーだったといえる。ほかでは、このような場合コンサルは空気のような 存在でいなければならないと言われたが、3年目以降から違った。思いを語れる人が集まる場があるということが重要だとい うこと、そこに我々も同じ方向を向いて存在してよいということを許してくれた事務局、特に神本前事業対策官の寛大さが あった。今では、これが脈々と引き継がれていくという確信がある。

また、このキーパーソンヒアリングで丹羽さんから伺った懇談会のあり方とは、「妄想力からの具現化」の場であるということ であり、これを聞いたときに、何となく腑に落ちた。今後も、「妄想を言いやすい雰囲気をつくること」、「これらをしっかり記録 していくこと」を実践したいと思う。これこそがマイルストーンになり、成果になる、というのは非常に勉強になった。

92

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

今まで補佐をする中では、地図や赤色立体地図を使った流域圏風呂敷という空間軸、年表という時間軸の共有ツールの提供を心掛けてきた。ここ数年でだんだんと落としどころや方向性が見えていると感じているので、事務局補佐が懇談会に期待する、というのも少しおかしな話だが、次のように感じている。

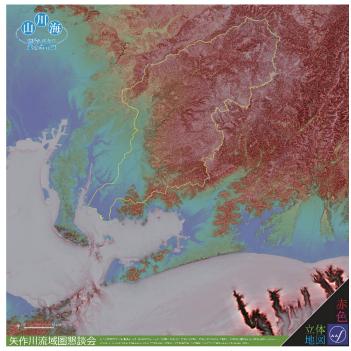
流域圏懇談会の究極の目標は、流域に住む生活者に流域圏という概念を知らず知らずのうちに植えつけることだと思っており、それを発信してはどうかと考えている。得てして、一般の方からは真面目なことを言うと面倒くさがられるものなので、「気づいたときには流域単位で語れる世の中になっている」となるような方法をぜひ検討して発信していって欲しい。真面目にやることはとても大事だが、ふわっとしたところから楽しく相手に概念を伝えることができたら素敵なのではないだろうか。



2016年7月 奥矢作森林フェスティバルにて 若いママさんが根羽スギのワッパ弁当箱に興味を持ってく ださったので、真面目な流域の概念を分かりやすく説明



2018年4月 事例集交流会 | 佐久島にて 矢作川流域圏風呂敷を翻らせて、メンバーの方々と記念 撮影! とてもいい思い出



矢作川流域圏風呂敷

およそ70cm四方に矢作川流域の上流から下流、そして三河湾全体を表現した、布製のマップとなっている。年度末の全体会議において、流域圏懇談会メンバーに配布した(2018年および2019年)。

### 【ふろしきの記載内容】

赤色立体地図は、アジア航測の特許技術(特許第3670274号)であり、急斜面ほど彩度を高く、凸部ほどより明るく、凹部ほどより暗く表現した地図で、大地形から微地形までを立体的に表現できるものです。

※この地図は、国土地理院の5mおよび10mメッシュ(標高)DEMで作成した陸域部と海上保安庁のM7000(1m等深線)を用いて20mDEMで作成した海域部を合成したものである。

## 流域圏懇談会について、フリーコメント

事務局では、かつて、前調査課係長の服部さんが「今までの会議スタイルを、形にこだわらずに壊していってみよう!」という試みを進められ、実際に少しずつほぐして、メンバーの方と話しながら改良してきた。ここに集まる人たちの、いわばフラットな関わり合いをサポートする形だった。そして、この関係性が継続できていることが不思議であり面白い。事務局補佐としては、仕事だけど、いかに人に寄り添うか?を考えてきたし、これからもそのように進めたいと思う。

現代の仕事にありがちな効率とはすなわちタスクをこなすことであるので、「楽しい」とは対極にある。「楽しい」が起点にないと継続は難しく、フラットな関係性をつくりにくくする原因となるのではないかとも思う。

懇談会の事務局補佐を務めることで、これまで想像もできなかったような多彩な人たちとの稀有な出会いがあり、とても 感謝している。このような仕事をもっと面白がることができたら、さらにもっと良い方向に向かうと思っている。

若いママたちが、「私は矢作川流域よ」「私は多摩川流域よ」などとおしゃべりする光景が普通になれば面白いと妄想する。流域でモノを考えることがオシャレと感じることができるよう、今後もいろんな発信をできたらと思う。





# 石原 淳 さん

(アジア航測(株) 中部国土保全コンサルタント技術部 環境課)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政(事務局

ヒアリング参加者 : 近藤 朗 レポート作成者 : 近藤 朗 取材日 : 2020年2月23日

取材場所 : メイホーエンジニアリング名古屋支店



### あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1978年生まれ、豊田市矢作川の右岸側・鵜の首あたりが故郷となる。高知大学(農学部生物資源科学科)で学ん でいたため、私にとっての川と言えば何といっても仁淀川。矢作川くらいしか知らなかった自分にとって、こんな綺麗な川が あるのかと感激したのを覚えている。その後、いったん種苗関係の民間企業に就職し(群馬県、広島県)、2008年に現 在のアジア航測に転職した。自然環境系の仕事がしたいという思いがあった。あれから約12年が経過し、自分の専門で ある植物を中心に、現地調査をはじめ、調査結果のとりまとめ、保全対策の検討等を主に行っている。

小学校高学年の時(1990年頃)、父親に連れられて海上の森に行ったのを覚えている。立木トラスト運動の頃で、そ の時に曽我部行子さんに出会ったことを強烈に覚えている。現在の矢作川流域圏懇談会の業務を通じて何十年かぶり に再び彼女に会うこととなり、これには驚いた。ちなみに、私は「とよた森林学校」の二期生でもあった(約10年前)。その 関係で、山本薫久さんや北岡明彦さん、足助里山ユースホステルの小川光夫さんとも出会っており、今回業務でまた繋 がることとなった。何か、因縁を感じる。

### あなたにとって、流域圏懇談会とは

当社アジア航測がこの業務(事務局補佐)を担うようになったのは、2015年度から。それまでは、別のコンサル(建設技 術研究所)が担当していた。最初はものすごく戸惑いが大きかった。懇談会では、山部会を担当することになったが、ここ からコンサルタント業務としては、想像を絶するような体験をすることになった。

山部会は4地域(岡崎市・豊田市・恵那市・根羽村)で泊まりで開催されることも多く、昼の会議以外にも夜ともなれ ば(あるいは明け方まで)、参加者が熱く本音で語り合う場面に遭遇した。その他にも2015年9月12日~13日にかけて、 長野県安曇野地方での現地見学(近自然の森づくり)を開催し、9月25日~26日にかけては、初めての山と海の合同 部会を実施。何よりも衝撃だったのは、この年の山村再生担い手づくり事例集調査において、近藤さんと共に根羽村 「天下杉」(96頁参照)に取材に行ったこと。行く前には、市民会議をどうやって盛り上げようとか、山部会と川部会の ギャップ・温度差に悩んでいたこともあり(川部会メンバーがどんどん去っていったことなど)、車中で近藤さんに相談を持ち 掛けていたのであるが、天下杉に出会ったことで、そこに答えを見つけたような気がした。

天下杉の70代のおばさまたちが、「まず自分たちが行動すること、そして自分たちが楽しまなければ、他人を喜ばすこと ができない」と言われたことが、私の心に突き刺さった。それから仕事においても、生き方についても、180度考え方が転換 した!自分が楽しんで、自発的に行動しようと。この懇談会の業務には、すごく思い入れがある。

今でも、山部会は凄いなと思うことがある。2019年度も、矢作川流域圏懇談会10年誌をどうしようと悩んでいたが、編 集会議をどうするのかという提案について、山部会でまずパッとまとまってしまった。 煩わしい作業になるであろうにもかかわ らず、編集委員候補者は誰もイヤだと言わなかったことにビックリした。まさしく自発的に、そして楽しもうとしてるんですよ。

### これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか?

「山村再生、及び流域圏担い手づくり事例集」を通じて、多くの関 わりが出来てきた。これから上下流で繋がりをつくっていけたら良い。そ の交流が普通にできたら、課題解決へとつながる。その基盤は今、既 にあるので、これからそれを活かそう。そのために今実施している担い 手交流会は、必ずやらねば!





フォーカス 2

# 事務局補佐交代年(2015) 衝撃の事件簿

10年誌編集委員 近藤 朗

懇談会事務局補佐の業務が、土屋さんをリーダーとする建設技術研究所からアジア航測へとバトンタッチされたのが2015年度のこと。実はこの2015年は、今になって考えると矢作川及び矢作川流域圏懇談会にとって大きな転換期となる象徴的な時期だったと気付かされる。そこで筆者から見たこの年の出来事について振り返ってみたい。

### ■矢作川「川会議」の終幕

まず、2015年5月9日に矢作川古鼡水辺公園で開催されたのが第15回矢作川「川会議」であり、この年をもって最終回を迎えた。この「川会議」は、ちょうど2001年が豊田市政50周年、矢作川漁協創立100周年、近自然工法による古鼡水辺公園整備着手から10周年、矢作川筏下り大会15周年という節目の年であったことから、豊田市などが呼びかけ開始された官民共同の場であり、第1回目が開催された2001年5月12日(東海豪雨被災翌年でもある)には、より良い矢作川流域を目指そうという「矢作川宣言」も採択されたのである。この「川会議」を中心とした豊田市、漁協、愛護団体、愛知県などの取り組みについては、第6章(②近自然時代)を参照いただきたい。



2015年5月 第15回矢作川「川会議」 写真右から石川氏、新見氏、今村氏、鈴木氏

川会議の終焉が意味するところが何なのかは更に深い考察を必要とするが、最終回に登壇したメンバーが興味深い。 川会議創設当時の豊田市長である鈴木公平氏(2000年~2012年在任)、矢作川漁協からは新見幾男氏ではなく 息子の克也氏(矢作川水族館)、そして矢作川流域圏懇談会からは山部会の今村豊氏(根羽村森林組合)、海部 会の石川金男氏(東幡豆漁協)が登壇し、「母なる川、矢作川のこれから」を議論している。世代継承や近自然時代 から新たな懇談会時代への転換を象徴していたのかもしれない。今思えば、である。

### ■流域圏懇談会の転換期へ

2015年は、矢作川流域圏懇談会自体も6年目(第2ステージの最終年)となり、大きな転換期を迎えていた。山・川・海の個別WGでの議論が進む一方、流域全体での課題意識共有は逆に遠ざかっていたと言えようか。この課題解決に向けて動き出したのが山部会であり、9月25日~26日にかけての山と海の合同部会を提唱した。これは懇談会として初めての試みであり、西尾市東幡豆地区にて現地視察も含め1泊2日で開催されたのである。訪れたトンボロ干潟は、矢作川の砂により造成された試験地、山・海の合同部会として、とてもふさわしい場所であり、2日間にわたって深い議論が展開された。



2015年9月 山·海合同部会 in 東幡豆

第3章各部会のふりかえりで蔵治座長が述べているように(30頁参照)、年4回は1泊2日のワーキングを実施するというのが山部会のスタイルであり、これは現在まで踏襲されている。2日間にわたり深い議論を進めること、さらに必ずフィールドワークを取り入れることにより、参加者全体の課題意識共有が深まる。この意義は極めて大きい。

さらに懇談会運営の大きなポイントは、これに参加するもの全てがフラットであるということ。これは第2章で中田慎さんが述べていることでもあるが(21頁参照)、意外と意識されにくいし、特に事務局側が難しい。この壁を打破するためにも山部会のスタイルは極めて有効であった。

ただし、継承していくことは決して容易ではないはず。実際、2015年に事務局補佐がアジア航測(アジ航)に代わり、事業対策官(事対官)も3代目の大森正昭さん(84頁参照)へとまるっと総替えされた時は、正直われわれも不安を覚えたものだ。何せ今まで前例のない極めて特殊な懇談会運営業務であり、アジ航の中田さん、石原さんは相当戸惑ったはずである。赴任したばかりの大森事対官も然り。しかしながら、彼らにはこれに堂々と向き合っていただいたと思う。2015年度の矢作川流域圏懇談会は各部会WG、市民会議から全体会議まで全部で26回開催されたのであるが、大森事対官は荒山林業視察(次頁参照)と日程が重なった海部会WG(9月13日)を除き、25回全てに出席され、山部会の宿泊まで全回同行されている。事務局なので当然と言えば当然なのかもしれないが、「思い」がなければ出来ないことであろう。「国の河川事業にとって必要な場(本章85頁)」の言葉が本心だとわかる。

### ■山部会の自主視察企画

山部会は、2015年9月12日~13日にかけて長野県安曇野市、大町市へと林業視察に訪れている。当地は矢作川流域ではないが、安曇野市中房温泉に根羽スギを使った浴室が設置されたこと、大町市で展開している荒山林業が近自然の森を創出していることから、これら先進的な取り組みを学びに行ったものである。矢作川流域圏を飛び出し、多くの学びを求めたのも2015年が転機である。

この視察に参加したのは、豊橋河川事務所より大森事対官、山部会蔵治座長、山部会メンバー、愛知県から清水雅子主査(河川課)と私(近藤)、事務局補佐の石原氏というメンバーであった。特に公式な場ではなく、あくまで有志参加という構成がさらにフラットな場を生み出していたのかもしれない。

メインの視察は9月13日の荒山林業が実施する「近自然の森づくり」現場(大町市内)であり、荒山里利代表の案内によりその考え方を学んだ。私たちがいつもにまして深く語り合ったのが前日宿泊地の安曇野(中房温泉)であり、ここでの議論は建前もなしに全てをさらけ出していたと言える。大森さんや石原さんたちとも、真に心を許した瞬間だったのではないかとさえ思う。この表現は決して大げさではない。







中房温泉に設置された根羽スギの浴室



荒山林業の近自然森づくりの見学

### ■「天下杉」との出会いと気付き

「2015年度衝撃の事件簿」、とどめは、やはり山村再生担い手づくり事例集皿での根羽村「天下杉」取材。石原さんと私は、午前中に合流し、まずは天下杉の公演を観劇。抱腹絶倒の内容に床を叩きのたうち回っていた私の姿が彼女たちに大いに気に入られ、強制的に公演に引きずり込まれて参加。その後の取材まで長時間拘束されることとなり、気がつけば日はとっくに暮れていた。往復の車中で何時間、石原さんと懇談会のあるべき姿について語り合っていただろうか? 忘れられない記憶。

この取材後、天下杉の公演を2016年1月の山の地域部会、2017年4月の事例集交流会とで開催し、大変好評を博したのであるが、何故に流域圏再生の取り組み(担い手)の中でこの天下杉が重要であるのかを触れておきたい。彼女たちは山村の中にあっても高齢者の部類であるが、芸能活動のかたわら、自分たちよりも若い高齢者の介護をしている方もいる。その他様々な地域活動も展開していることは過去の事例集でも紹介した。

担い手の資格とは何か?「自分たちが楽しまなければ、他人を喜ばすことなんか出来ない」という石原明子代表の言葉が全てを表している。自分たちが行動しなければ何も変えられないとも。これが流域圏でのポイントとなる。これは正に山部会でのスタイルであり、やりたいことがあればまず自分たちが行動しよう、それを持続していくためには自らが楽しまなくては続かない。「楽しむ」という言葉を安易にとらえてはいけないと思う。かなり真剣にミッションに取り組まなければ、真の喜びは得られないことも経験上わかっている。

そのことを、懇談会を設立した溝口敏明さん(81頁参照)やその後の大森さんたちとも共有してきたのが、この矢作川流域圏懇談会10年のあゆみであった。この後も懇談会の時代を発展し継続させていくためには、建技・土屋さんの指摘にもあったように、流れによるルーティン化に任せず、各部会参加者、事務局、事務局補佐全ての不断の努力が必要であると気付かされたのである。そのためにも、この2015年度の出来事については、ことあるごとに思い返しておきたい。いかがだろうか?







# 第5章

# 担い手づくり事例集から



山部会が中心になって、山を元気にしたり、川や海を守っている団体 に取材して、その記録をまとめた「山村再生担い手づくり事例集」と 「流域圏担い手づくり事例集」を紹介するよ。

# 1. 担い手づくり事例集のふりかえり

### 10年誌編集委員 洲崎燈子・近藤 朗

### 事例集のミッション

- ① 現場に行って、直接、現場の人たちの苦悩や喜びや課題に 触れる → 生の声を引き出す!
- ② その生の声をみんなで共有しよう!
  - → 報告集に取りまとめ、矢作川流域圏懇談会のホーム ページにアップ
- ③ 課題をあぶり出す → 集い、知恵の交換をする

(2013年6月29日開催第9回山部会WG資料より)



### ◆事例集のあゆみ

山部会は2012年、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理した。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが、「人と山村の問題」である。中山間地の活性化を進め、これらの問題を解決に導く糸口として2013(平成25)年度から、矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体を取材し記録にまとめることで、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」づくりを開始した。事例集の前書きには、目指す流域の姿を次のように示した。

「この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。(山村再生担い手づくり事例集 前書きより)」

事例集発行の手順としては、矢作川流域で農業、 林業、林産業、定住支援などに関わる活動を行って いる団体を取材先としてピックアップし、山部会メ ンバーとその関係者が取材を行ってレポートを作成 した。取材に先立って事前検討会を実施し、取材後

### 事例集のあゆみ

発行年度	タイトル	調査団体数	備考
2013(H25)年度	山村再生担い手づくり事例集	21 団体(山:21)	
2014(H26)年度	山村再生担い手づくり事例集Ⅱ	21 団体 (山:17、川:2、海:2)	川・海の活動団体を取材先に加える
2015(H27)年度	山村再生担い手づくり事例集Ⅲ	22 団体 (山:18、川:2、海:2)	
2016(H28)年度	山村再生担い手づくり事例集 その後いかがお過ごしですか? プロジェクト	17 団体(山:17)	2013 年度の取材先を再取材
2017(H29)年度	流域圏担い手づくり事例集	19 団体 (山:12、川:6、海:1)	山村再生担い手づくり事例集交流会開催 (於・根羽村、2017.4.15) 冊子名を流域圏担い手づくり事例集に移行
2018(H30)年度	流域圏担い手づくり事例集Ⅱ	19 団体 (山:11、川:7、海:1)	流域圏担い手づくり事例集交流会 2018 開催 (於・佐久島、2018.4.14)
2019(R1)年度	(担い手づくり事例集のふりかえり)		流域圏担い手づくり事例集交流会 2019 開催 (於・岡崎市、2019.6.22)

は各自がまとめたレポートを持ち寄って読み合わせ を行い、感想や意見を述べ合う会も行ってレポート を編集し、冊子にまとめた。

当初より、いずれは取材対象を流域全体に広げたいという思いがあったため、2014年度は川や海の活動団体も取材先に含め、2015年度までに3冊の「山村再生担い手づくり事例集」が刊行された。

2016年度には、初年度に取材した複数の団体で活動に発展があったことに着目し、初年度の取材先に3年ぶりの再取材を行い、「山村再生担い手づくり事例集 その後いかがお過ごしですか? プロジェクト」としてまとめた。

2017年度には、事例集づくりを重ねていく中でできた人のつながりを深め、広めることを目指して、初めての「山村再生担い手づくり事例集交流会」を根羽村で開催した。また、取材先として川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、川部会や海部会のメンバーにも取材者としての参加を呼びかけ、冊子名を「流域圏担い手づくり事例集」と改めて刊行した。

2018年度は「流域圏担い手づくり事例集交流会 2018」を佐久島で開催し、「流域圏担い手づくり事 例集Ⅱ」を刊行した。2019年度は「流域圏担い手 づくり事例集交流会 2019」を岡崎市で開催し、事 例集づくりの成果をふりかえり、今後の方向性につ いて考える年とした。

### ◆流域再生プロジェクトの系譜

この事例集の取材方法は、2008年に環境省中部

地方環境事務所が始めた、生物多様性保全活動団体への取材方法を受け継いでいる。この取材は様々な人的交流を生み出すきっかけとなり、特に今まで希薄だった愛知・岐阜・三重県間の交流が進み、後に3県連携による「22世紀奈佐の浜プロジェクト(2012年~鳥羽市答志島海岸清掃)」、その他へと発展していった。

この取材の基本方針は「インターネットで拾える情報ではなく、現場に出向いてじっくり話を聞き、その成果を記録すること」「取材先の自慢話だけではなく悩んでいる部分、いわば"光と影"を記録すること」「話を聞く過程を大事にすること」といったことである。このような取材は、丹羽健司氏の「いい取材者は良質なセラピストである」という言葉が示すように、取材者だけでなく取材される側にも気付きをもたらす。

物書きのプロではない取材者たちは取材先とやりとりを重ね、編集会議でお互いのレポートについて意見を出し合い、一生懸命最終稿をまとめた。その結果、6冊の担い手づくり事例集には、心のこもった102篇の取材記録がまとまった。

### ◆取材による発見と事例集のこれから

取材を通じて大変多くの発見があった。例えば、 高齢者が独創的かつパワフルな活動を展開している 長野県根羽村、地域愛に裏付けられた活動が浸透し ている岐阜県恵那市、多数の若者が I ターンし、町 場の住民との交流も含め、極めて多数の多様な活動 が生まれている愛知県豊田市、長い林業の歴史に支

### 流域再生プロジェクトの系譜

	実施時期	調査団体	内容・テーマなど
I	2008 ~ 2010 年度 伊勢・三河湾流域圏再生調査 【環境省委託、助成事業】	72 団体	愛知・岐阜・三重/山・川・里・海 2009 年度 「営み」の視点を重要なテーマに 2010 年度 揖斐・長良川流域の地域、山村再生の事例を対象 として調査
П	2011 年度〜(継続中) 22 世紀奈佐の浜プロジェクト 【自主事業】	50 団体以上 (活動参加)	2011 年度 愛知・岐阜・三重の追跡調査、各県連携会議 2012 年度 奈佐の浜海岸清掃 スタート 2013 年度 3 県流域エクスカーション スタート
Ш	2013 年度〜(継続中) 山村再生担い手づくり事例集 流域圏担い手づくり事例集 【矢作川流域圏懇談会 山部会】	102 団体 (~ 2018 年度まで)	2010 年度 矢作川流域圏懇談会 開始 2013 年度 山村再生担い手づくり事例集調査スタート 2017 年度 流域圏担い手づくり事例集調査に移行

えられている愛知県岡崎市といった地域特性である。また、取材対象が山村から流域圏に広がったことで、新しい発想や切り口で水辺空間を活用し、地域の活性化につなげる取り組みが紹介されるようになったことも注目に値する。

取材を受けた側が翌年取材者として事例集づくりに参加したり、流域圏懇談会のメンバーになったり、取材者と取材先が意気投合してコラボレーション企画が生まれたりといった、新しい交流も生まれた。当初は山部会の活動として発足した事例集づくりだったが、川と海の関係者が取材者と取材先の双

方に増えていったことで、懇談会で課題となっている部会間の連携を進めることにもつながった。

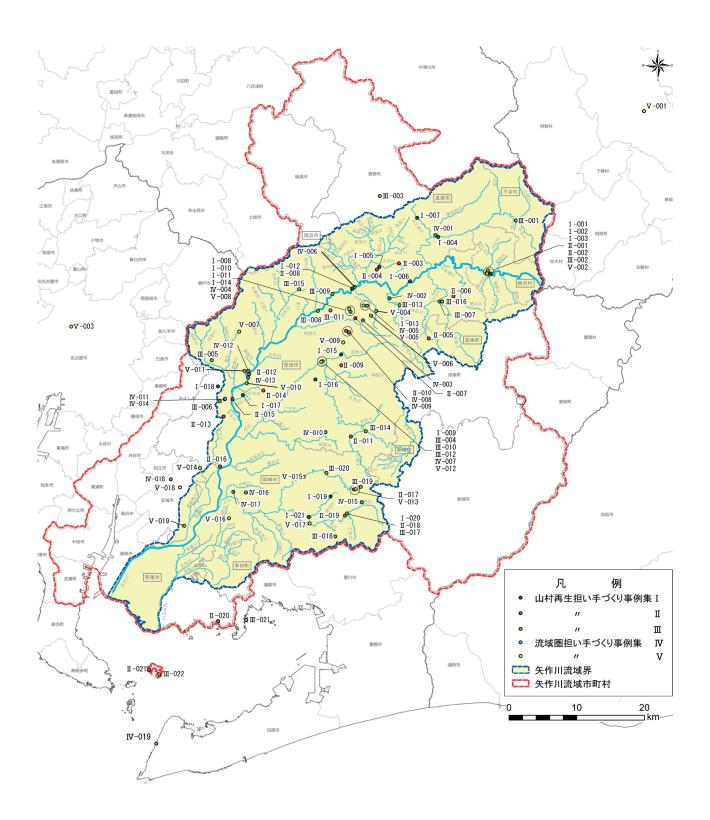
この事例集づくりを通じ、持続可能な流域づくりに関わる団体がこれほど多く存在し、新たに誕生し続けていて、活動内容もきわめて多彩であることを発見できたのは大きな、うれしい驚きだった。全てのレポートから、地に足のついた、身近な人びととつながる暮らしの中で得られる幸せを感じ取ることができる。ここに紹介された人びとの活動は、きっとどこの流域でも応用することが可能な、たくさんの示唆にあふれている。

### 事例集取材先団体(2013~2018年度)

				山部会	川部会	海部会
1	山村	根羽村	根羽村森林組合	0		
2	山村	根羽村	ねば杉っこ餅 → 農事組合法人 杉っ子	0		
3	山村	根羽村	根羽村猟友会	0		
4	山村	恵那市	恵南森林組合	0		
5	山村	恵那市	串原林業 → 串原農林	0		
6	山村	恵那市	NPO 法人 奥矢作森林塾	0		
7	山村	恵那市	NPO 法人 福寿の里自然倶楽部	0		
8	山村	豊田市	矢作川水系森林ボランティア協議会	0		
9	山村	豊田市	とよた森林学校	0		
10	山村	豊田市	とよた森林学校 OB 会	0		
11	山村	豊田市	とよた都市農山村交流ネットワーク	0		
12	山村	豊田市	豊森なりわい塾	0		
13	山村	豊田市	株式会社 M-easy	0		
14	山村	豊田市	旭木の駅プロジェクト	0		
15	山村	豊田市	千年持続学校	0		
16	山村	豊田市	おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局	0		
17	山村	豊田市	green maman	0		
18	山村	豊田市	農業生産法人 みどりの里	0		
19	山村	岡崎市	NPO 法人 中部猟踊会・三州マタギ屋	0		
20	山村	岡崎市	岡崎森林組合	0		
21	山村	岡崎市	おおだの森保護事業者会	0		
22	山村Ⅱ	根羽村	木の駅ねばりん実行委員会	0		
23	山村Ⅱ	根羽村	きくの会	0		
24	山村Ⅱ	恵那市	山のハム工房 ゴーバル	0		
25	山村Ⅱ	恵那市	三宅林業	0		
26	山村Ⅱ	設楽町	たけうち牧場	0		
27	山村Ⅱ	豊田市	アンティマキ	0		
28	山村Ⅱ	豊田市	てくてく農園	0		
29	山村Ⅱ	豊田市	あさひ若者会	0		
30	山村Ⅱ	豊田市	あすけ里山ユースホステル	0		
31	山村Ⅱ	豊田市	新盛里山耕流塾	0		
32	山村Ⅱ	豊田市	近藤しいたけ園	0		
33	山村Ⅱ	豊田市	こいけやクリエイト	0		
34	山村Ⅱ	豊田市	アグロ・プエルタ	0		
35	山村Ⅱ	豊田市	とよたプレーパークの会	0		
36	山村Ⅱ	豊田市	NPO 法人矢作川森林塾		0	
37	山村Ⅱ	豊田市	矢作川水族館		0	
38	山村Ⅱ	岡崎市	じさんじょの会	0		
39	山村Ⅱ	岡崎市	額田林業クラブ	0		
40	山村Ⅱ	岡崎市	宮ザキ園	0		
41	山村Ⅱ	西尾市	東幡豆漁業協同組合			0

				山部会	川部会	海部会	
42	山村Ⅱ	西尾市	佐久島 Oyaoya cafe もんぺまるけ			0	
43	山村Ⅲ	平谷村	飯伊森林組合平谷事務所	0			
44	山村Ⅲ	根羽村	天下杉	Ö			
45	山村Ⅲ	恵那市	夕立山森林塾	0			
46	山村Ⅲ	豊田市	おいでん・さんそんセンター	0			
47	山村Ⅲ	豊田市	野外保育とよた森のたまご	0			
48	山村Ⅲ	豊田市	農村舞台アートプロジェクト実行委員会	0			
49	山村Ⅲ	豊田市	稲武山里体験推進協議会	0			
50	山村Ⅲ	豊田市	老人福祉センターぬくもりの里	0			
	山村Ⅲ	豊田市		0			
51			あさひ森の健康診断 あさひ薪づくり研究会	0			
52	山村Ⅲ	豊田市		0			
53	山村Ⅲ	豊田市	有間竹林愛護会		0		
54	山村Ⅲ	豊田市	あすけ聞き書き隊	0			
55	山村Ⅲ	豊田市	山里センチメンツ	0			
56	山村Ⅲ	豊田市	しもやま再来るプロジェクト	0			
57	山村Ⅲ	豊田市	コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯	0			
58	山村Ⅲ	豊田市	first-hand	0			
59	山村Ⅲ	岡崎市	額田木の駅プロジェクト	0			
60	山村Ⅲ	岡崎市	日近太鼓	0			
61	山村Ⅲ	岡崎市	鳥川ホタル保存会		0		
62	山村Ⅲ	岡崎市	岡森フォレスターズ	0			
63	山村Ⅲ	蒲郡市	蒲郡市漁場環境保全協議会			0	
64	山村Ⅲ	西尾市	島を美しくつくる会			0	
65	流域	恵那市	なつかしい未来の会	0			
66	流域	豊田市	NPO 法人 あさひ	0			
67	流域	豊田市	農家民宿ちんちゃん亭	0			
68	流域	豊田市	敷島自治区	0			
69	流域	豊田市	合同会社 木かんしゃ	0			
70	流域	豊田市	小渡セイゴ水辺愛護会	-	0		
71	流域	豊田市	足助きこり塾	0			
72	流域	豊田市	株式会社 山恵	Ö			
73	流域	豊田市	めえープルファーム	0			
74	流域	豊田市	里楽暮住しもやま会	0			
75	流域	豊田市	矢作川天然アユ調査会	Ü	0		
76	流域	豊田市	矢作川漁業協同組合中和支部		0		
77	流域	豊田市	古鼡水辺公園愛護会		0		
78	流域	豊田市	橋の下世界音楽祭実行委員会		0		
79	流域	岡崎市	ぬかた体験村	0			
80	流域	岡崎市	有限会社ファナビス	0			
81	流域	岡崎市	NPO 法人岡崎まち育てセンター・りた		0		
82	流域	安城市	NPO 法人森を再生する会	0			
				0			
83	流域	田原市	環境ボランティアサークル亀の子隊			0	
84	流域Ⅱ	飯田市	天竜川鵞流峡復活プロジェクト		0		
85	流域Ⅱ	根羽村	根羽川漁業協同組合		0		
86	流域Ⅱ	愛知県	愛知・川の会		0		
87	流域Ⅱ	豊田市	つくラッセル	0			
88	流域Ⅱ	豊田市	正晴会	0			
89	流域Ⅱ	豊田市	伊熊営農クラブ	0			
90	流域Ⅱ	豊田市	NPO 法人マル ベリークラブ中部	0			
91	流域Ⅱ	豊田市	すぎん工房	0			
92	流域Ⅱ	豊田市	畦道	0			
93	流域Ⅱ	豊田市	岩本川創遊会		0		
94	流域Ⅱ	豊田市	豊田土地改良区資料室		0		
95	流域Ⅱ	豊田市	故原田裕保さんを偲んで	0			
96	流域Ⅱ	岡崎市	一般社団法人 奏林舎	0			
97	流域Ⅱ	岡崎市	間伐こもれび会	0			
98	流域Ⅱ	岡崎市	ウッドデザインパーク株式会社	0			
99	流域Ⅱ	岡崎市	有限会社オフィス・マッチング・モウル			0	
100	流域Ⅱ	岡崎市	ぬかたブランド協議会	0			
101	流域Ⅱ	安城市	内藤連三氏の人となり		0		
102	流域Ⅱ	安城市	矢作川くだり実行委員会		0		
				79	17	6	102

# 2. 流域圏(山村再生)担い手づくり事例集 取材先団体 活動マップ



# 担い手づくり事例集 活動団体

長野県飯田		Ⅲ -014	しもやま再来るプロジェクト
V -001	天竜川鵞流峡復活プロジェクト	Ⅲ -015	コレカラ商店
	伊那郡平谷村	Ⅲ -016	ファーストハンド
Ⅲ -001	飯伊森林組合平谷事務所	IV -002	NPO 法人あさひ
	伊那郡根羽村	IV -003	農家民宿ちんちゃん亭
I -001	根羽村森林組合	IV -004	敷島自治区
I -002	ねば杉っこ餅	IV -005	合同会社 木かんしゃ
I -002	根羽村猟友会	IV -006	小渡セイゴ水辺愛護会
II -003	木の駅ねばりん実行委員会	IV -007	足助きこり塾
II -001	きくの会(菊の会)	IV -007	株式会社 山恵(やまけい)
III -002	天下杉	IV -008	株式云社 田忠(やまりい) めえープルファーム
V -002	根羽川漁業協同組合	IV -010	型楽暮住(りらっくす)しもやま会
岐阜県恵		IV -010	生栄養性(りりつくり)しもやま云 矢作川天然アユ調査会
	恵南森林組合		大作用スペノユ調査会 矢作川漁業協同組合中和支部
I -004		IV -012	
I -005	串原農林(旧串原林業)	IV -013	古鼡水辺公園愛護会
I -006	NPO 法人 奥矢作森林塾	IV -014	橋の下世界音楽祭実行委員会
I -007	NPO 法人 福寿の里自然倶楽部	V -004	つくラッセル
II -003	山のハム工房 ゴーバル	V -005	正晴会
II -004	三宅林業	V -006	伊熊営農クラブ
Ⅲ -003	夕立山森林塾	V -007	NPO 法人マルベリークラブ中部
IV -001	なつかしい未来の会	V -008	すぎん工房(すぎんこチーム)
	<b>設楽郡設楽町</b>	V -009	畦道
II -005	たけうち牧場	V -010	岩本川創遊会
愛知県名		V -011	豊田土地改良区資料室
V -003	愛知・川の会	V -012	故原田裕保さんを偲んで
愛知県豊田		愛知県岡崎	崎市
I -008	矢作川水系森林ボランティア協議会	I -019	NPO 法人中部猟踊会・三州マタギ屋
I -009	とよた森林学校	I -020	岡崎森林組合
I -010	とよた森林学校 OB 会	I -021	おおだの森保護事業者会(山留舞会)
I -011	とよた都市農山村交流ネットワーク	II -017	じさんじょの会
I -012	豊森なりわい塾	II -018	額田林業クラブ
I -013	株式会社 M-easy	II -019	宮ザキ園
I -014	旭木の駅プロジェクト(実行委員会)	Ⅲ -017	岡森フォレスターズ
I -015	千年持続学校	Ⅲ -018	鳥川ホタル保存会
I -016	おむすび通貨(一般社団法人物々交換局)	Ⅲ -019	額田木の駅プロジェクト
I -017	green maman	Ⅲ -020	日近太鼓
I -018	農業生産法人 みどりの里	IV -015	ぬかた体験村
II -006	アンティマキ	IV -016	有限会社 ファナビス
II -007	てくてく農園	IV -017	NPO 法人岡崎まち育てセンター・りた
II -008	あさひ若者会	V -013	一般社団法人 奏林舎
II -009	あすけ里山ユースホステル	V -015	ウッドデザインパーク株式会社
II -010	新盛里山耕流塾	V -016	有限会社オフィス・マッチング・モウル
II -011	近藤しいたけ園	V -017	岡崎市ぬかたブランド協議会
II -012	こいけやクリエイト	愛知県安地	
II -013	アグロ・プエルタ	IV -018	NPO 法人森を再生する会
II -014	とよたプレイパークの会	V -014	間伐こもれび会
II -015	NPO法人矢作川森林塾		明治用水土地改良区矢作川沿岸水質保全対策協議
II -015	矢作川水族館	V -018	明石用小工地以及区大作川石序小員休主刈東協議会・矢水協
Ⅲ -010	おいでん・さんそんセンター	V -019	矢作川くだり実行委員会
III -004	野外保育とよた 森のたまご	愛知県蒲和	
III -005	農村舞台アートプロジェクト	変和宗浦和 Ⅲ -021	新郡市漁場環境保全協議会 「
III -006	展刊舞台ノートノロンェクト 稲武山里体験推進協議会		
III -007	相以口里体駅推進励議会 老人福祉センターぬくもりの里	図和県田/ IV -019	
III -008	有間竹林愛護会	愛知県西原	環境ボランティアサークル亀の子隊
Ⅲ -010	あさひ森の健康診断	II -020	東幡豆漁業協同組合
Ⅲ -011	あさひ薪づくり研究会	II -021	佐久島 Oyaoya cafe もんぺまるけ
Ⅲ -012	あすけ聞き書き隊	Ⅲ -022	島を美しくつくる会
Ⅲ -013	山里センチメンツ		

I: 山村再生担い手づくり事例集 I (2013 年度)、II: 山村再生担い手づくり事例集 II (2014 年度)、II: 山村再生担い手づくり事例集 II (2015 年度)、IV: 流域圏担い手づくり事例集(2017 年度)、IV: 流域圏担い手づくり事例集 II (2018 年度)

# 3. 事例集取材先団体 活動カテゴリー

以下の表に事例集取材先団体の活動カテゴリーを示した。「価値観の転換」カテゴリーに該当するのは、新しい社会的価値観を打ち出したとして特に注目した団体である。

								Α	В	С	Е	
				山部会	川部会	海部会	価値観	第一次	生物資	食品加	自然環	
							の転換	産業	源活用	工・販	境整備•	
										売	保全	
1	山村	根羽村					*	0				
2	山村	根羽村	ねば杉っこ餅 → 農事組合法人 杉っ子	0						0		
3	山村	根羽村	根羽村猟友会	0					0	0		
4	山村	恵那市	恵南森林組合	0				0				
5	山村	恵那市	串原林業 → 串原農林	0				0				
6	山村	恵那市	NPO 法人 奥矢作森林塾	0					0		0	
7	山村	恵那市	NPO 法人 福寿の里自然倶楽部	0								
8	山村	豊田市	矢作川水系森林ボランティア協議会	0							0	
9	山村	豊田市	とよた森林学校	0								
10	山村	豊田市	とよた森林学校 OB 会	0								
11	山村	豊田市	とよた都市農山村交流ネットワーク	0								
12	山村	豊田市	豊森なりわい塾	0								
13	山村	豊田市	株式会社 M-easy	0			*	0				
14	山村	豊田市	旭木の駅プロジェクト	0					0			
15	山村	豊田市	千年持続学校	0								
16	山村	豊田市	おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局	0								
17	山村	豊田市	green maman	0								
18	山村	豊田市	農業生産法人みどりの里	0				0				
19	山村	岡崎市	NPO 法人 中部猟踊会・三州マタギ屋	0					0			
20	山村	岡崎市	岡崎森林組合	0				0				
21	山村	岡崎市	おおだの森保護事業者会	0							0	
	山村Ⅱ	根羽村	木の駅ねばりん実行委員会						0			
	山村Ⅱ	根羽村	きくの会	0								
		恵那市	山のハム工房 ゴーバル	0						0		
_	山村Ⅱ	恵那市	三宅林業	0				0				
_	山村Ⅱ	設楽町	たけうち牧場	0				0				
	山村Ⅱ	豊田市	アンティマキ	0						0		
_	山村Ⅱ	豊田市	てくてく農園	0				0				
_	山村Ⅱ	豊田市	あさひ若者会	0								
_		豊田市	あさり石省会	0							0	
	山村Ⅱ	豊田市	新盛里山耕流塾	0							0	
	山村Ⅱ		が厳しいたけ園					0				
		豊田市		0			*					
							×	0				
	山村Ⅱ											
	山村Ⅱ		とよたプレーパークの会	0								
_	山村Ⅱ		じさんじょの会									
$\rightarrow$	山村Ⅱ	岡崎市	額田林業クラブ	0				0				
	山村Ⅱ	岡崎市	宮ザキ園	0				0		0		
_	山村Ⅲ		飯伊森林組合平谷事務所	0				0				
_	山村Ⅲ		天下杉	0								
_	山村Ⅲ		夕立山森林塾	0								
	山村Ⅲ		おいでん・さんそんセンター	0								
_	山村Ⅲ	豊田市	野外保育とよた森のたまで	0								
_	山村川		農村舞台アートプロジェクト実行委員会	0								
_	山村Ⅲ		稲武山里体験推進協議会	0								
	山村Ⅲ		老人福祉センターぬくもりの里	0								
	山村Ⅲ		あさひ森の健康診断	0								
_	山村Ⅲ		あさひ薪づくり研究会	0					0			
54	山村Ⅲ	豊田市	あすけ聞き書き隊	0								
	山村Ⅲ	豊田市	山里センチメンツ									

<sup>※</sup> 左の数字は 101 ~ 102 頁の事例集取材先団体の番号と対応

F 環境教	G 白然環	H 移住定	l 人材	力 次世代	K 都市農	L 地域の	M 福祉	N 観光	O 宿泊業	P 飲食業	Q 建物	R 家旦・	S 地域文	T アート・	U 意識	合計
		住促進			山村交		114111	12070	III/II/K	Z Z Z Z Z		1	化継承		改革	
然体験						き強化						づくり		デザイ		
														ン		
											0	0	0			4
													0			2
																2
																1
0		0											0			5
0								0								2
0			0													2
0			0													2
		0		0	0											3
			0										0			2
			0			0										2
						0					0					1
															0	1
0				0	0											3
							0									2
																1
																1
						0										2
										0			0			2
																1
										0						2
												0				2
																1
						0										1
0		0			0				0				0			4
																1
					0									0		2
						0										2
0				0	0	0			0							2
																1
																2
																1
														0		1
0		0	0	0	0	0							0			2 6
0				0												2
													0	0		2
0													0			2
							0									1
0				0		0										2
													0			1
															0	1

								Ι				
				.1.57.	11127 🛆	`/	/TT /= /=D	A >=	B	C	E	
				山部会	川部会	海部会						
							の転換	産業	源活用	工・販	境整備•	
										売	保全	
56	山村Ⅲ	豊田市	しもやま再来るプロジェクト	0					0			
57	山村Ⅲ		コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯	0				0		0		
58	山村Ⅲ		first-hand	0					0			
59	山村Ⅲ		額田木の駅プロジェクト	0					0			
60	山村Ⅲ	岡崎市	日近太鼓	0								
62	山村Ⅲ	岡崎市	岡森フォレスターズ	0								
65	流域	恵那市	なつかしい未来の会	0				0	0			
66	流域	豊田市	NPO 法人 あさひ	0								
67	流域	豊田市	農家民宿ちんちゃん亭	0			*					
68	流域	豊田市	敷島自治区	0								
69	流域	豊田市	合同会社 木かんしゃ	0					0			
71	流域	豊田市	足助きこり塾	0					0		0	
72	流域	豊田市	株式会社 山恵	0					0	0		
73	流域	豊田市	めぇープルファーム	0							0	
74	流域	豊田市	里楽暮住しもやま会	0								
79	流域	岡崎市	ぬかた体験村	0								
80	流域	岡崎市	有限会社ファナビス	0								
82	流域	安城市	NPO 法人森を再生する会	0							0	
87	流域Ⅱ	豊田市	つくラッセル	0			*					
88	流域Ⅱ	豊田市	正晴会	0				0	0			
$\overline{}$	流域Ⅱ	豊田市	伊熊営農クラブ	0				0				
	流域Ⅱ	豊田市	NPO 法人マル ベリークラブ中部	0					0	0		
91	流域Ⅱ	豊田市	すぎん工房	0						0		
	流域Ⅱ	豊田市	畦道	0								
95	流域Ⅱ	豊田市岡崎市	故原田裕保さんを偲んで	0				0	0		0	
96 97	流域Ⅱ 流域Ⅱ	岡崎市	一般社団法人 奏林舎 間伐こもれび会						0		0	
98	流域Ⅱ	岡崎市	向収ともれび伝   ウッドデザインパーク株式会社						0		0	
	流域Ⅱ	岡崎市	クッドナッインバーン株式芸社	0								
100	<b>/ルキ太 11</b>		08万10001									
36	山村Ⅱ	豊田市	NPO 法人矢作川森林塾		0		*				0	
	山村Ⅱ		<b>矢作川水族館</b>		0		*					
			有間竹林愛護会		0				0	0	0	
61	山村Ⅲ		鳥川ホタル保存会		Ŏ						0	
70	流域	豊田市	小渡セイゴ水辺愛護会		0						0	
75	流域	豊田市	矢作川天然アユ調査会		0						_	
76	流域	豊田市	矢作川漁業協同組合中和支部		0			0			0	
77	流域	豊田市	古鼡水辺公園愛護会		0						0	
78	流域	豊田市	橋の下世界音楽祭実行委員会		0		*					
81	流域	岡崎市	NPO 法人岡崎まち育てセンター・りた		0		*					
84	流域Ⅱ	飯田市	天竜川鵞流峡復活プロジェクト		0		*		0	0	0	
85	流域Ⅱ	根羽村	根羽川漁業協同組合		0			0				
86	流域Ⅱ	愛知県	愛知・川の会		0							
$\overline{}$	流域Ⅱ	豊田市	岩本川創遊会		0		*				0	
	流域Ⅱ	豊田市	豊田土地改良区資料室		0			0				
$\overline{}$	流域Ⅱ	安城市	内藤連三氏の人となり		0						0	
102	流域Ⅱ	安城市	矢作川くだり実行委員会		0							
	山村Ⅱ	西尾市	東幡豆漁業協同組合			0		0			0	
42	山村Ⅱ	西尾市	佐久島 Oyaoya cafe もんぺまるけ			0	*					
63	山村Ⅲ		蒲郡市漁場環境保全協議会			0		0			0	
64	山村Ⅲ	西尾市	島を美しくつくる会			0						
83	流域	田原市	環境ボランティアサークル亀の子隊			0					0	
99	流域Ⅱ	岡崎市	有限会社オフィス・マッチング・モウル	70	17	0	*	2.1	10	1.1	20	
			合計	79	17	6	13	24	19	11	20	
			102									

<sup>%</sup> 左の数字は 101  $\sim$  102 頁の事例集取材先団体の番号と対応

F 環境教 育・自 然体験			l 人材 育成	育成	山村交	L 地域の 結びつ き強化	M 福祉	N 観光	O 宿泊業	P 飲食業			S 地域文 化継承		U 意識 改革	合計
								0						_		2
										0		0				3 2
						0										2
						Ŭ							0	0		2
														0		1
							0						0			3
0									0							2
						0										1
			0		0						0					2
			0													5 2
0																2
0		0											0			1 2
												0				1
																1
		0	0			0							0			4
					0	0	0									3
																2
																1
							0									1
0																3
												0				3
0									0	0						3
								0								I
																1
0																1
																3
0						0										2
	0															1
																2
						0							0	0		1 3
								0						0		2
						0		0								3 2 5 1 2 2 2
0	0															2
0																2
						0										2
						0		0								1 2
0													0			4
						0				0						2
						0							0			2
0																2 2 2
						- 10	_		0	_		_		0		2
23	2	6	8	6	9	18	5	6	4	5	4	5	18	7	2	

# 4. 事例集から見た矢作川流域年表

凡例

河川・流域圏での動き 山での大きな動き

海での大きな動き

ניוט		
	大規模災害	平成の大合併

設立年	Topics	NO	地域	団体	Key Person	山	Ш	都市	海	震災	構成	Key Word
1820 頃		40	岡崎市(額田)	宮ザキ園	梅村篤志	0					企業	農業(茶)
1902		76	豊田市(豊田)	矢作川漁業協同組合 中和支部	大津建男		0				組合	漁業
1934		85	根羽村	根羽川漁業協同組合	西尾竹司	0	0				組合	漁業
1950		41	西尾市(幡豆)	東幡豆漁業協同組合	石川金男				0		組合	漁業
1951	2009 今村豊 職員に	1	根羽村	根羽村森林組合	今村豊	0					組合	林業
1960 頃	2007 ネバーランド 内に獣肉処理施設	3	根羽村	根羽村猟友会	西尾竹司	0					地元	
1969	矢作川沿岸水質保全対				I	_						
1971	(-75)	26	設楽町	たけうち牧場	竹内通王	0					企業	
1972	(昭和)47 災 豊田市	5、小	原村、藤岡町な	どで甚大な被害	15-1							
1973	内藤氏、矢水協出向	101	矢作川流域	内藤連三氏の人となり	故内藤連 三、天野博	0	0	0	0		協議会	2001 逝去
1976		43	平谷村	飯伊森林組合 平谷事務所	鈴木元	0					組合	林業
1976		39	岡崎市(額田)	額田林業クラブ	山本恵一	0					地元	木の駅 P 参加
1978		25	恵那市 (串原)	三宅林業	三宅隆美	0					企業	
1980	2005 に山のハム工房へ	24	恵那市(串原)	山のハム工房 ゴーバル	石原潔	0					企業、   ターン	
1987	矢作川筏下り大会が開	開始さ	·れる ~2006	(20 回)								
1989	元年災豊田市(旭)、恵南で甚大な土砂災害											
1990	建設省より「多自然型	型川口	づくりの推進」	<u>通達</u>								
1991	矢作川古鼡水制工が	整備、	以降豊田市内を	を中心に本格的な多自然型川づくり		いる	(『≡	-[	1ツ/	近	自然紀行。	])
1992		44	根羽村	天下杉	石原明子、 石原みちゑ	0					地元	芸能集団
1993		77	豊田市(豊田)	古鼡水辺公園愛護会	村山志郎		0				地元	水辺愛護会 の先鞭
1994		60	岡崎市(額田)	日近太鼓	吉口照波	0					地元	伝統芸能
1994	2010 鳥川小廃校	61	岡崎市(額田)	鳥川ホタル保存会	松田直人		0				地元	2012 廃校 校舎活用へ
1994	豊田市矢作川研究所設	设立										
1995	阪神淡路大震災(1/1	7)										
1996	アートで島おこし開始	64	西尾市(一色)	島を美しくつくる会	鈴木喜代司				0		地元(唐 +最近。	島民全員) よそもの
1996	豊田市矢作川環境整備	計画	i策定(1996.3 A	<b>3</b> )								
1996		75	豊田市	矢作川天然アユ調査会	新見克也		0		0		地元 (釣り人)	
1997	河川法改正(河川環境	竟の傷	全を目的化、消	可川整備計画の策定等)								
1998		30	豊田市(足助)	あすけ里山ユースホステル	小川光夫	0					ターン	
1999		99	岡崎市(岡崎)	有限会社 オフィス・マッチング・モウル	内藤美和、 池田ちか	0		0	0		地元+ よそ者	佐久島アー ト
1999		2	根羽村	ねば杉っ子餅	石原みちゑ	0					地元	地元農産加 工品販売
1999	5 森林組合合併	4	恵那市(恵南)	恵南森林組合	大島徳雄	0					地元、 I ターン	
1999		80	岡崎市(岡崎)	有限会社 ファナビス	稲垣光成	0					企業	がら紡
1999		83	田原市	環境ボランティアサークル 亀の子隊	鈴木吉春				0		地元	海岸清掃

 $<sup>\</sup>times$  NO は 101  $\sim$  102 頁の事例集取材先団体の番号と対応

2000		50	豊田市(旭町)	老人福祉センターぬくもりの里	永井晴彦、 下平枝里奈	0					行政、 協議会	地域に開か れた施設へ
2000		21	岡崎市(額田)	おおだの森保護事業者会	浅井董亮	0					地元	
2000		38	岡崎市(額田)	じさんじょの会	荻野昌彦	0					地元	地域再生
2000	東海豪雨(9/11) 「矢作川川会議」が古	- 出った	コハミズフカー	. k								
	「大TF川川云硪」から					_					地元+	
2001		71	豊田市(足助)	足助きこり塾	丹羽健司	0					よそ者	森トピア
2001		102	安城市	矢作川くだり実行委員会	深津修、 大屋守、 野村佳奈子		0				地元	
2002		82	安城市	NPO 森を再生する会	神谷輝幸	0		0			都市・上 流交流	水源地再生
2003		86	愛知県全域	愛知・川の会	近藤朗		0				///////////////////////////////////////	流域連携
2003	矢作川「環境漁協宣	三」系	きまされる									
2003	2009~旭町へ移住	13	豊田市(旭町)	株式会社 M-easy	戸田友介	0					よそも の 若者	
2003		27	豊田市(稲武)	アンティマキ	村田牧子	0					ターン	
2004	0005 44 + 02+=0	35	豊田市(豊田)	とよたプレーパークの会	小黒敦子			0			親子	± = 55 ±= 5 W
2004	2005 ~ 14 森の健診 恵那市合併(10/25)	8	矢作川流域	矢作川水系森林ボランティア協議会	丹羽健司	0						森の健康診断
2004	豊田市合併 (4/1)	200	 )5 愛・地球博	第8回全国「川の日」ワークショッ	 vプ on 午作III	典日	日市に	カで	開催			
	初代豊田市森林課長	95	豊田市	故原田裕保さんを偲んで	故原田裕保	O	וכוים	0	T)  E		行政	2018 逝去
2005		66	豊田市(旭町)	NPO 法人あさひ	山内貞、 矢田亜弥	0					地元	障碍者支援
2005		49	豊田市(稲武)	稲武山里体験推進協議会	村瀬登美	0					地元	どんぐり工房
2005		19	岡崎市(額田)	NPO 中部猟踊会・三州マタギ屋	日浅一	0					地元	
2006	岡崎市合併(1/1)			~ 岡崎市水環境創造プランの策定								
2006		81	岡崎市 (岡崎)	NPO 岡崎まち育てセンター・りた	天野裕、 三矢勝司		0	0			U ターン 若者	乙川、新し い公共
2006		90	豊田市	NPO マルベリークラブ中部	藤澤秀樹	0		0				桑の活用、 都市交流
2006	2015「ヒトトキ」立上	58	豊田市(稲武)	first-hand	松島周平、和美	0				•	ターン	
2006		45	恵那市 (山岡)	NPO 夕立山森林塾	佐藤大輔	0					111.—	森の健康診断、木の駅
2006	705++-7 5#	6	恵那市(串原)	奥矢作森林塾	大島光利	0					地元+	よそもの受
2006	この年をもって、矢作名自然利用づくりから			)る (宝 20 回)   へ 基本指針の発表 (国土交通省	<u> </u>							
	ジロ派王川フマッカー				ĺ						地元	串原農林へ
2007		5	恵那市(串原)	串原林業	三宅大輔	0					若者	ヘボ
2007	2011   + 11 +	23	根羽村	きくの会	田中きく江	0					地元	葬儀会食
2007	2014 ときめきプラ ン改定	68	豊田市(旭町)	敷島自治区	鈴木正晴	0					地元	活性化、 定住促進
2007		37	豊田市	矢作川水族館	阿部夏丸		0	0			地元 若者	
2007		17	豊田市	green maman	宇角佳笑、 中根佳子、 小黒敦子、 小松昌世			0			地元 主婦	
2008		18	豊田市	農業生産法人みどりの里	山中勲、 野中慎吾	0		0			企業	
2008		94	豊田市(豊田)	豊田土地改良区資料室	達志保、 古川彰		0				改良区	枝下用水 130 年誌
2008		20	岡崎市	岡崎森林組合	眞木宏哉	0					組合、 地元、 I ターン	
2008	平成20年8月末豪雨		崎などで甚大な									
2008		11	豊田市	とよた都市農山村交流ネットワーク	山本薫久	0		0				ナコズれ海
2008		31	豊田市(足助)	新盛里山耕流塾	鈴木智	0		0				エコでお洒 落な里山暮 らし
2008		70		小渡セイゴ水辺愛護会	鵜居利行		0				地元	竹林整備と 竹の活用
2008	愛知県(三河湾)のフ	アサリ	リの漁獲量ピーク	ク(約1万9千 t /愛知県水産試験	食場)							

設立年	Topics	NO	地域	団体	Key Person	山	Ш	都市	海	震災	構成	Key Word
2009~	生物多様性条約 COP1 ~ 矢作川流域圏懇談会	0 に 会「担	関わる (矢作川 記い手づくり事例	含む)伊勢湾流域全体を対象とし7 別集」調査へ継承	た流域圏活動	調査	を開		(環境		まじめ)	
2009	水産海洋学会「伊勢・3 ~伊勢湾の水質はかな	三河湾 り改善	の環境と漁業を きされたが、逆に	考える」(12月) 沿岸・海域・魚類の多様性が損なわ	れている 一多	様性	のあ	る海	を回	復す	る必要が	ぶある
2009			豊田市	豊森なりわい塾	中川恵子	0		0				
2009~	今村豊氏が根羽村森林 2011 木かんしゃ庄司知	相合	の職員に、南木が足助へ、唐澤	一美氏が根羽村移住、M-easy 旭和 とのである。 とのでは、2014	多住もこの年か	ら、	20	10ヒ	1	+松	島夫妻だ	が稲武へ、
2009		42	西尾市 (一色)	佐久島 OyaoyaCafe もんぺまるけ	神谷芝保			0	0		ターン	
2009		63	蒲郡市	蒲郡市漁場環境保全協議会	伊藤幸昌				0		漁協、 協議会	アマモ再生
2009	(国)矢作川水系河川	整備記	十画策定(7月)									
2010	2019 活動拠点確保!	47	豊田市(豊田)	野外保育とよた 森のたまご	遊佐美絵	0		0			お母さん	森のようちえん
2010		48	豊田市	農村舞台アートプロジェクト実行 委員会	かとうさとる	0		0			Artist	アート・ 文化・交流
2010		36	豊田市(豊田)	NPO 矢作川森林塾	硲伸夫		0	0			地元	矢作川河畔 林整備
2010		9	豊田市	とよた森林学校	北岡明彦	0						
2010		10	豊田市	とよた森林学校 OB 会	山本薫久	0						
2010		16	豊田市(足助)	おむすび通貨(一社)物々交換局	吉田大	0		0				
2010		54	豊田市(足助)	あすけ聞き書き隊	河合友理	0						取材者は県 内各地
2010	矢作川流域圏懇談会が	バスタ	ート (8/28)	2010 生物多様性条約 COP10 愛知	1・名古屋で開	開催						
2011	東日本大震災(3/11)											
2011	西尾市合併(4/1)						1					+44 1
2011		33	豊田市+根羽	こいけやクリエイト	西村新	0	0	0			若者	耕 Life デザイン
2011		14	豊田市(旭町)	旭木の駅プロジェクト	高山冶朗	0						木の駅
2011		28	豊田市(旭町)	てくてく農園	横江克也• 晴菜	0						おすそ分け
2011		53		有間竹林愛護会	原田茂男		0				地元+ 奥さん	竹林整備と 竹の活用
2011		32		近藤しいたけ園	近藤圭太	0					脱サラ	
2011		7	恵那市 (上矢作)	NPO 福寿の里自然倶楽部	横光八洲男	0					地元	アライダシ 原生林
2011		15	豊田市	千年持続学校	高野雅夫	0		0			移住	
2011	矢作川流域圏懇談会 流海ツアー (7/2) 山ツ	流域て /マー	<sup>™</sup> の「矢作川の≦ - (9/27)	全て」バスツアー(9/23 ~ 9/24) アー(1/9、2012.12/14) 2012 ~	を実施 . 山郊会は押せ	hΤ⊼Ε	旦/出					
2012	ケー (7/2) 田り 矢作川水系総合土砂管			7 (1/9, 2012.12/14) 2012/	山砂云は現れ	R C B	刊惟					
				 した「22 世紀奈佐の浜プロジェク	ト」の開始							
2012				の顕在化 流域圏懇談会では2		参加	]				地元、	
2012		78	豊田市(豊田)	橋の下世界音楽祭実行委員会	永山愛樹		0	0		•	若者、よそもの	川は実験場
2012		34	豊田市	アグロ・プエルタ	藤本浩幸	0		0			若者	食と農を楽しむ
2012		56	豊田市 (下山)	しもやま再来るプロジェクト	木下貴晴、 川合寿佳	0		0			地元	下山をサイ クルパラダ イスに
2013	矢作川流域圏懇談会・	山部	会において「山	村再生担い手づくり事例集」調査が	ゲスタート 20	017	より	「流	域圏	担し	手づくり	事例集」に
2013	2009 南木、根羽移住	22	根羽村	木の駅ねばりん実行委員会	南木一美	0					地元、   ターン	木の駅
2013	2011 小原村移住	57	豊田市 (小原)	コレカラ商店・コレカラ農園・ コレカラご飯	水澤孝司	0				•	l ターン (震災)	農・食・ 暮らし
2013		55	豊田市 (旭町)	山里センチメンツ	安藤順	0					地元	山里のモラ ハラ対応
2013		29	豊田市(旭町)	あさひ若者会	鈴木啓佑、 戸田友介	0						担い手育成
2013		46	豊田市	おいでん・さんそんセンター	鈴木辰吉	0		0			行政	まちといな かを繋ぐ
2013		72		株式会社山恵	小澤庄一、 鈴木良秋	0					企業	獣肉有効活 用
2013		74	豊田市(下山)	里楽暮住 (りらっくす) しもやま会	倉地雅博	0					地元	定住促進
2013		62	岡崎市(額田)	岡森フォレスターズ	南條清二	0		0	ライ	ブ	若者	森の盛り上 げ隊

<sup>%</sup> NO は 101  $\sim$  102 頁の事例集取材先団体の番号と対応



新しい生き方・価値観が求められる

2019

2020

2020

矢作川筏下り大会が復活(5/5 試行)

矢作川流域圏懇談会 10 年を迎える

新型コロナウイルス感染拡大







# 新たなステージへ



たくさんの人が、流域でつながり、環境を守ろうと活動してきた矢作川。 その歴史をふりかえってみたよ。それから、「担い手づくり事例集」 づくりを通じて見えてきた新しい動きを見渡しながら、みんなが幸せに 暮らせる持続可能な流域づくりについて考えたよ!

# 1. 矢作川流域圏での運動・活動の歴史と流れを考える

10年誌編集委員 近藤 朗

# 1 公害。矢水協時代

矢作川流域圏での調査(102 団体)を通じて、今までの大きな流れを考えてみる。担い手づくり事例集調査の前身となる伊勢湾流域圏調査では、名古屋など都市を中心とした活動に「営みの視点」が欠けていたが、矢作川では原点となる矢水協の活動が営農者、漁業者の「営み」の視点から始まったものであり、都市部とは背景が大きく異なる。

1960年頃より流域の開発が大きく進み、乱開発により矢作川の白濁化は顕著となる。全国的にも公害問題が深刻化した時代(高度成長期 1955~1970頃)。このため水の受益者である農業団体、漁業団体、利水市町村による矢作川沿岸水質保全対策協議会(矢水協)が設立されたのは1969年のこととなる。

- 主要公害と環境法令の整備/1910年代~イタイイタイ病、1956~熊本水俣病、1960~四日市ぜんそく、1964新潟水俣病、1967公害対策基本法制定、1969矢水協設立、1970(公害国会)水質汚濁防止法制定
- 大規模河川施設の構築/<u>連続性の分断による河川環境、土砂収支の変化、河床アーマー(鎧)化など</u> 1926 ~ 百月、越戸など水力発電ダム、1958 明治用水頭首工、1970 矢作ダム
- 公共事業反対運動 / 1958 ~ 1970 先駆けとなる筑後川流域 下筌ダム・松原ダム反対運動(蜂の巣城闘争)、 1966 ~ 新空港建設・成田闘争、1973 水源地域対策特別措置法施行(蜂の巣城闘争を受けて)
- 災害等イベント/ 1955 ~ 1970 頃 高度成長期、1959 伊勢湾台風、1964 東京オリンピック、1970 大阪万博







1958年~下筌ダム「蜂の巣城闘争」



1970 年完成 矢作ダム



# 【1】1970年代~ 矢水協時代 「流域は一つ、運命共同体」の提唱へ

矢水協は、漠然と汚水・濁水をたれ流し続ける開発者に対して毅然と対抗する流域連合体であり、1976 年には愛知県との紳士協定を締結、「開発に伴う事前の矢水協協議」をルール化した(=「矢作川方式」)。これは全国的にも例を見ない先進的な取り組みであり、流域内での「環境に配慮した開発のあり方」に大きく寄与した。

50年を経て、開発者に対する監視・指導を続ける矢水協の意義は今なお大きいが、2001年に内藤連三事務局長が逝去されたこと、さらに流域圏での水質や環境保全の問題は土砂流出や濁水のみならず多岐に及んできており、新たな課題解決の場が求められている。

- 矢水協による上下流連携の推進と支援体制の確立/
  - 1971 矢作川流域開発研究会(矢流研)設立「流域は一つ、運命共同体」を提唱(開発者側組織)、1973 一色町漁協婦人部が「矢作川をきれいにする会」設立、1976 豊田市西広瀬小学校児童会が水質観測開始「矢作川の見張り番」と呼ばれる(〜現在まで連続観測継続)、1976 愛知県と矢水協が紳士協定を締結(対決から協調へ)、以降、山(平谷村等)と海(一色等)との上下流交流も促進する、1986 開発者(建設業界)による支援組織として矢作川環境技術研究会を設立、1991 矢水協の仲介により、根羽村と安城市が「矢作川水源の森」分収育林事業契約を締結
- 流域下水道事業の展開/ 全国で流域下水道事業への反対運動が展開され、境川はその先鞭となる。 愛知県で最も早く計画されたのは境川であるが、結果的に最初に供用されたのは 1980 年の豊川流域。ただし境川流域で の反対運動と議論は、全国の流域下水道事業に多大な影響を与えた。 1971 境川流域下水道事業認可、1972 刈谷市元刈谷地区農地への重金属汚染が発生、1973 境川流域下水道に対して本格
  - 1971 境川流域下水道事業認可、1972 刈谷市元刈谷地区農地への重金属汚染が発生、1973 境川流域下水道に対して本格的な反対運動始まる、1978 愛知県が話し合いの打ち切りを通告、1981 農地に対して行政代執行(土地収用)、1984 大幅な計画変更を受け入れる(工場排水入れず)、1989 境川浄化センターの供用開始、1992 矢作川浄化センターの供用開始
- 災害等イベント / 1972 札幌(冬季)オリンピック、1972 小原・藤岡災害(S47 災害)、1973 第 1 次オイルショック、1981 名古屋オリンピック(1988 年夏)誘致失敗、1983 頃~ 三好ヶ丘ニュータウン計画のため境川大改修、1987 国鉄民営化~ JR へ、1988 頃~ バブル経済始まる、1989 H 元年災害(恵南・東加茂(旭町)豪雨)

# 2)近自然時代

# 【2】1990年~ 近自然時代「川を市民に取り戻そう」(豊田市、矢作川漁協を中心として)

1990年頃からの流れは、豊田市・矢作川漁協などを中心に新しい取り組みを創っていく。国(当時建設省)と愛知 県が管理する矢作川ながら、豊田市は矢作川環境整備計画を策定すべく、1991年2月に検討委員会を設立、1991年 夏にヨーロッパの近自然工法、川づくり視察へと向かい、帰国後実践していった。愛知県は矢作川古鼡にて水制工群 による川づくり、及び河畔林伐採による空間整備も行い、ここは後に「古鼡水辺公園」として親しまれることになる。 この後、豊田市内では、古鼡を皮切りにいくつもの水辺愛護会が誕生していった。

「一つの流域には、一つの研究所(博物館)を」との提言により、1994年「豊田市矢作川研究所」が誕生する。当初 は豊田市、矢作川漁協、枝下用水土地改良区の利害(相反)関係者が出資する画期的な第3セクターの形態であったが、 後に豊田市河川課の一組織となる。研究所もこの時代、センター機能・流域シンクタンク機能を果たし、様々な取り 組み(「古鼡プロジェクト」、「天然アユ調査会」等)を展開していた。一方、愛護団体は沿川では広がるものの都市域 を含めた流域全体にまでは及ばない(地先主義)、そもそも行政を含めおじさんたちの活動が主体で、当初の熱い思い、 勢いが衰えていった(継承されない)感は否めない。2001 年 5 月 12 日に「矢作川・川宣言」と共に始めた矢作川「川 会議」が 2015 年を最後に終結、また我々のシンボルだった「古鼡水辺公園」が最近(2018年)閉鎖されたことが極 めて象徴的な事件であった。豊田市の市民、漁協、行政が特に熱かった時代は、「矢作川筏下り大会」が開催されてい た時期(1987~2006年、20回)とほぼ重なることに気が付いた。偶然ではなかろう。



矢作川 古鼡水制工・水辺公園



矢作川「川会議」



● 河川法改正へ/ 1990 頃 建設省・関正和氏が『大地の川』『天空の川』を著す 1990 建設省が「多自然型川づくりの推進について」を全国に通達 1991 豊田市矢作川環境整備計画検討委員会設立、同年欧州視察へ

(『ヨーロッパ近自然紀行』新見幾男 参照)

1991 ~ 愛知県が初の多自然型川づくりとして矢作川・古鼡にて水制工群設置、県河 川課は全事務所に対し多自然改修推進を指示・主導する。豊田市は、加納川、太田川、 そして児ノ口公園の近自然工事へ

1994 ~ 愛知県豊田土木事務所は、矢作川に続き、籠川、逢妻女川(柳枝工)、仁王川、 市木川、飯野川(魚道)などで多自然型川づくりを展開する

1997 河川法改正 治水・利水に加え「河川環境」を目的に追加

1998 東京大学・高橋裕氏『河川にもっと自由を』出版

1999 河川審議会「パートナーシップによる河川管理」提言される

2006(国) 多自然型川づくりから「多自然川づくり」への展開、基本指針策定

- 豊田市、漁協、研究所が主体となった取り組み/ 1993 古鼡水辺公園愛護会、 1994 矢作川研究所設立、1996 天然アユ調査会、2001 矢作川「川会議」、 2003 矢作川「環境漁協宣言」、2006 最後の矢作川筏下り大会
- 矢作川水系の河川計画/ 1998 矢作川河口堰建設事業休止(後に中止)、 2006 岡崎市・額田町合併後、愛知県が男川ダム事業を現整備計画から除外
- 災害等イベント / 1991 ~ 1993 バブル崩壊、1993 ~ 2004 頃 就職氷河期、 1995 阪神・淡路大震災、2000 東海豪雨、2001 省庁再編、2005 愛知万博、 2005 郵政解散(小泉政権)、2008 H20 年 8 月末豪雨、2008.9 月 リーマンショック、 2009.7 月 民主党政権誕生 (~ 2012)、2010 (愛知・名古屋) CBD/COP10、 2011 東日本大震災・津波



矢作川筏下り大会 2006



200252003 党漁協宣言へ 100年誌

# 3 流域圏の転換期

- 平成の大合併 / 1999 恵那 5 森林組合合併、2004 恵那市、2005 豊田市、2006 岡崎市、2011 西尾市
- 地域の新たな取り組み/1996(佐久島) 島を美しくつくる会、2000(岡崎) じさんじょの会、2005(岡崎) 猟踊会、2006(恵那・串原) 奥矢作森林塾、2007(豊田) 矢作川水族館(阿部夏丸)、

2010 (豊田) 矢作川森林塾、とよた森林学校、2011 (恵那) 福寿の里

□ 特にめざましい女性たちの活躍 /

1990 (根羽) 天下杉、1999 (根羽) ねば杉っこ餅、

1999 佐久島アートプロジェクト (オフィス・マッチング・モウル)、

2004(豊田)とよたプレーパークの会、

2005 (旭) NPO あさひ・すぎん工房、2006 奥矢作森林塾(大島初美)、

2007 (根羽) きくの会、(豊田) green maman、2009 (佐久島) 神谷芝保



根羽村・天下杉







(岡崎) オフィス・マッチング・モウル

佐久島の神谷芝保さん

萩野 NPO結の家・梅プロジェクト

- 森の健康診断、木の駅などによる新たな森づくりの展開 / 2004 矢森協・森の健康診断 (2005 ~ 2014)、 2005 原田裕保氏、初代豊田市森林課長に、2011 ~ 流域圏各地で木の駅、森の健康診断が展開される
- ●若者たち、よそ者たちの流入・移住・活動開始/

1998 (足助) ユースホステル 小川光夫、2001 (佐久島) オフィス・マッチング・モウル (OMM) 受託開始、

2003 M-easy (2009 移住)、アンティマキ、2006 (岡崎) りた・天野裕、2007 串原林業・三宅大輔 (U)、

2009 (根羽村森林組合) 今村、南木、(佐久島) もんぺまるけ神谷芝保 (後に移住)、(旭) 戸田移住、

2012 (豊田) 橋の下世界音楽祭開始、2014 (額田) 唐澤晋平夫妻

1990~2010(近自然)時代では、2000年以降後半に広く流域圏内で様々な新しい動きが起きていたことが分かる。とりわけ山村において若者たちなどの移住・流入が始まっていて、その動機は多様であろう。価値観の転換は、国内の経済動向や大規模災害の影響も大きいと思われるが、バブル崩壊や就職氷河期、リーマンショックなどが移住の動機となっているのかどうかは分からない。ただ取材を通して、東日本大震災などを活動の動機としている方々は何人かいらっしゃった。(2012橋の下世界音楽祭、2013コレカラ商店、2015稲武・ヒトトキ、旭・木かんしゃ等)

「平成の大合併」も圏域 4 市(恵那市、豊田市、岡崎市、西尾市)で進んだ。とりわけ山村などでの行政サービスの考え方が重要な要素となり、その中で足りない役割を担う活動も展開されてきたと感じる(上矢作・福寿の里など)。山村への移住・定住促進を担うのが、恵那市串原の NPO 奥矢作森林塾(2006 設立)を筆頭にいくつか。里山の魅力を発信しながら、移住者への細やかな支援を展開している。豊田市での山村拠点となるコアセンターは、2013 年の次の時代まで待たなければならない(おいでん・さんそんセンター)。岡崎市は額田町との合併により、乙川流域圏全域を取り込めたのであるが、これを十分まちづくりに活かせるかどうかが今後の鍵となろう。

奥矢作森林塾(小林さん、大島さん) とサトノエキカフェ(恵那市串原)





サトノエキカフェにて 京都から移住された家族のお 子さんは、ここに来て人懐っ こくなったという



豊田市稲武の「ヒトトキ」



福寿の里が運営を任されている 恵那市上矢作の「モンゴル村」

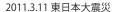
# 4 矢作川流域圏懇談会の時代へ

そしていよいよ、2010年8月に矢作川流域圏懇談会が始まり、さらに10年を経た。

# 【3】2010年~ 矢作川流域圏懇談会「山・川・海 流域一体で川づくり」(国交省豊橋河川事務所の運営)

懇談会が開始された初年度、2011 年 3 月に東日本大震災の衝撃が襲った。以降 10 年間、わが国は実に様々な災害が頻発し、2020 年現在も新型コロナウイルスの脅威が世界中を席巻している。これから大きく価値観や生き方が変わろうとしているのかもしれない。愛知県、矢作川流域ではこの間大きな災害が発生しておらず、逆に十分な危機感を持っておく必要もあろう。







2018.9.6 北海道胆振東部地震の爪痕



2020.GW 新型コロナ緊急事態宣言の下、ほとんど人がいない名古屋駅(金の時計)

- 災害等イベント/ 2011 年に東日本大震災が発生、価値観は変わったか ~その後頻発する大災害 2011.3.11 東日本大震災(死者等約2万人)、2011.9月紀伊半島豪雨(死者等98人)、2012 九州北部豪雨(白川、矢部川等 死者30人)、2014 広島豪雨土砂災害(死者77人)、2015 関東・東北豪雨(鬼怒川・小貝川決壊)、2016.4.14 熊本地震(死者・関連死含め約270人)、2017.7月九州北部豪雨(福岡県(朝倉市など)・大分県 死者40人)、2018.7月(広域)西日本豪雨(死者等270人 広島土砂災害、岡山・小田川等決壊、四国肱川等)、災害級猛暑(7月救急搬送5万人超、死者133人)、2018.9.6 北海道胆振東部地震(死者43人)、2019.10月台風19号・東日本豪雨(死者等94人阿武隈川、千曲川等決壊)、ラグビーワールドカップ、2020新型コロナ(COVID-19)禍(7月時点で死者約1,000人以上~継続中)、令和2年7月豪雨(死者等85人九州球磨川決壊、岐阜飛騨川等)
- 矢作川水系河川事業等の動き / 2009 矢作川水系河川整備計画の策定、2010 流域圏懇談会設立、 2015 安永川トンネル完成、2016 矢作古川分派堰完成~ 今後狭窄部である「鵜の首」改修(開削)へ
- 新たな市民による水辺活用・再生の動き / <u>活動の多様性と世代継承が進む</u> 2010 NPO 矢作川森林塾(硲伸夫氏) 竹林伐採は 2006 年から欠かさず継続、

2012 橋の下世界音楽祭 (永山愛樹氏) スタート、

2014 豊田大橋下にて「矢作川感謝祭」がスタート、2015 矢作川「川会議」が第15回で終了、

2015 乙川かわまちづくり(岡崎市)登録~ 乙川リバーフロント整備の推進(りた・天野裕氏)、

2017 ~ 岩本川創遊会 (2015 小さな自然再生に向けた WS)、

2017 ~ 第4回「矢作川感謝祭」から流域圏懇談会が参加、

2018 矢作川かわまちづくり(豊田市)登録、

逆にシンボルだった古鼡水辺公園が閉鎖される、

2019.5 月(新) 矢作川筏下り大会が試行される



乙川テラス



2019.4.29 乙川 川びらき



「川は実験場だ」

# (5) 矢作川流域圏の新時代







2019.5.5 矢作川の新たな筏下り大会を試行する新世代の面々

橋の下世界音楽祭もトヨロックも矢作川水族館も融合する

この 10 年での水辺での取り組みについては、橋の下世界音楽祭やミズベリング、かわまちづくりなど多様なアプローチにより従来にない多様な世代を巻き込むようになった。水辺の再生においても、行政主体ではない市民工事による「小さな自然再生事業」が 2015 年より岩本川で展開され、豊田市矢作川研究所がサポートすると同時に、外部から一般社団法人 Clear Water Project の若手たちが支援、新しい風を送り込んだ。一方でもう 10 年以上、矢作川の竹林を伐採し続け、良好な河畔林を創造する「矢作川森林塾」(硲伸夫代表)の存在も特筆しておくべきだろう。世代継承は重要だが、退職世代も負けてはいられない。やりたいことを諦めず、ずっと自分たちが楽しみながら活動していくのも多様性であり、根羽村・天下杉の女性陣たちと共に矢作川流域圏主役の双璧をなす。

山村においても、少し前に移住、活動を始めた若者たちなどが新たな動きを模索していく。M-easy(豊田市旭地区)の戸田友介氏は、2013 年に「あさひ若者会」を発足、2015 年に旭・小原地区で「戸田新聞店」を開業。山間地での「暮らしのシゴト」に目を向けていき、さらに 2018 年には旧小学校を活用した人材創造拠点「つくラッセル」を開設した。豊田市での山村拠点施設「おいでん・さんそんセンター(鈴木辰吉センター長)」は 2013 年に開設され、以降、様々な活動や支援を展開していく。根羽村森林組合の今村豊氏は、地元根羽杉を活用したツールを様々開発し、流域圏(いや、全国)展開を図るための「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を 2014 年から始め、各地を飛び回る。

2014年に岡崎市(額田)に移住した唐澤晋平夫妻は、額田木の駅などの活動を経て2018年「奏林舎」を設立した。なお、額田では2013年に岡崎森林組合バンド「岡森フォレスターズ」が結成されるなど、こちらも多様性豊かだ。

2005年に始まった「矢作川森の健康診断(矢森協主催)」は、丹羽健司氏の公約通り10年(10回)実施した後、2014年に終了した。2015年からは独自に「あさひ森の健康診断」が展開されるなど、丹羽氏がアドバイザーを担う「木の駅プロジェクト」同様、流域圏での広がり・展開を見せており、10年間の目標は達成できたと言えよう。今後は健康診断結果も踏まえ、各地域であるべき森づくりを模索するステップとなる。

- 山村での展開 / 2011 ~ 旭木の駅プロジェクト、2013 (豊田) <u>おいでん・さんそんセンター開設</u>、あさひ若者会、2013 ~ (根羽村) 木の駅ねばりん、2014 根羽村森林組合「スギダラキャラバン」スタート、2014 <u>矢作川森の健康診断が終了</u>、2015 あさひ森の健康診断実施、~額田でも2015 ~ 額田木の駅プロジェクト、2015 (旭) 農家民宿ちんちゃん亭オープン、(旭・小原) 戸田新聞店、2016 ~ (額田) 間伐こもれび会、2018 ~ (額田) <u>奏林舎</u>、(旭) <u>つくラッセル</u>開設
- 海での変化と展開/ 2009.12 月(常滑) 水産海洋学会地域研究集会「伊勢・三河湾の環境と漁業を考える」での提言

伊勢湾の水質はかなり改善されてきた。きれいになったとも言える。しかしながら、沿岸・海域の多様性が損なわれ、漁獲の多様性も失われつつある。私たちは、漁獲が少量でも多様性のある海を回復する必要があり、そのことを消費者である都市の人たちに理解してもらわなければならない。また、沿岸域の管理者などに護岸など水辺空間の多様性の確保につとめるよう働きかける必要がある。(三重県水産研究所より)

2012 新川西部浄化センターが供用され、愛知県内 11 全ての流域下水道が整備される、2014 この頃より豊かだった三河湾のアサリが大きく減少していく(原因特定できず)、2016 ダボス会議において海洋(プラスチック)ごみ、特にマイクロプラスチックの問題を提起、2017 ~ 矢作川、豊川浄化センターでの試験管理放流(TP)の実施 ~ 経過・効果観察中

三河湾では、2008 ~ 2012 年頃ピークだったアサリの漁獲量が、2014 年頃より急激に減少していく。海辺で見られる野鳥の数が激減しているとの報告も伊勢湾各地で聞かれる。海域の多様性が損なわれているのかもしれない。今後懇談会の役割は、健全な流域圏全体の指標としても海を見ていく必要があろうか。



# 2. 座談会~事例集をふりかえり、懇談会の未来を語る~

■日時:2020年7月22日(水)13~15時

■会場:名古屋市中区・NPO 法人「まちの縁側育くみ隊」事務所にて

■参加者: 洲崎燈子(山部会)、近藤 朗(川部会)、高橋伸夫(海部会)、沖 章枝(山部会・市民部会)、

中田 慎(事務局補佐:アジア航測)、浜口美穂(10年誌編集長)

■グラフィックレコーディング: 名畑 恵(まちの縁側育くみ隊 代表理事)

文中の(※)は、事例集取材先団体。詳細は豊橋河川事務所のホームページから閲覧できる。



#### 洲崎

これまで6冊の事例集を作ってきて、たいへん ユニークな活動をしている団体が多いことに驚かされました。それらの活動にはいくつか共通するキーワードや傾向があって、その辺を詳しく見ていくと、これからの流域づくりのヒントが見つかるんじゃないかと思いました。ただ、取材先団体は102団体もあり、多種多様で、誰か1人が総括するというのは非常に難しいから、座談会形式で行うことにしました。みんなでわいわいと、事例集づくりの思い出も語りながら、何が分かってきたのかということを探し、そして名畑さんにまとめていただきたいと思っています。

近藤さんが作ってくださった資料を参照しながら 進めていきたいと思います(115~119頁)。流域 圏懇談会の設立に先立つ流域の様々な動きも総括し てくださっています。

今日のテーマは四つ。一つ目は「<u>事例集づくりか</u>ら<u>見えてきたこと</u>」です。この6冊の事例集の発行を通じて、この流域で若者もしくは元若者が新しい活動を生み出して流域を元気にしていることが分かってきました。

それから2番目は「<u>新しい価値観</u>」。「新しい価値観」を地域に持ちこんだ取材団体がいくつもあり、この新しい価値観が流域を元気にしているということが分かったと思います。

3番目は「<u>センター機能の必要性</u>」ということです。様々な団体が流域を良くするために活動をしています。というか、様々な団体が地域を良くしようと活動していることが結果としてこの広い流域エリアを良くすることにつながっているんじゃないかなと思います。その中でセンター機能を持つ人や団体というものの重要性が増してきています。

そして4番目は「流域圏懇談会の次の10年に向けて」ということです。山、川そして里、海に関わることで都市はもっと魅力的になれるということで、都市の人を次の10年で流域圏懇談会に誘っていけないかというようなことが編集委員会の中で話題になりました。

まず皮切りに、座談会用の資料を作ってくださった近藤さんから、これをまとめてきた中でいろんな気付きがあったと思うので、お話しいただいてもよろしいでしょうか。



# ●矢作川に関わる活動、三つの時代

#### 近藤

懇談会の10年誌パイロット版(2020年2月の全体会議で配布)をまとめる時に二つの年表を作ったんですよ。一つは各部会で話し合って、アジア航測さんがまとめてくれた、海、山、川のこの50年ぐらいの歴史の年表。ただあの表を漠然と見ていてもよく分からない。もう一つ私が作ったのは、102の事例集の取材団体を年代別に並べたもの(109~112頁)で、時代を20年ぐらいずつ区切った。70年代から、90年代から、そして2010年から。その時に見えてきたのが、三つの時代の主流になっているもののネットワークの性格の違いなんです。

一つは矢水協時代。矢水協は、営農者や漁業者という「営み」を発端として水質の問題に取り組んだ。だから流域圏というすごい広いネットワークをつくったんですよ。ただ今から見たときの違いは、営農者、漁業者と、水を取っている自治体が主であって、セクターはそこに限られている。それで問題もはっきりしてて、対開発なんです。だからまとまりやすかった。でも、開発による河川の濁水対策を最重要テーマとしていた訳で、この課題は矢水協の活動成果そのものもあって、時代の流れとともに大きく変化してゆくのです。環境とか、水質の問題は濁りだけでなく、すごく多様化してきており、新たな枠組み・システムが必要になってきたと言えます。

その後、1990年代からは、豊田市が中心となった新たな川づくり(近自然工法など)をテーマとしたネットワークが創られていきます。ただその時代は流域圏という感覚がちょっと薄らいでいた。なぜかというと、豊田市という狭い範囲の矢作川という川のネットワークだったので、いわゆる地先主義、そのネットワークで終わっている。その後、豊田市が合併をして山までつながるんですけど、元気だった頃はまだ川だけ。

その中で唯一、アユを通して流域というものを見ていたのが矢作川漁協だったのだと思います。天然アユ調査会とか、漁協と矢作川研究所などが連携して海まで調査に行ったりとか。ただ問題は、今よりもう少し若く元気だったおじさんたちも、15年く

らい経ってくると高齢化が進む。元気だった役所の 人たちは退職期を迎え、それぞれの組織自体が次第 に熱気が失せ、閉鎖的になっていったような気がし ています。要は既存システム・組織の中で世代継承 がうまく進まなかったということでしょう。

ただ面白いのは、1990年からの20年間で、元気がなくなってきた頃に出てきた人たちがいて、それはおじさんたちではなくて、その間の「隙間」に入ってきた人たちですね。若い人たち。今日のテーマである「新しい価値観」というところですね。なので、この時代は知らないところでいろんなことが起きてきた時代です。

そういった時に、2010年、流域圏懇談会という 枠組みができた。これを立ち上げた中部地方整備局、 豊橋河川事務所がどこまで認識されているのか分か りませんが、これは明らかに次の一つの時代のネッ トワークを形成する画期的なセンター機能を創りあ げることになりました。

面白いのは、矢水協時代とか豊田時代と違って、 運営主体となっている豊橋河川事務所はその性格上 裏方に徹しており、運動としての主体的戦略を何も 持っていないこと。この10年やってきたのは、あ くまでもその構成となっている何十もの団体であっ たり、市民だったりで、それが無理矢理、豊橋河川 事務所を引っぱってここまで来た。それは悪いこと ではなくて、次の10年を考えるときに非常に重要 なことだと思います。

前の二つの時代と違って流域圏全体を見ているということと、セクターの種類がめちゃくちゃ増えている。森林組合だったり、海の漁協だったり。「多様性」というのが、これから大きなキーワードにな



矢作川流域圏懇談会 2011.9.23 ~ 24「源流から海まで、 2日がかりの『矢作川の全て』バスツアー」

ります。流域圏での課題がほとんど河川区域内では 解決できないことばかりだというのが、懇談会設立 の大きな動機であり、そのためにも多様なセクター、 人材が必要。そのことが見えてきたのがこの10年 であり、懇談会はその基盤を創ってきたのではない でしょうか。

# ●新しい価値観~地に足のついた山里の暮らし~

#### 洲崎

20年単位での変化があったというのが、すごい 分かりやすいですね。

2000年に入ったぐらいから、「若者たち、よそ 者たちの流入・移住・活動開始」というような新し い動きが出てきた。事例集の中でも「新しい価値観」 を持ちこんだ団体というのがあって、ちょっとその 記憶を呼び覚ましながら話してもらえますか。

例えば、根羽村森林組合(※)は高橋さんがレポー トを書いてくださいました。話を聞かれてどんな印 象でしたか。

# 高橋

とにかく根羽村というところが常識離れというか、 先進的なところでね。森林組合長が村長で、村の全 員が組合員。こういう社会構造になったところがあ ること自体が非常に新鮮でしたよね。そこで [ター ンで根羽村森林組合を引っぱっている今村豊さんが 活躍している。

## 洲崎

ちっちゃな長野県の最南端の村なのに、新しい人 を入れて、新しいアイデアを入れて、森林先進県の 長野の中でもめざましい活動をしてるっていうの は、すごいですよね。

続いて M-easy (※) は浜口さんがレポートを書 いてくださいました。

## 浜口

戸田友介さんは「里山の暮らし」というのにこだ わっておられた。地域に根ざしてどう暮らしていく か。レポートにも書いたんだけど、「当初はどう稼 ぐかということばかり考えていたが、地域のじい ちゃん・ばあちゃんから、どう暮らしていくかとい

うことが一番大切なんだと学ん だ」というのがあるんですね。

## 近藤

この「新しい価値観」という テーマで、特に括りってないん だけども、山の方では一つの テーマが森づくり、木づかいで、 山里の暮らしという括りの事例 戸田さんによる薪割り実演 もめちゃくちゃ多いと思うんで



す。山里の新しい暮らし、今の時代のあり方みたい なのはずいぶん進んだんじゃないかな。

# 洲崎

農業や林業がやりたいと田舎に来るよりは、田舎 の暮らしがしたい、もうちょっと地に足のついた、 生きてるって実感できる暮らしをしたいと思って来 ている人がすごく多い。根羽村の今村さんも、そう いうふうに入ってきた若い人を何とかつなぎとめた いということですごく頑張ってますよね。

# ●新しい価値観~「スキマ」に入り込む~

#### 洲崎

次はこいけやクリエイト(※)。これも高橋さん が取材してくださいました。

# 高橋

豊田市にも大きな広告会社がいっぱいある中で、 その「隙間」にすっと入っていろいろやってみえる。 大きな会社じゃできない、ちょうどいいところで若 い人が新しい意識でタウン誌を作ったりしている。 非常に地に足のついた仕事をしてみえる。それが豊 田市の役にも立っているというところに非常に感心 いたしましたね。



## 洲崎

こいけやさんのすごいところは、田舎の魅力をオシャレに楽しくまちの人に伝えるっていうことで、会社としてもそれを前面に打ち出して、何度もフリーマガジンの賞を取っている『耕 Life』を作ったりしている。センスが抜群に良くて、会社も若い女性ばっかりで、若い女性に訴求力のあるデザインとか PR ができるというのがすごいですよね。

戸田さんが立ち上げた旭地区の「つくラッセル」 (※) もそうですね。小学校の廃校を活用するアイデアは今いろいろ出ているんだけれども、地域再生の総合的なコンソーシアム兼シェアオフィスとかシェアカフェとかシェアスタジオとかというアイデアがすごいですよね。あと、古い校舎の建物をそのまま使っているんだけれども、内装を豊田市産材でやり直して、オシャレな空間をつくっている。そこで「あんじゃない」という地域のお年寄りの居場所をつくるサービスも始めていて、多角的に着々とやっています。

#### 洲崎

次に橋の下世界音楽祭(※)。これは私が初めて 見てノックアウトされた、最高にぶっ飛んでて魅力 的なお祭りです。豊田大橋の下にアングラ感満載の 音楽フェスティバルを自分たちの手づくりで、投げ 銭方式でやるというような、とんでもないことを実 現させてしまった。

一番すごいと思ったのは、矢作川では川の自然を 守る市民たちがずっと活動をしていたんだけれど も、そこに文化的・芸能的な楽しさというものをつ くり上げてみんなに PR するという、全く今までに ない発想で矢作川の良さを引き出してくれたという ところだと思います。多くの都市で、川というのが 宗教とか芸能活動とか風俗とかと結びついていると ころがあって、そういう川のちょっと彼岸に至るよ うな空間イメージであるとか、怪しい魅力というも のを、矢作川でやってしまったという抜群のセンス と実行力というものにノックアウトされましたね。

この事例集づくりが2013年から始まって、当初は山村地域で、山村を元気にしている主にIターンとか、若い人たちの活動を紹介するのがメインだったんだけども、6冊出していく中で、まちなかとか川とか、いろんな地域で、いろんな着眼点で、地域を面白く元気にしている人がたくさんいるというのが予想外に広がって、すごく新しい楽しい発見でした。

それでは次に、NPO 法人 岡崎まち育てセンター・りた(※)に関しても近藤さんがめちゃめちゃ気合いの入ったレポートを書いてくれました。

## 近藤

「りた」だけじゃなくて、私は伊勢・三河湾流域ネットワークの流域圏調査で実は矢作川水族館(※)の調査もしてるので、いわゆる二つ目の豊田時代を継承する流れについてまとめて説明させてください。

1990年からの豊田時代の中で、変わってきたのがこのあたりなんです。あの枠組みではなくて始まったのが矢作川水族館(2007年~)で、阿部夏丸さんという作家が地元のお母さんたちと一緒に移動水族館とかいろんなことを始めたんです。これも、後でテーマとして出てくる女性という役割がすごく大きくて。

矢作川森林塾(※)も、実は新しい流れ。でもこれは若い人じゃなくておじいちゃんです。珍しい例で、森林塾って書いてあるけど、これは森づくりじゃ

なくて、川づくり。

もう一つ、「隙間」というと ころに入り込んでくるのが大 事で、その隙間を矢作川研究 所がつくったのが岩本川創遊 会(※)。これは既存の団体が ある中でちょっと下の世代に つないだ活動なんですよ。た またまその二つの自治区の境 目に入り込んで。



橋の下世界音楽祭 (2017年)



岩本川創遊会。「小さな自然再生」の 概念・手法を取り入れた活動

#### 洲崎

ずっと地元のおじいさんたちが活動してた水辺愛 護会が二つあるその狭間のところに。

#### 近藤

隙間、ニッチに次の世代が入り込めたという例。 これも豊田時代から次の時代に行くところで、しか も行政のやる近自然河川工法ではなくて、「小さな 自然再生」という市民が非常にとっつきやすいのを やったのが岩本川創遊会の取り組みです。

#### 洲崎

90年代に近自然河川工法で大きな工事が行われて、今でもそれが残っているわけなんだけど、それと対照的に、自分たちの地元でちっちゃな市民ができる工事をやったというのがとてもシンボリックなのかもしれませんね。

# ●岡崎が元気に

#### 近藤

もう一つの流れとして、豊田の活動が下火になっていったのと同時に、逆に元気になっていったのが 岡崎なんです。それは岡崎市の合併ぐらいの頃なんですよ。土台としてあったのは、多分 2000 年頃からまちづくりの勉強会をやってたんです。 岡崎市って昔はすごい堅くて融通が利かないところなんですよ。ところが、知らないうちに下の世代の職員と、りたの天野裕さんとか三矢勝司さんが結託して、勉強会をやってきた時代がベースにあって、合併して市長が変わった時に、乙川を使ってまちづくりをするという乙川リバーフロントを始めた。そして、今すごい岡崎が元気になっている。

# 洲崎

行政と若い人が上手にコラボしてるっていうところなのかな、岡崎の元気な面白いところって。

#### 近藤

一つ面白かったのが、りたの天野さんと橋の下の 永山愛樹さんが同じことを言った。いわゆる隙間を 縫って川に入っていった2人が2人とも同じこと 言ったんですよ。「川は俺たちの実験場だ」と。そ



2020 年で 5 年目を迎える乙川ナイトマーケット (おとがワ!ンダーランド HP より)

の実験場というのは若者らしい。おじちゃんたちにはそういう発想はないので。あれね、全く別に聞いたのに2人ともおんなじこと言ったのがすごい象徴的な話だった。

#### 洲崎

岡崎市民の沖さんとしては、この 10 年ぐらいで、 そういう岡崎の変化を感じたことはありますか?

#### 沖

ずいぶん変わりました。でも私は山の方(額田地区)ばっかり行っててね、なかなか気が付かないできたんです。

#### 近藤

額田を見てる人は多分気が付かないと思う。豊田 もそうなんだけど、合併をした時に、山をどう扱う かというのがキモだと思っていて、それがちゃんと やれているかどうかというのをこれから検証して、 次にどうするかという話にいく。

#### 沖

そうですね。そこがすごく課題に思っているんですけどね。天野さんたちは結構上手に、川の祭りに、(額田の)宮ザキ園(※)さんやカフェ柚子木(ぬかた体験村※)さんたちを呼んで、家康祭りとかなんかをやっているんですけど、岡崎に住んでいる人は意外に(額田を)知らないで過ごしちゃってる。

#### 浜口

沖さんとぬかたブランド協議会(※)の取材に行きましたよね。すごく印象に残っているのは、今ま

では個人的にとか商工会だけとか、個々に活動してたのが、一つの交付金のもとに集まって、お互いの活動を話し合える場ができたっていうことがすごく大きなことだと。それまでは隣にいても何をしているか分からない状態だったらしい。今は地域で手を組んでやろうという思いが生まれ、楽しく意見を交わしながらいろんな部会が誕生しています。

# 洲崎

岡崎の動きとしては、間伐こもれび会(※)も。 前の森林組合長だった、すごく気むずかしかったは ずの人が、新しい人を入れて地域の山に手を入れる ことに協力をするようになったという、その気持ち の変わりっぷりが感動的だったという話をされてい ましたよね。

## 沖

ほんとに楽しさがこちらに伝わってくるんです。 今までは山にこもって、ご自分の山の手入れをして、 自分で林道をつくって、孤独なことをしてこられた のにね。

#### 洲崎

これもやっぱりこういう形の取材じゃないと、絶 対知ることができなかったことですよね。岡崎の動 きが、事例集づくりの中でこれだけ浮き上がってく るとは思わなかったです。

# 近藤

違いが浮きぼりだったのは、豊田が元気だった頃は行政主導だったじゃないですか。岡崎はどちらかというと、市民主導かなと見える。それに役所が乗っかってる。

まちはそれでうまくいっているけど、あと問題は 山の方。市長は「額田の木を使ってまちづくりを」 とかは言ってるんだけど、森づくりまではいってな いんじゃないかなと。

#### ● 巻き込み力がすごい!

# 洲崎

さて、がらっと話題のステージを変えまして、天 竜川鵞流峡復活プロジェクト(※)です。



2017.9.9 山部会勉強会。天竜川鵞流峡復活プロジェクトの 竹筏下りを体験

#### 浜口

ここの活動は、舟下りをする川の両岸にごみの不 法投棄があったり竹林が荒れていて景観が悪くなっ ているからなんとかしたいと、舟下り会社の船頭さ んたちが始めているんですよね。ただ当事者である 地元を巻き込まないと継続性がないという意識を 持って、地域を巻き込んでいった。そして、地域の 小学校とも連携してる。1年を通して竹林整備だけ じゃなくて竹筏遊びとか竹炭作りとか、ほんとにい ろんなことをしている。次世代を巻き込む視点もす ごくいいなあと。小学校の卒業式に曽根原宗夫さん たち中心メンバーが招かれたら、卒業生が制作した 絵が飾ってあって、竹林から舟で天竜川を漕いで中 学校に向かう絵だった。それを見て涙が出たという ような温かい交流がある。そういう展開が上手だなと。

# 洲崎

曽根原さんは、根羽村の今村さんが面白い男がいるから山部会に呼びたいって言って。それで連れてきたらめちゃめちゃ話が面白かったので、じゃあみんなで実際に竹筏下りに行こうと言って一昨年に実現した。

# 近藤

面白いのは、今村くんと曽根原さんはよく似てて、何がというと、どんどん思いついたことを実行に移して、それをどんどんやってしまって、それがどんどん展開していくという。それを誰も止められない。

# 洲崎

確かに巻き込み力がすごいね。そもそも竹林が荒れて伐りまくって、出まくった竹材をどうしようか

という中で、自分の勤めている会社で竹筏下りをツ アーにしちゃって、それを他の船頭たちがみんな賛 同してやっているのがすごい。

#### 浜口

伐った幼竹でメンマ作りもやってますよね。地元の女性加工グループに声を掛けて、おばちゃんたちの漬物づくりのノウハウをここに活かしてもらおうということで、やっぱり地元を巻き込んでいる。

#### 洲崎

曽根原さんの話を聞いて、つくラッセルに集う若者たちのグループも作り始めた。地域のモウソウチクを地元の人から買ってそれで作るっていう動きになっているんですよ。波及効果がすごい。

#### 沖

来年は岡崎でもメンマ作りをすることに。たまたま農協に関わった方がいらっしゃって、ハチクがたくさん出ると。伐りまくって、メンマ作りがしたいということで、今年、つくラッセルに勉強に行ったんです。

# ●田舎がオシャレでエレガントに

#### 近藤

聞いてて思ったけど、曽根原さんのとこもそうだけど、そういう取り組みによってそこのまち自体がすごい先進的にオシャレで楽しい場所に変わっていくんですよ。鵞流峡のところにもオシャレなゲストハウスがあったんです。どんどん今、山奥にケーキ屋さんとかパン屋さんとかいろんなもんができてきているじゃない。だからそういう魅力的な先進地に、山里とか佐久島みたいなところがなる可能性がある。



Oyaoya cafe もんぺまるけの取材風景



佐久島「おひるねハウス」。2018.4.14~ 15、事例集交流会で佐久島を訪問

#### 洲崎

では、佐久島に移りたいと思います。もんぺまる け(※)は近藤さんと浜口さんと私で楽しい取材を しに行きました。これもすごいぶっ飛んでいて、マ イ箸を普及させようと思ってチャリで日本 1 周旅 行をしていたしばちゃん(神谷芝保さん)が名古屋 に戻ってカフェで働いているうちに自分でもやりた くなって場所を探したら佐久島にちょうどいいとこ ろがあった。ぼろぼろの廃屋を建て直して、畑を作っ て、畑で作ったお野菜をおやつにして食べさせるの で Oyaoya cafe ってことでやったと。取材に行った 日にちっちゃなイベントをやっていて、名古屋とか から来た若い人や地域の人たちがイベントを運営し ていて、みんなすごい楽しそうだったですよね。だ から彼女も巻き込むのがすごい上手で、彼女がやり たいことと、周りの集まってくるみんながやりたい ことがマッチしているので、みんな喜んで彼女に協 力をして、彼女を核にして一つの空間、世界観をつ くっているのかなという感じがありましたよね。

佐久島というのは、取材をしてきた流域圏の中では一つ特異な存在だなということで編集委員会でも話題に上りました。オフィス・マッチング・モウル(※)も佐久島の島づくりに関わっている。その辺を近藤さんから。

# 沂藤

佐久島がモデルとしてすごい面白いのは、もともと漁師さん主体の閉鎖的な島で、離島の過疎地の振興として行政主導でアートによるまちづくりをやった。その前に「島を美しくつくる会」(※)っていうのを行政主導でつくったけど。それで外から入ってきた、岡崎のマッチング・モウルさんがアートでまちづくりを進めたけど、当然のことながら最初からうまくいったわけではないという話を盛んに言わ

れていた。島の人がそれをだんだん理解していったのは、多分、それによって効果としてほんとに島にどんどん人が来るようになって、渡船も黒字になったから。

ただマッチング・モウルのす ごいところは、割り切ってて、 「私たちの役割は島に交流人口 を増やすこと。定住者を増やすのは、地元の仕事」だと。だからこれを活かしてどうするかっていうのは、地元の人が考えなきゃいけないと言われたことがすごい印象的で。

### 洲崎

マッチング・モウルは、ものすごいポリシーがはっきり、しっかりしていて、そこの場所の良さを丁寧に探して見つけて、それをオシャレにエレガントに演出するっていうきめの細かいもの。この企業の経営理念というんですか、キーワードは「エレガントとまごころ」ということで、これが特異なんですよね。さっきのオシャレも全く一緒で、このオシャレとかエレガントっていう感覚は、2010年ぐらいからじゃないと表に出てきてないんですよね。

## 近藤

都会なら分かるけど、漁村、農村にその概念を持ちこんだ。

# 洲崎

エレガントな漁村って何?!って思うよね(笑)。 こいけやさんもそうで、一見オシャレとは全くかけ離れている田舎の風景や暮らし、営みをオシャレに可愛い写真とイラストとレイアウトでアピールするというね。このセンスがやっぱり新しく出てきたものですよね。

# ●「女性」&「楽しむ」

## 近藤

結局、定住者がそれほど増えているわけじゃないんだけど、しばちゃんが島に来て、その後も移住者がカフェを開いて「カフェ3人娘」とか呼ばれて。そういえば山村とかそういったところって、女性の移住者が多いよね。

# 浜口

女性は「楽しむ」っていう視点をすごく持っているんですよ。男性は儲けが出なきゃいけないとか、成果を上げなきゃいけないとかいうことに結構とらわれているように思う。でも女性は楽しめたらいいじゃないみたいな感じで。

## 洲崎

オシャレさみたいなことの演出を結構女性がやってるなと思ってたけど。女性は結婚したら否が応でも別のところに移り住んで、でもその中で楽しさを見つけるってことをやってきたからひょっとしてそれが上手なのかなと思ったりもして。

突然ですが、「女性」と「楽しむ」というキーワードで、次は根羽村の「天下杉」(※)に(笑)。

# 近藤

元祖だよね (笑)。

#### 洲崎

天下杉こそは、近藤さんが長年取材をしてきて最も強烈で最も衝撃を受けた、この事例集のエポックメイキングな。

#### 近藤

この資料を作る時に名言集も作りたかったんだけ ど、天下杉の「自分たちが楽しまなければ、人を楽 しませることなんかできない」ってすごい名言だと 思ってて。

## 洲崎

田舎のおばちゃんたちが、手作り感満載の仮装と 芸能で、見ている人たちを抱腹絶倒のるつぼに叩き 込むというカオスな芸が本当に素晴らしくって。そ もそも、市場にお豆腐とか出してみんなが喜んでく れるからもっと喜んでもらえることをしようと思っ て芸能活動を始めるっていう、その原因と結論の 間に乖離が甚だしくてよく分かんないんだけども (笑)。ほんとに自分たちが楽しみながら、人も楽し くさせて、あんなおばちゃんたち他にはいない。



まだ誰も見たことのない天下杉の幻のシンクロ 公演での1枚



# ●自立できる流域

## 浜口

根羽村にどうしてこういうグループができたんだろうと思って。

#### 高橋

根羽の役場へ行く途中にスーパーみたいなのがあるじゃない。あそこで飯も食えるんですよ。店で買ったものを持ってきて。食べてる間におまけがいっぱい、次から次へ持ってくる。田舎ってそれくらいサービス精神があって。ふるまいの心だね。そこらへんが天下杉のもとにあるんじゃないかなと。

#### 洲崎

天下杉とわりとメンバーがかぶっている「きくの会」(※)っていう、お葬式の料理を仕出しするおばちゃんたちのグループがあって、そこもサービス精神というかね、葬儀を地域の人たちでやるような形にしたいということで仕出しを始めて。

# 近藤

根羽村自体の枠の中で天下杉やきくの会とか、森林組合とかを考えた方がいいかなとちょっと思ってて。というのは、20年ぐらい前、東海豪雨の後に行って村長に会いましたけど、実はあの頃に流域でこれだけ森づくりに対して首長が発言しているのは見たことがない。

# 洲崎

だって、村長が森林組合長と漁協の組合長と兼ね ているんだもんね。

# 高橋

すごい社会だよね。だからといって古くなくて新 しいんだよね。へんに凝り固まってなくてね。

#### 沖

優しさがあったの。きくの会も、よその葬祭場(飯田市)へ行くと、(高齢でそこまで行けなくて)お別れができないっていう人たちがいるから、地元でやれるようにしたいと、葬式の料理を作り始めた。その発想が、すごく地域に優しい。

# 近藤

だから結果として根羽村だけで自立できる社会を 目指しているという。だからコロナとかになって行 き来できなくても根羽村だけは絶対大丈夫。

# 洲崎

近藤さん作成の資料の中で東日本大震災っていうのと、コロナっていうのがこの10年ではすごく大きくなってて、そんな中で自立できる流域に対するニーズというのがますます高まっていて、そういう暮らしに魅力を感じる人もこれからまたどんどん増えていくでしょうね。

# 近藤

次の10年を考えた時、実はこのコロナがすごい 大事なターニングポイントになるような気がしてい て。価値観の転換ってまだ見えないけど、何となく 起きそうな気がするんだよね。今まで世界中でやっ てきた、グローバル経済でモノを回すことが否定さ れているわけだから。

# ●田舎だからこその支え合い

#### 洲崎

そういう意味で、この取材した 102 団体もあち こちで重層的に結びついている。これはすごく面白 かったですよね。ちっちゃい集まりだからこそ、お 互い支え合ってやっていく。

例えば「みどりの里」(※)は農福連携ということで支え合っている。そもそも豊田で展開している地元密着型のスーパーマーケットで、自前の農業法人を抱えて、自然栽培、完全無農薬無肥料の作物を作るということがすごい。自然栽培の農業はものすごく手間が掛かるので、知的障がいがある人たちの支援をしている社会福祉法人とタッグを組んで、障

がいのある人たちが そういう地道で細か い作業とかがすごく 上手な人もいっぱい いるので、お手伝い をしてもらって賃金 を払う。お互いのた めになるような関係



みどりの里の作業風景

をつくっているというようなことがこの流域で実現していると分かったのもすごくうれしかったですね。

他にも、「畦道」(※)とか「NPO法人あさひ」(※)だとかも。田舎とか農業をやる場所があることを活用して、障がいのある人を支える仕組みというのが出てきてますね。ちゃんと仕事してもらうような段取りができれば、働ける場所はあるのでできるのかなというのはすごい思いましたね。そのNPO法人あさひで収穫したクルミの実を、「ターンのお母さんたちがお菓子を作っている「すぎん工房」(※)に卸したりとか、そういう連携もあるんですよね。ちっちゃなグループ同士なんだけれども、助け合いというのがお互いを支えているのかなと思います。

# 浜口

人口が少なくて、顔の見える関係が比較的つくり やすいから、そうやってどんどん連携ができるのか なっていう気もします。

# 洲崎

首都圏とかだと人が多すぎて、自分にマッチした 活動をしている人がどこにいるのか分かんない。人 口の少なさを逆手にとってるのかもしれない。

#### 浜口

あとやっぱり時間的にというか、心にも余裕がある。障害をもっている人たちとゆったりお付き合いできるゆとりがあるのかなと思う。

## 洲崎

M-easy の戸田さんたちの仲間の中で出てきた言葉で「田舎にいるとなんとなく子どもが欲しくなる」って。いつも身の回りのことに追われるような暮らしではないから、なんだか子どもが欲しくなるって。

#### 沂藤

昔、私が若かった頃に言われた「田舎のわずらわしさ」。何でもばれてしまう、情報が伝わってしまう。だからみんなわずらわしくて自分の自由も持てないのが嫌で都会に出て行くっていう構図があったじゃないですか。今でもあると思うけど。

Clear Water Project の瀬川貴之くん、田中五月くん(事例集取材者)が、東京の超大手IT会社を辞めてこちらに来て起業したんだけど、それは田中くんの夢枕に子どもが立って金は稼いでくれたけ



Clear Water Project の HP

ど、こんな社会をつくっちゃったね」と言ったと。 それ、子どもの声じゃなくて自分自身の声だろうっ て。

今、生き方自体の改革で、わずらわしい田舎の暮らしというよりは、新しい生き方を見つめるために地方に行きたいみたいなのはある。すごい千差万別の考え方で来ていると思うけど。

# 浜口

渋澤寿一さん (NPO 法人 樹木・環境ネットワーク協会) が「わずらわしさとありがたさは表裏一体」と講演会で言ってたのが印象に残ってて、わずらわしいからといってそれを避けて都会の生活を求めても、メリットの部分である面倒を見てくれるとか、田舎のセーフティーネットみたいなところが得られない。やっぱり表裏一体のものなんだというのが印象に残っている。

#### 近藤

だから、コロナもそうだけど災害が起きたときに、都会にいるときのデメリット、逆に言うと地方にいるときのメリット、デメリットが両方あって、少なくとも田舎では孤独死はしないよね。これだけいろんなことが起きてくると、生き方自体を考え直してきているのかなと思う。

#### 洲崎

なんであえて田舎に来るかねっていう感じだったですよね。もともと事例集というのは、持続可能な流域づくりにつながるような活動をしている人たちの記録をちゃんと残して、そこのサポートができた

り、お互いが助け合うような、情報を提供するネタ 元になればと思ったんだけれども、事例集で目指し ているような生き方をみんなが目指すようになって きてるのかもしれない。

# ● 役所ができないから地域でやる!

#### 浜口

恵那市串原は移住者が多くて空き家がなくなり、 待っている移住希望者がたくさんいる状態。古民家 リフォーム塾をやってきた「NPO 法人 奥矢作森林 塾」(※)は大島光利さんが注目されがちだけど、 光利さんの奥さん、初美さんも移住者の相談の窓口 になってた。奥矢作湖のそばでレストランをやって たんですよ。気軽に行って相談できる場所・人だっ たので。移住者の女性たちを集めて郷土料理を作る 会を定期的に開いて、つながりの場をつくっていた 人なんですよね。自分がレストランをやめた時に、 レストランの厨房で使っていた資材を当時 "開か ず"の郷土資料館(市所有)だったところに移して、 カフェが始められるように準備をしていた。そこに カフェをやりたいという移住者がきて、今、人気の 「サトノエキカフェ」になっている。そして今や移 住者たちのネットワークができていて、大島夫妻に 相談に行くんじゃなくて、移住者の中で相談事がさ れている。

# 沂藤

そのカフェは京都から来た移住者がやってた。その時に覚えているのが、そこにちっちゃな子どもがいて、すごい人懐っこい子だった。「こういう子なんですね」って言ったら、「いや、京都にいる時は



サトノエキカフェ

こんな子じゃなかった」って。ここに移り住んで、 地元の祭りに入れとか周りの人にかまってもらっ て、「こんな子になっちゃいました」みたいな。あ れはすごい田舎の力だなと思って。

### 浜口

奥矢作森林塾は今やもうスタッフ全員移住者なんですよね。大島さんの名刺には肩書きが OG と書いてあって、読み方は「おじい」らしい (笑)。ちゃんと移住者を影で支えるみたいな役割に退いて、移住者たちが奥矢作森林塾をやっている。

結局、合併で地域の細かいことを役所が担えなくなったわけですよ。それを NPO が、地域の課題は役所ができないんだったら、我々がやるしかないっていうことで、いろんな事業が派生しているんですよね。

#### 洲崎

なんかさっきの隙間産業とちょっとつながってくるところがありますよね。行政だと担当者が変わっていくので、地域がやれることは地域が続けたほうが、暮らしの質は維持される。それはやっぱり持続可能なんですよね。

#### 近藤

確かに合併が実は全体の矢作川流域圏でも大きな 転機になると思ってて。やっぱりそれは豊田を見て て思うんだけど、昔の役場は支所とかあるんだけど、 どんどん支所機能がレベルダウンしていく。どんど ん人を減らして、なかなか目が行き届かないという 状況が起こっていたから。

#### 洲崎

そんなふうで、この 10 年で流域の中で何が起き ているかというのが事例集を作っていく中で見えて きて、なおかつ災害があったり、合併があったこと で社会情勢そのものも変わってきて、事例集で紹介 されているような小さな地に足のついた動きをして いる人たちの存在意義というか、存在価値というの が多分高まってきているような感じがしますよね。 地域にとっても彼らが必要であるっていう、そうい う必要性、重要性が増しているのかなという感じが、 今お話を聞いているとしました。

## ● センター機能の必要性

# 洲崎

それで、3番目の今日のテーマで、センター機能というようなことをもつところがあるといいかなという話題が出ています。流域圏懇談会に山・川・海の三つの部会がある中で、山では M-easy の戸田さんとか、2013年にはおいでん・さんそんセンター(※)ができました。

実はおいでん・さんそんセンターは私たちのお かげでできたんですよ。それはなぜかっていうと、 2010年に山本シゲ(薫久)さんが田舎とまちの交 流を強化して、持続可能な豊田をつくろうというこ とで、「いなかとまちのシンポジウム」というのを 足助でやったんです。私は森の健康診断とかで関わ りがあったのでその仲間に入って、3年続けて足助 でやったんだけども、どうも同じようなメンツが同 じ場所に集まって同じような話をするだけになって しまって、マンネリになってしまうと。もっと全然 違う切り口でやった方がいいんじゃないかというこ とで、2013年から「いなかとまちの文化祭」を豊 田市の駅前で始めた。足助でイベントをやって来る 人はある程度素地があって、田舎暮らしに興味があ るような人ばっかりになっちゃうので、まちの中に 行ってもっと門戸を開いて、ちょっと田舎に関心が あるけど、どういうところがあるのか、何ができる のか知らない人たちにも気楽に楽しく田舎の魅力を 伝えられるようなことをしようと思って「いなかと まちの文化祭」を始めた。

そんなふうに、田舎とまちの交流を通じて地域を 元気にさせるようなことを行政でももっとしなくて はならないのではないかと、当時、もうすぐ定年を 迎えつつあった鈴木辰吉さんが思った。定年退職し



2018.11.24 第7回いなかとまちの文化祭山で木材を運び出す「馬搬」の馬も登場!

たら、そういう田舎とまちの交流を推進する部署を 立ち上げてそこのセンター長をやろうと。できたの がおいでん・さんそんセンター。

センターができて、シゲさんたちが民間でやっていたような都市と農山村の交流の活動をある程度、おいでん・さんそんセンターが肩代わりすることになったので、シゲさんたちの活動も整理縮小することができたというような流れがあります。

川に関しては、現時点でセンターを想像するのは難しいと。川というのが線上に展開している空間であるのと、場所ごとにすごく課題が違ってしまって共有するのが難しいというのが背景にあるんじゃないかというような話も編集委員会で出ました。

#### 沂藤

センター機能が必要なのは川じゃないと思っていて、いわゆる都市域のまちづくりというか、都市域全体を考えるのがセンターでその一部に川があるというふうにしないと、川辺ばっかりやっていると、第2時代のように偏ってしまう気がしてて。

というのは、やっぱり流域圏懇談会もそうだけど、これから都市をどうやって巻き込んでいくか。なぜそう思うのかというと、矢作川流域圏懇談会でおんなじことをずっとやってたって、多分、このセンター機能というか、ネットワーク自体は絶対だめで、次にどうするか、前に進むとか広がるっていうことを考えなきゃいけなくて。ネットワークって所詮身内でつくっているもんだから、身内から外をどうするかっていうことを考えなきゃいけなくて。実は次の10年を考えたとき、それが一番大事だなと。

# ●次のステージに向けて

# 洲崎

では、4番目のテーマ、今後の10年ということで、 いかに都市の人を巻き込んでいくかというのと、そ れはきっとダイレクトに関わってくるんですよね。

#### 近藤

関わってくる。なんでそう思うかというと、矢作 川がこの10年、やっぱり丹羽健司さんの存在とか 今村さん、流域が違うけど曽根原さんの存在が大き くて、彼らは巻き込み屋なんですよね。森の健康診 断とか木の駅を通じて、それを地元でやりたがっている人をその気にさせて巻き込むというのがとてもうまい。問題は都市の人とか、そこにいない人たちを巻き込むのは得意じゃないんだよね。そういった人たちにどうやって広めていくかっていうのが次の課題になって、そういう意味でのセンター機能。

#### 洲崎

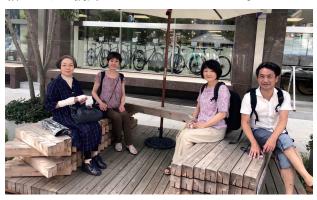
都市の人たちを交流人口として巻き込んでいくみ たいな感じ?

#### 近藤

我々が気が付いたことをどうやって伝えるかっていう話かなと。都市の人に何らかの役割を果たすっていう。

#### 洲崎

この事例集の取材団体の中では、「旭木の駅プロ ジェクト」(※)で出てきた材で、名古屋の長者町 のウッドデッキを作るなどまちづくりに活かしてい くという流れができていて、それが一つ先進事例か もしれないと思います。名畑さんもメンバーの一人 ですよね。長者町(繊維問屋街)もどんどん繊維産 業が衰退していってまちの元気がなくなる中で、商 店の人たちがまちを活性化しようと取り組みを始め ていて、その中で名古屋大学の「都市の木質化プロ ジェクト」の先生たちも入って、愛知の田舎の材を 名古屋で使おうという流れになった。長者町の人た ちが、もらった材でウッドデッキを作るだけじゃな くて、この木の出所の山はどうなっているんだろう といって、旭に泊まりがけで毎年来て、現地を見学 して、森の健康診断なんかを体験したりするように なった。そういうふうな形が、まちなかと田舎とを 結びつける機会の一つなのかもしれない。



長者町のウッドデッキ

#### 名畑

ぎすぎすした商売人が可愛くなって帰ってきました(笑)。

#### 洲崎

ここのところは冬場に旭に行って、雪が降った時に森の健診体験とかして、尻もちついて泥だらけになってみんな大喜びしてて。すごい楽しそうで。確かに雪が降った山里の光景ってすごいきれいで癒やされる。そういう体験がとても新鮮だったみたいで。長者町の山を旭に持てないかというような話も出てきたりしていて。そういうのがあちこちで増えてくるといいのかもしれないですね。

## 中田

ひと休みできるようなまちなかのベンチを設置する助成金を世田谷区が出していて、そういうのに流域の上流の木を使ってやってみたら面白そうだよねみたいな話は都市の人の中でも出ている。多摩川だったら上流の小菅村から森林組合を通じて買ってやりましょうかみたいな話も出てきているので、そういう可能性はここだけじゃなくて、他の流域単位でもやれる。さっきの話のように、コロナのみんなの思いが変わっていくタイミングとかにそういうのがつながると面白いことになる。そのきっかけにこの矢作川流域圏懇談会がなっていったらいいなと思って。

# 近藤

いわゆるまちの中の商店街って山奥の過疎地と似ているところがあって、空き家が多い。

#### 洲崎

そうそう。その過疎高齢化のまちと田舎がつなが るっていうのは一つのアイデアかもしれないです ね。

シゲさんたちが、今、萩野地区で「萩野 NPO 結の家」というのをやっているんだけど、豊田って古い農村舞台がすごくいっぱいあって、そのでっかいやつを一つ復興したんです。彼らの NPO の力で。そこで橋の下音楽祭のライブをやってる若い人たちを呼んでライブをさせるというのを去年やってたんですよ。田舎の元気になったスポットにまちの人を

呼び込むというのがあると、そこがまた交流の場に なる。

実は豊田スタジアムで開催してるトヨタロックフェスティバル、また取材するといいと思うんだけど、その首謀者は足助の山の方の出身なんですよ。今は豊田のまちなかに住んでるけども、すごく足助の田舎に思い入れがあって、定期的に帰ってそこを再生させるっていうような取り組みをやるようになったんです。

そういうふうに、今ある田舎とまちのナチュラルな交流みたいなものに注目をしていったり、応援したりすることができるといいかもしれないですね。

### 近藤

そうそう。だから今、懇談会の中のメンバーだけのつながりで何かこれから新しいことっていうより、もっと外に広がって、そことの新しい化学反応だったり、新しい発見をつないでいって、もっと広がっていくといいなと漠然と思っているんだけど。

# 洲崎

今後の事例集の取材は流域内にこだわらなくて、 流域と関わり合えるようないろんな、特にまちなか とかにスポットを当てると面白いかもしれないです ね。

## 近藤

年に一回、その交流会みたいな形でそういう人たちに矢作川流域圏に来てもらって楽しいことをやるといいんじゃないかな。それこそ、いなかとまちの文化祭みたいに、いなかと大都会の文化祭を。

#### 洲崎

そういえば、ちょっと前に名古屋の駅前を歩いていたら、歩いている人の声が聞こえてきて、どうも名古屋に初めて来た知り合いだか仕事仲間に話しかけてて、「ここすごい大都会に見えるけど、車で15分も行ったら田園地帯だからね」って(笑)。これはすごい名古屋圏の魅力だなと思って。大部分が愛知県に含まれる矢作川流域圏ならではの田舎とまちの近さっていうのを打ち出した交流ができると楽しいのかなと。

#### 近藤

その話、今日の一番いい発見かもしれない。

# ●名畑さんのグラレコの解説

# 名畑

全体を通して大事なことを 8 カ条にまとめました。

# 1.「担い手調査からセンスとスキルをまとめる」

例えば曽根原さんの「巻き込み力」という「センス」がすごいけど、それは多分アイデアをさっさと形にしたり、思いついたら即実行っていう「スキル」みたいなものがあるんだろうなと。そういうふうに事例ごとにセンスとスキルがあるというので分析できそうだなと思いました。

## 2.「仲間を増やすキーパーソン」

仲間を増やすことが上手なキーパーソンがいっぱいだと思うんですけど、ポイントは若者とよそ者と女性、おじいちゃんという事例も。特に女性がポイントだよという話がありました。

## 3.「異質・スキマに注目!」

「異質」とか「スキマ」とかに注目しようという ことで、アートとか文化とか音楽っていうものが新 しい価値観として大事だよねっていう、怪しさの魅 力みたいなのも新しいなという話がありました。

# 4. 「転換点の分析を!」

コロナとか災害とかで生き方の転換という話が あったんですけど、やっぱり「今どういう転換点に



きてるのかという分析」が必要だなと。それを 10 年のビジョンにしていくんだろうなということでした。

## 5.「話の記録を名言集へ」

天下杉の「自分たちが楽しまなきゃ人を楽しませることなんてできない」とか、そういう名言集ができるといいなという話がありました。

# 6.「グッドなつながりポイントは、農+福/若者+行政」

農業と福祉とか、若者と行政とか、そういう「グッドなつながりポイント」をつくるには、一人ひとりを主役にしたり、語り合う場をつくっていくことが大事だよという話がありました。

# 7.「工夫しよう、都市と田舎のナチュラルな出会い」

この「ナチュラルな出会い」というのがとて も大事だなと思いました。

# 8.「むずかしさ、わずらわしさを楽しむ生き方 の転換を伝えよう!!」

むずかしさやわずらわしさを楽しむっていう こと、そういう生き方の転換を今の若い人たち に伝えようということがすごく大事で、SNS の ツールを使ってという話もあったり、そうい う昔のわずらわしさが逆に今新しいみたいなこ との発信ができるんじゃないかなあというふう に、聞いてて思いました。 全体的に、近藤さんが話してくれた矢水協時代、 豊田時代、豊橋河川事務所時代と進んでいく中で、 スキマとか新しさがたくさん出てきたりとか、環境 とか水の抱える課題が多様化してきて、小さな地に 足のついた活動の重要性が見直されるっていうこと が事例集の最も伝えたいことなんだろうなと思って 聞いてて感動しておりました。

では、最後に 8 カ条の頭文字をつなげます。担い手の「に」、仲間の「な」、異質の「い」、転換点の「て」、話の「は」、グッドの「ぐ」、工夫の「く」、むずかしさの「む」ということで、

「にないてはぐくむ」!

# 全員

素晴らしい!(拍手)





# 3. 新たなステージへ

# 年齢を忘れた 10 年間、新たな希望にワクワク

山部会・市民部会 水と緑を守る会・岡崎 沖 章枝

# ● ワクワクした10年間

今年の敬老の日、住居地の町内会から記念品と 共に地元の小学生の手紙が届きました。「おばあさ ん お元気でながいきをしてください」。

小学4年生の男の子からでした。「おばあさん? わたくしのこと?」。昨年も同じように届いていた はずなのに全く記憶に残っていません。今年はコロナ自粛の影響で私自身が家籠りをしていたおかげで 自覚できる余裕があったのです。私はいつの間にこ んな老齢になっていたのかしら?

思い返せば、この10年間ワクワクして私の好き な山村を飛び回ることができました。なにかができ るわけでなく、ただ矢作川流域圏懇談会の集まりに 参加して、ここで得た知識や流域山村の先進的な取 り組みの事例などの資料を関係する機関やここと思 う団体に届けることに意義を感じて、すっかり夢中 になって過ごしてきたようです。

# ● 流域圏懇談会は学校

私にとって矢作川流域圏懇談会は学校です。県境や市町村自治体の垣根を越えて、「流域は一つ運命共同体」の認識のもとに官庁、関係団体、住民が共通のテーマで考え話し合う定例会は刺激的なことの連続でした。私は専門的な知識もなく、実のある行動の実績などのない平凡な主婦ですから、定例

会の開催地が輪番になっていて、普段は訪ねられない上流部の根羽村や岐阜県恵那市へ目的をもって訪ねられることも魅力の一つでした。実際、隣接の自治体なのに新聞の情報以外の何も知らずにいた豊田市の森林施策や、様々な活動団体があって多様な取り組みをされていることを知り驚きました。 この背景には2000年の恵南(東海)豪雨災害

この背景には 2000 年の恵南(東海)豪雨災害があったことを後年に知りました。鈴木前豊田市長さんから「豪雨のあった朝、矢作ダムを放流しなければ決壊するかもしれないという連絡を受け、決断を迫られた私は矢作川を見ていた。濁流は市街地の堤防を越す勢いで迫っているのに、市街地へ勤務する車の列は川に目をやることなく、どんどんどんどんだんだいて入って来た。ダムは放流することなく決壊を免れ、市街地は水害を受けることなく済んだ。矢作ダムが想定したより強かったから救われた。この時、もっと山に税を投入しなくてはと決意した」と伺って感銘を受けました。2015 年矢作川「川会議」の場だったと記憶しています。

# ● 交流のきっかけとなった事例集取材

その土地の空気にふれ、歴史にふれ、地域の人びとにふれ、それぞれ地域の実践を学ぶことは流域を結んだ仕組みがなければ体験できないことです。

事務局に国交省豊橋河川事務所、流域の各県・

各市町村・各関係団体と住 民といった広範な構成に加 えて、学識者の方々の貢献 度が高いのに人間関係はフ ラットです。だから長く続 いてきたのではないかと思 います。

懇談会は、山部会、川 部会、海部会、市民部会で 構成され、希望すれば自由



山部会 WG の後の宿泊飲み会(奥の中央が筆者)



ぬかたブランド協議会の事例集取材 (岡崎森林組合にて)

に参加できるように開かれているのに、私自身は山 部会と市民部会の参加だけで出席日も多くなく、惜 しいことをしたと今になって悔やんでいます。

2013年から始まった「山村再生担い手づくり事例集」の作成メンバーに加えていただき、流域で活躍する人や団体を訪ねる目的が増えたことも張り合いになりました。2,3人組でインタビューするのは愉しいけれど、一編の報告書にまとめるのは苦しいというのが本音ですが、取材先の方とその後も交流が続いています。

# ●山のにぎわいを取り戻すために

私は、30年近く前、水道水の水源地域がゴルフ場開発される危機感もあって市民運動型の環境団体を立ち上げました。阻止するような力量はなく、不定期の通信を発行したり、簡易の水質検査をしたり、ゲンジボタルの保護に努めたりしてきました。

21年前、埋め立て処分場の予定地となっていた 谷地田の計画が取りやめになったことがきっかけで 耕作しなくなった田んぼを地主さんから託されて、 ボランティアを募って古代米作りを始めました。こ んな小さな団体になぜ矢作川流域圏懇談会加入のお 誘いがかかったのか分かりませんが、誘ってくださ ったことに感謝しました。

私が役所に勤めていた頃(愛知県職員)から好きだった岡崎市の水源地域の旧額田町は、合併以後、精彩を失っていくようで、訪ねるたびに辛くて、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の一節の「ヒデリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ」の心境でした。私は、林業で活気があった1960年代の額田町を見ています。山のにぎわいを取り戻すことはできないものかと思ってきましたから、きっかけをいただけたのがうれしかったのです。



古代米作り

#### ●何よりも優先させた懇談会

蛇足になりますが、2005年から2013年まで学生時代の友人10名で、松尾芭蕉の『奥の細道と歌枕』をたどる旅をしました。当初は年2回、途中からは1回になりましたが、2泊3日の行程で芭蕉が訪れた主なゆかりの地と歌碑をたどる旅でした。旅の行程と資料の作成、現地の案内担当を輪番制にして、芭蕉が半年間で廻った旅程を11回に分け、2回の番外編を加えて9年かけての旅となりました。番外編は佐渡島と芭蕉の墓がある大津市の義仲寺でした。

この旅の10回目、"小松から敦賀"の行程の最終日は、あいにく流域圏懇談会山部会と重なってしまいました。この日、私は福井駅で始発列車に乗って戻り、山部会に出席しました。文学に心得のある人からは「愚かなこと」と軽蔑されるでしょう。私が行程を中断したところは『奥の細道』のクライマックスと言える名所、芭蕉が敬愛する西行の歌枕"ますほの小貝の色の浜"でした。私が流域圏懇談会に抱いた思い入れの記憶です。

# ●新しい流れ

私が仲間と赤米作りをしている田んぼに30代の後継者ができました。農薬アレルギーで祖父母の代から続く自家の田んぼでは米作りができないという深刻な事情があります。地主さんの了解を得て耕作を任せることにしました。仲間たちも寄る年波に勝てず田んぼの整備も難しくなってきています。良い機会と思います。新人の山本亮佑さんはハーフのミュージシャン風ですが、唐澤晋平さんの(一社)奏林舎で間伐の仕事をしていることが分かりました。山仕事が向いているといいます。

6年前に始まった「額田木の駅プロジェクト」の



奏林舎の仕事の一つ、作業道開設と間伐

定例会の参加者つながりのおかげで、昨年、愛知県 の木材を利用した山里学童クラブが名古屋市内に誕 生しました。そして現在、名古屋市内に3軒目の 学童保育所を建築中と聞きます。

昨年は、旧額田町の形埜地域に「ベーぐる庵」 というパン屋さんが誕生しました。今年7月には、 店舗一つない千万町町集落の奥に「茶流香」がオー プンしました。どちらの店も I ターンの女性オーナーです。地元材をふんだんに使用したおしゃれなお店です。訪れるお客さんは都会風のおしゃれな女性グループが多いです。

来年には「流域圏担い手づくり事例集」の取材 先が一気に増えそうな気配です。次の10年に先駆 けて、新たなつながりを写真でご紹介します。

# 移住者による地域のにぎわいの場



べーぐる庵のコンセプトは「田舎と街をつなぐパン屋」。持ち山の木を使ったイートインスペースには、オーナーが手作りした椅子とテーブルが置かれている(べーぐる庵 HP より)



地元材を使って古民家を改装したネパール喫茶「茶流香」(Google マップより)

# 森林と都市の子どもの居場所がつながる



額田木の駅プロジェクトの土場(HP より)



名古屋市昭和区にある「山里学童クラブ」。愛知県の木材を活用して建築された学童保育所第1号(額田木の駅プロジェクト HP より)





名古屋市緑区にある「あおぞら学童保育クラブ」。額田の木材を活用して建築された(写真提供:唐澤晋平)

# フェアトレード木材「リタウッド」が岡崎市の市民サービスコーナーに

奏林舎がコーディネートを担っているフェアトレード木材「リタウッド」は、岡崎市額田地域産の枝打優良ヒノキ材を活用した高品質な内装材。2020年10月にイオンモール岡崎内にオープンした岡崎市の市民サービスコーナーに使われている。(奏林舎 HP より)





# 森林と都市のまちづくりがつながる

名古屋市の長者町と呼ばれる錦二丁目では、2011年からまちづくりの一環として「都市の木質化」に取り組んでいる。主体となっているのは、「錦二丁目まちづくり協議会」。名古屋大学の「都市の木質化プロジェクト」と連携し、行政、豊田森林組合や旭木の駅プロジェクト(豊田市旭地区)など木材供給者ともつながって、ウッドデッキを設置するなど街の木質化を進めている。

活動は、実際の木質化だけにとどまらず、年に一度の「長者町ゑびす祭り」では、薪割り体験や木を使ったワークショップを実施。協議会メンバーが旭地区に行って森の健康診断や山菜摘みツアーに参加するなど、木と親しみ、中山間地との交流を進めている。

2020年3月22日、長者町のストリートウッドデッキが更新され、3代目が完成!都市の環境で自然乾燥された2代目ウッドデッキは表面を削って生まれ変わり二次利用される(都市の木質化 project Facebookより)





協議会メンバーが参加して行われた「森の健康診断」 (豊田市旭地区)

# おわりに



山部会 10 年誌編集委員 豊田市矢作川研究所 洲崎燈子

この 10 年誌をまとめるのは、予想していたよりはるかに大変で、はるかに楽しく、とてもエキサイティングな作業だった。それは編集が進むにつれて流域圏懇談会と、この会を支えてきた人たちのあゆみがどんどん形をなしてきたからだった。

この冊子の編集委員は山部会の私、川部会の近藤さん、海部会の高橋さん、そして編集長はライターの浜口さんがいいのでは、と提案したのは事務局補佐の中田さん。2019年4月に、岡崎市額田地区で開催された流域圏担い手づくり事例集交流会でのことだった。この年の夏から約1年半の間に、オンラインも含め14回の編集委員会が開かれ、座談会が催され、大量のメールがやりとりされた。他の編集委員も揃って、この冊子づくりにのめりこんでいたと思う。

同じ流域をフィールドにしているというだけで、立場も専門も異なる人たちが、どうして 10 年間も一緒に、精力的に活動を続けてこられたのだろう。この流域をよりよい場所にしたいという思いを共有しながら、異業種の人びとと集う面白さがあったことも一因だろう。しかしそれだけではない。本誌の 2 章では事務局の、3 章では各部会の座長の、4 章ではキーパーソンの皆さんの思いや試行錯誤、時には悪戦苦闘の軌跡を読み取ることができた。この懇談会が続いてこられたのは、その賜物ではないだろうか。私にとって、所属する山部会の運営に関わることは楽しみであり、心の拠り所にもなっているが、これだけ多様な人たちが懇談会の活動に意義を感じ、関わり続けてきたことを確認できたのはうれしかった。

また、自分が携わってきた6冊の事例集づくりの成果をふりかえることができたのも大きな収穫だった。この事例集の目的は、持続可能な流域づくりに関わる団体の取材記録をまとめ、流域内のネットワークを強めることで自治力を高めることだったが、冊子をつくること自体が直接そのような成果につながるわけではないという葛藤があった。5章では事例集のコンセプトと活動団体の一覧を紹介し、6章ではいくつかの取材先団体に共通するキーワードや傾向から、これからの流域づくりにつながるヒントを見いだすことができた。それは、山(里)、川、海のエリアだけでなく、街を巻き込むことで、流域の自治をもっと進められるのではないか、というはっきりした確信だった。

あらためて、この冊子の作成にご協力いただいた皆さんに心よりお礼を申し上げたい。それから、この冊子を読んで、「うちの流域(地域)でもこんな会をつくりたい」と思ってくださった方に、「きっとつくれますよ」とお伝えしたい。これまで私たちが事例集で取り上げてきたような、地に足のついた、身近な人とつながる暮らしの中で幸せを感じながら生きている人たちはどこにでもいる。そして、集まった人たちがどんなに少なくても、できることは必ずある。大地に刻まれた「流域」という単位の中で、人任せにするのではなく、自分たちでできることを少しずつでも増やすことが、「お金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進む」(流域圏担い手づくり事例集前書きより)未来につながる。

あなたも、同じ流域に住むステキな仲間とともに、そんな未来を目指してみませんか?

# 矢作川流域圏懇談会 10 年誌

# 矢作川がつなぐ人びと、未来へのキセキ

2020 年 12 月 初版発行 2023 年 10 月 第 2 版発行



企画・編集 矢作川流域圏懇談会 10 年誌編集委員会 (近藤朗、洲崎燈子、高橋伸夫、中田慎、浜口美穂)

本文レイアウト 浜口美穂 表紙・裏表紙 コノハ美術 章扉デザイン・はぎぼうイラスト こいけやクリエイト

発行者 矢作川流域圏懇談会事務局 国土交通省豊橋河川事務所

〒 441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 TEL 0532(48)8107 FAX 0532(48)8129 http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/

※矢作川流域圏懇談会についての詳細はホームページを参照してください。



表紙写真 棚尾橋(愛知県碧南市)から矢作川上流を望む(2019 年 10 月 1 日撮影) 裏表紙写真

- 1. 天竜川鵞流峡竹筏下り 2. 山部会 WG・アライダシ原生林 3. 根羽村どこでもサウナ
- 4 5 6 4. 川部会 WG・岩本川視察 5. 川部会 WG・岩本川視察 6. 合同部会 WG・伊賀川
- oxedge 7 oxedge 8 oxedge 9 7. 事例集交流会・佐久島おひるねハウス 8. 山・海合同 oxedge WG・トンボロ干潟 9. 吉田海岸・アサリ

